
萌え絵師への道

昔昔亭或処

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

萌え絵師への道

【Nコード】

N5572S

【作者名】

昔昔亭或処

【あらすじ】

売れない少女漫画家のあたしが、なぜか萌え絵師を目指すことになりました。それもこれも、本業は格調高い純文学の作家先生が気まぐれにライトノベルをお書きあそばされやがったおかげです。スイマセン今からでもこのオシゴトお断りするわけにはいきませんか。

ぶろろーぐ

……どうしてこうなった。

通帳を眺めて、愕然とした。

やばい。

今きつとあたし人生の岐路に立たされている気がする。

アタシはイワユル駆け出しの少女漫画家で、ぶっちゃけて言えば売れない漫画家で、正直に言えば年に一本雑誌に読みきりを（しかも予定していた作家さんの穴埋め代原とかで）載せてもらうのが関の山の、プロを名乗るのもオコガマシイ自称漫画家だ。

絵は、そこそこ上手いと思う。つつか客観的にも評価は高い。

が、問題はストーリーである。自分でも分かっているけれど、面白くない。どうしたら心に響く面白いモノができるのか、試行錯誤を続けている。

……続けている。うん。自分が頑張る限り、夢は終わらない。は

ず。だけど。

そろそろ、夢を追うのもどうだろうかという年齢だ。

同級生たちは結婚して家庭に落ち着いていたり、社会でバリバリ働いていたりする。

なのにアタシは、雑誌の細々したカットのお仕事とコンビニのバイトで食いつないでいる。

あたしの夢を応援してくれていた両親も、どうやら引き際を見極めようとしている気配だ。いつ引導渡されるか。

そんな切羽詰った状況。絵の仕事ならどんなものでも請け負って当然だ。少女漫画に拘ったりしない。拘れるご身分じゃないのは重々自覚している。

でも。

やっぱり、あれだけ追い詰められていなければ、あたしはあの仕事を引き受けなかったんじゃないかと、後々になって考えた。

後悔先に立たず。一寸先は闇。あるいは、……人間万事塞翁が馬。

事の発端は、顔なじみの編集さんからの一本の電話だった。

漫画家人生の、もっと大きく言ってあたしの人生でのターニングポイントとなったお仕事は、こうしてアタシの元に舞い込んできた。

#いち

「やーごつめんねー？ 急に呼び出してダイジョウブだった？」

7つ年上のオネーサンは、最初に雑誌社の新人賞に応募したときからの付き合いだ。あたしが夕方から深夜のコンビニのバイト以外には決まった予定などないと当然知っている。

『オネーサン』と呼んでいるが、本名は『緒^{おね}峯』さんだ。

出版社近くのカフェは、外で打ち合わせるときの定番。カフェと看板を出しながらも、今テーブルに運ばれてきたのが緑茶なのも、定番。

「全然平気です。で、お仕事の話、だそうですけど？」

つい先日にもネームを持ち込んでクソミソに駄目出しされたばかりだ。まだ新しいネームはできていない。

「うん。時間も無いことだし、チャキチャキ進めましょうか」

アタシは時間有り余ってるんだけどね。でもやり手の編集サンとか急なお声かけりのお仕事とかの方には時間が無い。

「はい。で、どんなカットですか。サイズと枚数は？」

差し詰め雑誌の小カットだろうと聞くと、オネーサンは首を振った。

「違ふのよ。説明するとちよつと面倒なんだけど、盪回しに回ってきた話だね。嫌なら断つてくれてもいいんだけど」

と、前置きされて、どんな無理難題が、と身構えた話は、挿絵のお仕事だった。

なんだそんなことなら、と軽く頷いたが最後、ガツシと腕をつかまれて、そのまま出版社に引きずられた。

「アナタなら引き受けてくれると思ったのよ大丈夫よアナタならきつと簡単だわ詳しい話は担当がするから」

と言いつつ、この逃がすまいとする態度。ここに至つて鈍いあたしの脳味噌が危険を察知したけれど、オネーサンが今更逃がしてくれるはずも無かった。

#に

漫画雑誌の編集部には時々お邪魔していたけれど、連れて行かれたのは初めて踏み入れるフロア。

「ふじの籐埜さん、連れてきたわよー」

周囲を見回す余裕も無く、衝立に仕切られたブースに座らされた。

「あ、あの、オネーサン、ちょ、あたしトイレ」

腕を放してくれないオネーサンに訴えてみたけれど、『籐埜さん』と呼ばれた誰かがブースに来るほうが早かった。

「引き受けてくれたんですね！！　ありがとうございます！！！」

目の下にクマ飼ってる、いかにも胃に穴が開いていそうな華奢な男の人が、縋りつかんばかりの勢いで突っ込んできた。

おう。ゾンビかと思ったよ。お陰でトイレに逃げ損ねた。

「……オシゴトの詳細をオネガイシマス……」

救世主を拝む姿勢のゾンビを無碍にもできない。

実際、今のあたしは仕事を選ぶご身分ではない。絵のお仕事なら何だってやりましょう。

これほどまでに編集さんを追い詰める『小説の挿絵のお仕事』と

やらがどんなのもか、あたしには想像もつかないですが。

#さん

オネーサンとバトンタッチした藤埜さんが、息も絶え絶えに説明するところ。

なんでも普段は高尚な純文学をお書きあそばされる大作家先生が、何を思ったかイキナリ少年少女向けの小説を、所謂ライトノベルを書きたいと仰ったそう。

曰く、最近の若者は高尚な文学を毛嫌いし情弱なモノばかりを好む、これはけしからん、これは幼少の頃より良き物語に触れていないためではないのか、ならばこの私が一肌脱ごうではないか、ライトノベルを装いつつも深遠なる純文学の片鱗をキラリとちりばめた良質の若者向け大衆小説を書いて進ぜよう、とな。

この発言は藤埜さんフィルターのような気がするけど、とにかく、ラノベ風の良質な小説を書きたいそう。

そこはソレ、出版社としては、売れない純文学より売れるラノベ、大作家先生の実力は本物なのだからライトノベル風でも充分と踏んだ。

そして企画は、ペンネームを変えて期待の新人作家を装う、ところまではトントントン拍子に進んだのだが、ライトノベルの重大要素、イラストレーターの段で躓いた。

大作家先生は、芸術に造詣が深く目が肥えていて、しかも我儕だ

った。

キャッチーな萌え絵はコトゴトク却下、有名な萌え絵師を軒並みクビにしたそうだ。

ジャケ買いなんてあるように、ラノベは表紙が重要だ。表紙と帯が良ければ中身はどうあれそこそこ売れる。

逆に言えば、中身が良くても手にとってもらえなければ、そもそも読んでもらえない。

大作家先生は、ペンネームを変えて新人作家を装う以上、今までのネームバリューは役に立たない。つまりは全くの無名。

先ずは有名な萌え絵師で読者を釣るのも一つの手だ。

なのに、大作家先生は、そのための萌え絵師を、出版社側が必死に掻き集めた売れっ子萌え絵師を、ゼーんぶ気に入らないと切って捨てた。

普段大作家先生が出すハードカバーは、有名な書家が題字を書いたり、著名な日本画家が表紙絵を描いたり、そりゃもうご立派な装丁がなされているんだってさ。あたしは純文学なんて読まないから知らないけど。

つまりは大作家先生を満足させるキャッチーなイラストレーターが見つからない。どこをどう探しても。

万策尽きようかというときに、偶々、編集さんたちの横のつながりで、あたしの描いたカット数枚が藤埜さんの手に渡ったそうだ。

卒業シーズン特集ページ用のカットで、桜吹雪にセーラー服の少女の後姿、という、はっきり言って誰が書いても大差ないであろう絵だ。

だが、そのカットが、大作家先生のお眼鏡に適ったらしい。マジか。それが本当なら大作家先生の芸術的センスは疑わしいモノだ。

そんなこんなで藁にも縋る思いで、今回あたしにお話が来た、と。

……微妙に、この藤埜サンも失礼なこと言ってるよ。

「お話は分かりました。でも、そんなカット一枚で評価されて、いざイラスト見たらやっぱり気に入らないってことになりませんか？」

「いやあ、もう、これで駄目なら、先生にも諦めてもらってトコまで来てますんで。その辺は気兼ねなく描いて下さい。ちゃんと絵が描ける人だとは緒峯さんから聞いてますから」

藤埜サン、……多分、仕事のしすぎで、人としてイロイロ失っていると思う。気遣いとか言い回しとか。

「……でも、キャッチーな萌え絵師でジャケ買い狙うんなら、そもそも人選ミスじゃないですか」

「もう人選なんて余地がないんです」

藤埜サン正直すぎる。あたしのプライドなんてささやかな物だけどね。でもちよっと突き刺さるんだよな、トゲが。

「……もつどうでもいいから取り合えず一冊出して大作家先生の気が済めばいい、と」

「はい」

ハイって言った!! 『はい』って言ったよこの人!!!

「……このお話、もし私がお断りしたらどうなりますか?」

「どうにもなりません」

口から抜け出る魂が見える気がする藤埜サンは、まさに生ける屍そのものだった。

「……お受けします」

思えば、自分の差し迫った事情よりも、同情とか恐怖とかが先だったのかもしれない。

#よん

校正前の第一稿が手元にあるということで、その場で直ぐに挿絵の話になった。

時間がないから、大雑把なキャラクターデザインはその場でやるでないと、表紙とカラー口絵の印刷が間に合わない。どんだけデッドなんだ。

正直、原稿読む時間も惜しいので、口頭でキャラの説明をしてもらった。

「じゃあ、主人公の女の子はこんな感じで？ もうちょっと大人しい感じ？ 逆にツリ目気味にしてクールな感じとか？ 一重か二重かでも印象変わりますけど。あと前髪が、……この程度か、ココまでか、……こう、サイドにしても、キャラの性格違っちゃいますよね？ カラーなら、やっぱりアニメ塗りが基本？ 彩色でもイメージ変わりますよ。色の指定は？」

その場でざっと何種類もの顔を描いていく。藤埜サンはちょっとの差でガラリと印象が変わる絵に目を見張っていた。

「はあ……、すごいもんですね。こんなサラサラと描けるもんなんですね……」

「感心はいいから、キャラの特徴教えてください。表紙絵の入稿いつなんですか」

底辺漫画家舐めるな。デッド入稿の代原の直しとか、分単位、秒

単位なんだ。これぐらいで感心するな。

「あ、はい。ううん、もうちょっとキツメな感じ、かなあ……？
でも見た目は優等生って文章に書いてあるし……、大人しいのかな……？」

……ええと。アナタが担当なんじゃないんですか？　なんで担当が主人公キャラ分かってないの？

「これ、写真とって、大作家先生にメールしてください。今すぐ。ソレぐらい、いいですよ？」

書いた本人に聞くのが手っ取り早い。いくら大物作家だろうと自分の作品のためならソレぐらいやってもいいだろう。

はい、と藤埜サンが慌てて携帯電話取り出すのを横に、大雑把に表紙絵の構図を数パターン作った。タイトルや帯の位置を考えると文庫本の表紙なんてさほどバリエーションがない。レベルによっては表紙に一定の決まりがあったりするから更に狭まる。

「装丁のデザイナーさんいないんですか。タイトルの色やフォント、どうなってます？」

と、藤埜サンの携帯がチャララ、と鳴った。

「あ、先生」

おう。噂の大作家先生か。

電話なのに起立してペコペコ頭を下げる藤埜サンを妙に親近感持

って眺めつつ、あたしは表紙絵のラフを2、3枚描いた。

「あー」

「あ、電話終わりました？　どんな感じが良いつて？」

藤埜サンは、左手で胃の辺りを押さえつつ、ボソボソと言った。

「今から来るそうです」

「……………だれが、どこに」

聞かなくても分かるけど、でも確認したい。

「先生が、ここに。20分後くらいに着くそうです」

フットワーク軽いな大作家先生。偶々近くにいたのか。

20分後に速攻クビってことは、…………無いといいな。

#1

兎にも角にも時間が押しているということで、大作家先生を待つ20分も惜しい。

主人公とその他数名、藤埜サンの曖昧な説明で大雑把に描きだす。

制服がセーラーという話なので、主人公の制服も数パターン描いた。男子は詰襟だそう。何となく、昭和の香りが漂う。大作家先生って失礼ながらお年を召しておいでなのだろうか。そんな大御所が今風ラノベなんて大丈夫なのか？

「あ、そういえば、作家の先生って、どなたなんです。私もお名前くらいは知っている方でしょうか」

「まだお伝えしていませんでした。失礼しました。呉羽隆生先生くれはたかおです」

……知らない。しょうがないじゃないか、あたしは普段純文学なんて……どころか文芸書全般読まないんだから。読むのは漫画おんり！。国語の教科書で読んだ名作があたしの読書暦の全てだ。

「知らないでしょう？　そういう顔をしていますよ」

不意に頭上から涼やかな声が降ってきた。冷ややか、とも言える。首を捻って見上げると、場違いなイケメンがそこにいて、呆気に取られた。

「あ、先生。本日はご足労頂き申し訳ございません」

がたん、と起立し直角にお辞儀した藤埜サン。

「いいえ。構いませんよ。もともと私がいろいろお願いしたんですから」

柔らかに微笑んで、丁寧に応じるイケメン。

ありえねえ。できすぎている。少女漫画なら確実に腹黒キャラだ。

なんだこの無駄に爽やかな超美形。その絶妙な眉と目と鼻のバランス、今度は非モデルになつて欲しい。薄い唇は滑らかに皮肉を発するのに適していそうだ。今聞いた声も柔らかい美声で、キツイ一言も美辞麗句の如く響くだろう。

カジュアルなセルフフレームの眼鏡とすっきり短い髪型、いかにも爽やかですと描いてある薄青の綿シャツは襟と袖におしゃれな青ラインステッチ、袖から覗く銀色は恐らく某高級老舗時計ブランドで仕立てのよさそうな黒いズボンはぴっちりプレスで余計なシワもなく、磨き上げられた革靴は光を反射する。

休日にとつとそこまで散歩してました、なファッションながらも、どこにも隙が見当たらない。現実にこんな人いるのか。

「こちらがイラストレーターの方です。あの桜吹雪のカットの」

イラストレーターじゃないです漫画家です、と言いたい。が、恐ろしいことに気付いてしまった。

え。まさかこの若いイケメンが作家先生なのですか。

名前今聞いたばかりなのに忘れたよ、カオのインパクトで。

「そうですか。はじめまして。今回は急な話を受けていただいてありがとうございます」

にこやかに微笑んで堂々と右手を差し出され、自分が座ったままだったことに遅ればせながら気付いた。

慌てて立ち上がって、頭を下げた。

「はじめまして」

日本人の挨拶はお辞儀だ。シェイクハンズなんてニアな距離感は無理。特にこの男相手は絶対無理。初対面ならなおさら。

大作家先生は、無視された手をさりげなく戻し、にこやかな顔をキープしたまま頷いた。

……この男、デキる。

#ろく

大作家先生は、ヒジヨウにゲイジュツにゾウケイがフカくあらせられました。

「違います。スカート丈がなんでそんなに短いんですか。これはセーラー服なんですよ」

制服デザインの全身ラフを指差して一言。

「え、でもこれでも膝上5cm程度ですけど」

今どきの制服、一般的なスカート丈はもうチョイ上目でも良いだろう。

「なぜ膝上なんです。太腿が見えてしまうでしょう。膝下10cmです」

どうしよう。イケメン大作家先生は、ひょっとして変態サンかもしれない。そういえばあの桜吹雪のカット、セーラー服のスカート丈長めだったような。いやアレは風に揺れるプリーツスカートがあんまり短いわけにも行かなかったからで、丈はこだわりポイントではなかった。そこを評価されたんなら、今まで首になった売れっ子萌え絵師皆さんになんと申し開きを。この大作家先生の萌えツボは世間一般から乖離しているようです皆さんは悪くないですよ絶対。

考えていることがバレたはずもないが、大作家先生はチラ、とラフ絵から目を上げた。

「いいですか？ この物語は、抑圧された主人公の成長物語です。自己を確立しようと足掻く青春ストーリーです。主人公は、社会の中で孤独を感じています。それは誰しもが同じように感じていることではありますが、主人公は自分だけと思っている。その内面を、このスカート丈が示しているのです」

……………ええーとお。

ちら、と藤埜サンに助けを求めた。が、うんうんと感心して頷いている。駄目だ。味方がいない。

「心を隠す鎧がごときスカート丈。周囲を直視できない象徴の眼鏡。これは重要なポイントですよ」

確定？ 確定だよねコレ？ ザ・ヘンタイ！！

「……ではソックスは白で三つ折、黒革ローファー、髪はみつあみお下げですか」

むしろそこまで行くとギャグじゃないかと思う。

「あなた、読んでませんね？ 今からでも読んでください。30分もあれば充分です。それからきちんと話しましょう」

ぎくり。

校正前の第一稿とやらが目の前に差し出される。

「……………あの。30分で、これを読めと？」

自慢じゃないが、あたしは文字を読むのが苦手だ。文字があたしを嫌っている。

恐る恐る手に取ったそれは、紙の質量以上の重さを感じさせる。

「大した量じゃありません。直ぐです」

ヘンタイイケメンの威圧的な眼差しに促され、あたしは嫌々タイトルのみ一枚目を捲った。

気を利かせた藤埜サンがコーヒーを持ってきてくれて、大作家先生が一度席を外して戻ってきて、更にオネーサンが様子見に顔を出して引っ込んで、そして藤埜サンがどこからか軽食用にサンドウィッチを買ってきてくれて大作家先生と藤埜サンがそれらを平らげて、時計の長針が一回転半して、最後の一枚を読み終えた。

気が付いたらティッシュの箱が目の前に置いてある。取り合えず鼻をかんだ。泣いてない。泣いてないからね断じて。

鼻すつきりして、一言。すげえ。

スイマセンった大作家先生。イケメンだとか変態だとか二度と言いません。

成長物語？ 青春ストーリー？ そんな言葉で片付くのかコレが？

ページ一面の文字を見ると眠くなるあたしが、なんと最後まで読めた。読みきった。しかも全然苦痛でなくむしろ先へ先へと引っ張られた。

ラノベにありがちなファンタジー設定がこうも活かされるとは。非日常でしか叫べなかった主人公が現実で声を上げた瞬間は拍手喝さいしたくなったよ。

「はい。スカートは膝下10cm、了解しました。是非とも色は紺じゃなくて黒にしたいと思います。スカーフは緑でリボン結びじゃなくてタイ結びです。髪の毛はストレートロングを後ろで一つに結わえて前髪はパツン、眼鏡は黒縁。ついでに作中にはないですが、前歯に矯正器具つけていいですか」

よろしい、と、大作家先生は頷いた。

……………相当キワなマニアを喜ばせそうだ。

そしてこうなった。

結局表紙は、いくらなんでもと編集ストップで、大作家先生指定の主人公（ネガver.）と最終的に一皮向けた主人公（ポジver.）が背中合わせの構図で決定した。

絵柄も普段の少女漫画チックなものじゃなく多少デフォルメしたものにして、でもデッサンは大作家先生の強い要望により現実の頭身に近く、しかし生々しくない程度には現実離れさせた。

大作家先生の注文と、編集の意向と、ギリギリのすり合わせで出上がったイラストは、萌え絵という曖昧なカテゴリーの隅っこにギリギリ引つかかるかも知れない程度の仕上がりだった。

ちゃんとした契約も後回しに、自分史上最速で、表紙とカラー口絵、本文挿絵数点と宣伝用のカット数枚を描きあげると、流石の大作家先生もご納得のご様子で微笑んで居られた。無駄に逝け面。徹夜明けにその笑顔は逝けってことだろ。

すっかりワタクシが提案してしまった歯並び矯正器具のアイデアは大作家先生の意欲を刺激したらしく、第一稿の後、更に手直しが入ったとか。やばい方向に背中押してしまった気がしてならない。関係者の方々に土下座したい。

ともあれ、無事（？）発売日に店頭に本が並んだ。作家を除く関係者全員が死力を尽くした結果だ。出版業界ってツクツク恐ろしいところだ。

藤埜サンの体重が最終的にどれだけ削られたのか、知りたくない。

人間って意外とシブトイ生き物だと実証された。

取り合えず、あたしは二度とあのイケメン大作家先生とは関わりたくない。

ド変態であることを差し引いてもお釣りがきそうな美形であることは認める。が、膝下スカートと眼鏡のこだわりはそこそこ市民権を得るかもしれないが、矯正器具萌えてどんだけコアなんだ。他にどんなマニアックな趣味隠し持ってるのか妄想の余地ありまくりだ。

ああいうものは寄らず触らず関わらず遠くから眺めるに限る。

そうして、ろくに契約も確認せずにこのお仕事を終え、今まで「カット数点纏めていくら」が主だったあたしは、今日振り込まれた報酬にビビッているわけデス。

これはあぶく銭だよ、悪銭身につかずだよ、こんな非常識なオシゴト今後無いし。

あ、結局あの大作家先生のお名前なんだっけ。

偽装ペンネームがたかおこうよう高尾紅葉だってことは出来上がった本貰ったから知ってるけどね。

さて。

……夕飯、久々に、お肉とか、贅沢できるかな？ お肉、大特価

じゃなくても良いかな？ 一段高い棚の和牛買ったちゃって良いかな？

清水の舞台から飛び降りるつもりで、国産牛（でも切り落とし）を買って帰ると、留守電がピコピコ光っていた。

メッセージを再生させる。

「こんにちは。藤埜です。先日はありがとうございました。例の本が好評で増刷が決まりました。次回もよろしく願いいたします。まずはご連絡まで」

っー、っー、っー、……。

あれ？

次回？

#にのいち

……どうしてこうなった。

いつも打ち合わせに使っている出版社近くの定番カフェ。

カフェと看板を出しているにも関わらず、人気メニューは緑茶。

そしてあたしは困惑していた。

「お待たせしました。早速ですが、次作の話をしても？」

颯爽とやってきて向かいの席に座る、このお兄さんはどなたでしょうか。

「……あの、打ち合わせの相手は、藤埜サンだったはずでは……？」

そう。電話で日時を指定してきたのは、忘れたいのに忘れられないとあるオシゴトでお世話になった編集さんだ。

ゾンビかと思紛う不健康そうな華奢な青年だったと記憶している。

だが実際現れたのは、いかにも「スポーツはテニスを嗜む程度ですが週一でジムに通って健康管理しています」と言い出しそうなお兄さんだ。

パリッとスーツが仕事のできる男オーラを醸している。

「はい。私です。お電話でもそうお話したかと思いますが」

ニコニコとお兄さんは頷いた。

脳内の、生ける屍の顔を探り出す。如何せん、ヘンタイイケメン
大作家先生の衝撃が大きくて、影が薄い。

あのゾンビから、餌のいらないクマ二匹を引いて、顔色を修正し
て、落ち窪んだ眼窩を正常に直して、充血した目に目薬、こけた頬
をふっくら、無精ひげをマイナス、髪を美容師にお任せで。

……………。

「人間って生き物の可能性を再認識しました」

アレから二ヶ月。ひょっとしてコレが常態なのか。アレが非常時
か。

……編集さんって、文字通り身を削ってるんだな。

「は？」

「いいえ。私は藤埜サンの味方です。（例え藤埜サンがあたしの味
方じゃなくても）」

「なにかありましたか？」

心配そうな顔されちゃったよ。アナタの寿命のほう心配だよ。

「いえ、これから何かあるような……………」

予感と言つか、悪寒と言つか。

「なるほど。では、仕事の話をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

ほらほら、そのオシゴトがね？

「そのことなんですが、一身上の都合によりこのオシゴトを続けるわけには……」

「契約書にちゃんと書いてありますよね？」

にこやかに、しかし『逃げんじゃねえ』と心の声付きで、藤埜サンは仰った。ほら、やっぱりあたしの味方じゃないよ。

「……で、お仕事のお話をオネガイします」

#にのに

後悔先に立たずってこういうことですね。

なんであたしは大作家先生と直にお話してるんでしょうか。いやそれは藤埜サンがあたしをここに連れてきて置いていったんだけです。

「あの矯正器具のアイデアは非常に感心しました。周囲が望む言葉しか言えない主人公の実情が、一目で説得力を持ちました」

大作家先生は、こんなオサレな和風モダンレストランで、矯正器具を褒め称えている。どうしてあたしがソレを聞かなきゃいけないんだ。

「……そんなに矯正器具好きなんですか。あまり公言しないほうがいいご趣味かと思いますが……」

小声で、ぼそつとな。

さつきから隣のテーブルの視線が気になるんだもん。

「誰が矯正器具を好きなんですか。私は矯正器具を思いついた貴女の感性を褒めているのです。言葉は精確に聞き取っていただきたい。あなたのイラストで、私は絵の説得力を再認識しました。文筆業をしていると、文章で読者の想像力を如何に掻き立てるかを重視してしまいます。子供の想像力の低下は、アニメやCGの進化の悪しき弊害だと考えていました」

あ。矯正器具萌えじゃないんだ。これは朗報だ。よかつたよかつた。濃ゆいご趣味の方と二人でご飯なんて、食が進まないじゃないか。もぐもぐ。

で、ふつーの会話で何でそんなに熟語が多いんでしょうか。めんどくさいしゃべり方ですね。『この白身魚のフライ美味しいですね』は、どう訳したらいいですか。

「ですが、違った。口元から僅かに除く矯正器具。これだけで主人公が言葉一つ正直に言えない環境を想起させる。全く脱帽です。あなたのおかげで、あの小説は完成度の高い物になりました。お礼申し上げます」

お礼を言うために、人をこんなところに呼び出したのか。電話で充分なのに。ご飯オゴリはうれしいけど。

「ですから、次回作は最初の段階からご協力いただきたい、と考えております」

うぐ。炊き込みご飯が気管に。あ、味噌汁慌てて肘でひっくり返し……。

「大丈夫ですか？」

おしほりを差し出す手も優雅な大作家先生は、慌てず騒がず、ウェイターを呼んだ。

最初から協力、って、どういう意味ですか。

ゲホゴホグシュン、あ、鼻からご飯粒が。

#にのさん

妙な押しの強さで、大作家先生はあたしをタクシーに押し込んだ。
うわー。女あしらいの上手さが透けて見えるような。

「ズボンも濡れているでしょう。そんな姿で電車に乗せるわけには
いきません」

はあ。紳士ですね。

でも、ヘルプのアシスタントでド修羅場明けなんか、もっと酷い
格好もザラです。顔にトーンの切れ端くつつけたまま山手線二周し
たこともあります。

そのまま送ってくれるつもりかと思っていたら、街中で降ろされ
た。え。お店？

「彼女に似合う物を」

高級感漂う店内を通り抜けて、奥の応接室っぽいところに通され
て、VIP用かよこういうところ本当にあるんだ庶民の知らない世界
って感じーなんで今カメラ持ってないんだネタだコレ、と、二度と
来る機会はないであろう場所を目に焼き付けていると。

モデルさんのようなプロポーションの店員さんが、ふわふわ華や
かなヒラヒラを持ってきた。

「「こちらへどうぞ」

「へ？」

「お召し替えを。サイズが合わないようでしたらお申し付け下さい」

二畳ほどの広さの試着室は、大きな壁一面の姿見とアンティークなカウチが置いてあった。渡されたのはふわふわシフォンのミニ丈ワンピース。コレをどうしろと。

愕然と立ち尽くしていると、またドア越しに声がかかった。

「こちらも宜しいでしょうか。行き届かず申し訳御座いませんでした」

と、恐縮しながら店員さんが渡してくれたのは、可愛い下着とストッキングでした。

ああ。このワンピース、肩大きく開いてるしね。うん。今のスポーツブラじゃ見えちゃうしね。生足とかお披露目できるような年じゃないしね。

……でもどうして普通のパンティストッキングじゃなくてガータータイプなの。どうしてこのブラジャーサイズがぴったりなの。どうしてこのパンツ紐なの。このエロいチョイスは誰が！？

げんなりして、でも着替えないと外に出してくれない気がしたから、着替えた。

逃えた様にぴったりサイズで、店員さんにオモウシツケるようなことは何もなかった。脱いだ服を胸に抱えて恐る恐る試着室を出ると、履きなれたローファーはなく、これまた可愛い華奢なサンダルが置いてある。

……コレを履けと。

うつたえていると店員さんが速やかにやって来て、足にカボツとサンダルを履かせ、足首にストラップをぱちんと止めると大きなお花コサージュをくつつけた。申し訳なくて泣きそうだ。今まであたしの人生で他人様に靴を履かせてもらったことが……幼稚園頃までならあったかもしれない。

「そちら、お預かりいたします。クリーニングした後ご自宅にお届けするよう手配いたしますので」

胸に抱えた服を取り上げられた。え？　ちょっと待ってよ、その中には脱いだ靴下や脱いだパン……！！

「持って帰ります、持ち帰りますから、あの、紙袋が何かに纏めてくれたら……！」

お願い、オネガイします！！

あたしの必死さが伝わったのか、店員さんは頷いてくれた。助かった。3枚980円のパンツを人に見られるなんていくらなんでも……。

「こちらへ。服の雰囲気変わりましたので、メイクを少々お直しいたします」

最早何も言うまい。ベルトコンベアに乗つけられた気分で、ほぼスッピンだった顔を弄られ、髪形もどうにかされ、いつの間にか手にもネイルを施されそうになって、慌てて手は商売道具だから止めてくれと頼んだら、付け爪された。剥がし方も丁寧に教わったけど、オーバーヒートした脳味噌で、そんなの覚えていられるわけがない。

#のよん

疲労困憊で店員さんに連れられて、ぼんやりとソファに座ったら、隣が作家先生だった。

「……なんでこんな……」

涼やかにコーヒー飲んでるヘンタイイケメンは、店員にカードを渡した。なんてことだ。この一式お値段どんくらいだ、普段量販店半額セールでしか買えない物しない貧乏人には予想もできない。

「綺麗ですよ？ よくお似合いです。ここのスタッフは優秀ですね」

愕然としていると作家先生サマがサラリと仰った。違いよ問題が。

「あの。こんなことして頂かなくても」

言え。ちゃんと言うんだあたし！

「気に入りませんでしたか？ なら別の店に行きましょうか」

のおおお！ なんてこと言うんだ、この店員さんの仕事の成果、ケチ付けるなんてありえない残念なのは中身があたしってことだ。

「そうじゃなくて。こんなこと、して頂く理由がありません」

よし言えた！ はっきりキツパリお断りしろ！

「理由ならありますよ。私がエスコートしている間に不愉快な目に遭わせてしまいました。そのお詫びです」

何なんだこの男……。

「……あの、今は持ち合わせがありませんが、このお金は是非ぜひ支払わせてください。男の人に服を買ってもらうのは結婚相手ただと両親から躰けられています」

いや、嘘だけど。ウチの両親にそんな教えを受けた覚えはないけど。

「それはあれですか。男が服をプレゼントするのはそれを脱がす下心があるから、という?」

そうだよ、とはとても言えない。少なくとも、目の前のイケメンがあたしに、はありえない。

「いやいや、先生がそうだと言うつもりはありません、ええ、全くこれっぽっちも。ですが紳士な先生ならお分かりいただけるかと思いますが、誤解を招くような行動は慎むべきではないでしょうか」

「……紳士、ですか?」

なんでそこで理解できませんって力オしてんだ大作家先生。

「少なくともただの仕事の関係で、服プレゼントはしないでしよう。今回の場合なら、クリーニング代渡すのがスマートな対応ってものです。それだつて充分気を遣った対応だと思います。だからこれはやりすぎです」

「ただの仕事の……」

逝け面の微笑みだった。どす黒い何かが見え隠れした。触れたら確実に良くない事が起きる何かを秘めている。

「なるほど。では、これも仕事の一環と考えてください。ちょうど次回作のキャラクターを考えていたところです」

……………。

大作家先生の脳内は、複雑怪奇に捻じ曲がっている模様です。

#261

「今回は詳しくお話できなかったんですが、この企画は一年を通して4冊ほどの発行を考えています」

はい、そうですね。大作家先生、周囲から浮きまくってますね。

「春夏秋冬、それぞれのシーズンを描く予定です」

なるほど、そして女子の注目集めてますよ。

「一貫したテーマは自己否定なのですが」

女子、つつーか、これは腐女子だな。ツレがあたしでごめんなさい。実は男の娘なんだよ、て妄想変換オネガイします。

「次は、コスプレにのめり込む少女を主人公に据えようと考えています」

……ああ。だから、此処なんですネ。

「すみませんが、あたしはそっち方面さほど詳しくありません。もし良ければコスプレイヤー何人かは紹介できますが」

聖地は平日でもこれだけ賑わっているんですね。履きなれないヒールが怖いです。

「必要ありません。私は個人への取材はほとんどしません。人間観察が主ですね」

そう仰る大作家先生は、歩行者天国を眺めて動かない。

注視されている変形メイド服の子が、こっちを気にしている。

うん。このヘンタイイケメン、カオだけは、……いや、スタイルもファッションも良いんだけどさ。

「貴女はどうですか。その服、さほど抵抗なく着たようですが、普段からそういったテイストのものを着ているわけではないでしょう？」

うおおおお！ 人が必死に意識しないようにしていることを！！

お店出て駅まで歩くだけで3回こけそうになって大作家先生の手を煩わせてしまったこととか、記憶から抹消したい。

電車が揺れてつり革つかまろうとしたらワンピースの肩がずれて大作家先生に指摘されてブラ紐見えてることに気付いたとか。駅の階段普通に登ったら大作家先生にスカート押さえるように注意されちゃったとか。

こんなミニスカート普段着ないし！！ ガーターベルトが見えてしまいます、なんて一々言い方がヤラシィんだよ！

「て、抵抗はありまくりましたけど！ でも、しょうがないじゃないですか。それにコレはコスプレ服じゃありません」

「そうですか？ 日常とは異なる、という意味では同じ括りでしょう。新たな自分になった気はしますか？」

あらたなジブン。……そりゃ、ちよつとは、異性の視線が気になるったりはしますが。

「コスプレをする、という心理はどういうものですか。外見を変えて自己解放？ ならば普段の自分とは何なのでしょうか。解放しなきゃならない、つまりは、抑圧されている。何にです？ コスプレという手段でどうしようというのか。結局は既存のキャラクターの模倣で」

ブツブツと、考えこむ大作家先生。

……ええーと。タイトルは『哲学者の彫像』ダンボールでもあれば書いて横に置くんだけど。

で、あたしはいつまでこれにお付き合いしなきゃならないんでしょうか。

ああ。あの赤い軍服（でも超ミニ）のツインテール、さつきも見たな。何往復目だろう。ビラ配りのメイド服はずっと視界にいるし。撮影会始まっちゃった和服っぽい一団、禁止されているはずの路上パフォーマンスは、平日は規制がゆるいんだらうか。

とにかく、この周辺だけ混雑してるような気がするけど、気のせいかな。全ての元凶がこの哲学者の彫像じゃないかってのは、あたしの穿ち過ぎかな。

……しかしそろそろ肌寒くなってきた。

恐らくは春の新作、春風にヒラヒラと浮かれ気分のモテカワコーデ、大抵の見た目重視ファッションは我慢が付き物だと思うが、これは春先に着るには少し薄着過ぎると思うんだ。

奢ってもらった和風創作ランチは、途中で味噌汁ひっくり返したせいで完食できなかった。お腹すいてきた。

……そういえば、今日は実家に顔を出す予定だ。一人暮らしのアパートから駅三つ離れてる実家へは、ここからなら乗り継ぎどうなってたっけ。

先週お母さんが、春キャベツが旬だから次はロールキャベツなんかいいいわね、と言っていた気がする。

メニューを思い浮かべたら、途端に空腹が我慢できなくなってきた。

「……先生。あの、そろそろ、移動しませんか？ 考え事なら、どこかお店でも……」

恐る恐る声をかけたら、先生は、はっとしてこっちを見た。

「あ、ああ。いたんですね。失礼しました」

いたんですね、だと？ なんだあたしは帰ってもよかったのか。

「その、そろそろ肌寒くなってきましたし、いつまでもここで彫像

…いや、ぼーっとしてるのもナンですから……」

うひゃお！ 逝け面！！

「……そろそろ、ここへ来てから3時間ほどですか。その間、貴女はただぼーっとしていたんですか？」

え？ いやいや、だって、先生動かないし！　しゃべらないし！！

「……まあ、いいでしょう。放っておいて申し訳ない。唇が青くなっていますね。その格好では寒かったですでしょう。どこかで温かい物を……」

あ。戻った。大作家先生の負のスイッチが分からない。

「あ、いえ。今日のところは。この後実家に行く予定だったんです。毎週一回は顔を見せる約束で」

……あれ？　急に寒くなった？　日が落ちたから？

「毎週顔を出す？　お住まいはご実家と近いんですか？」

「え、えと。近所というほどでは……、駅三つ離れてますし」

「……………なるほど」

逝く、逝くよ。なんなのこの逝け面、なんでそんな冷氣発生させてるの！？

「あ、あの、その、えと」

「ご実家に、今日は行けなくなったと電話してください。もう少しお付き合いいただきますよ。これは仕事ですから」

大作家先生はご自分の携帯電話を胸ポケットから取り出してあたしに握らせた。

「え？ で、でも」

「いいですか？ 貴女は、あの矯正器具のアイデアで、この私に原稿の手直しをさせたんですよ？ 完成原稿は誤字ですらミスのなかった私に、本文そのものの修正をさせたんです！ 人に渡すときには常に完璧でなければならぬという私のモットーを覆して！！」

モ、モットーだと？ 知らんがなそんなモン！！

「……………その責任は、取っていただきます」

……………バイバイ、お母さんのロールキャベツ。明日まで残しておいてくれたらいいんだけど。

#にのこ(後書き)

作者はコスプレに偏見はないです。むしろジャスティス。

#のろく

メイドさん、八つ当たりだけど、恨むよ。

何を思い立ったのか、大作家先生はビラ配りのメイドさんに声をかけた。うれしそうに応じたメイドさんは、大作家先生の質問に快く答えてくれた。

……そしてコスプレ服専門店の存在を知った。

その筋じゃ有名なお店だそうだ。専門店があるとは知らなかった。

大作家先生は、大量のお買い物なさいました。

先生のお買い物に同行する勇氣はあたしには無かった。

店の外で待つ間、ディスプレイのおどろおどろしい鎧兜を観察していた。

へー、これどう考えても腕上げただけで肩の角みたいで自分刺すんじゃないかな、そもそもこの肩のジョイント駆動域がほとんど無いみたいに見えるんだけど実際着た人いるのかな、鎧である以上使用目的は戦闘じゃないのかな、このデザインもうちょっとどうにかならんもんな、鎧と言うにはコケオドシ感漂っちゃってる気がする、もしこんなキャラクター出てきたら絶対雑魚だと思うよ。

「荷物、持ちます」

両手に紙袋抱えた大作家先生が相変わらず小難しい力才で戻って来て、大変そうだったからそう申し出たら、やんわりと断られた。

「女性に荷物を持たせるわけにはいきませんよ」

でもね。大作家先生サマ。自分のルックス自覚してくれないかな。激しく違和感あるんだよ。

このお店の紙袋、笑顔満面ロリ巨乳が自己主張しすぎだと思うんだ。

「じゃあ、直ぐにタクシー拾いましょう。大荷物ですから電車では大変です」

隣にいるあたしが耐えられません。

ひよつとしてあの場で解散する手もあったんじゃないのか、と気付いたのは、タクシーに乗って、大作家先生が目的地を自宅マンションと告げたときだった。

え。この上自宅までつき合わされちゃうわけですか。

……っつーか、何であたしはのん気に一緒にしちゃってるんだ。

今、大作家先生は何を持っている？ 大量のコスプレ服だ。

何で大作家先生はあたしを同行させた？ ……………。

いやいやいやいや、まさかね、そんなはずないよね、あたしは着せ替え人形じゃないよ？

あたしは『仕事』で一緒にするわけだから、つまり絵を書くんだよね？ 絵、だよ？

今更ながらに、大作家先生のお買い物を見張っていなかったことを後悔した。どんな恐ろしい衣装買ったんだ。サイズはどうだった。さっき店の外で待ちたいと申し出たときあっさり許可が下りたのはナニユエか。

このワンピースの買ったお店であたしのサイズはバレてると考えていい。

え？ あたし今これ何フラグ？

#にのなな

大作家先生の脳内では、次回作の主人公は、コスプレにのめり込む女の子だそうです。

どんどんコスプレがエスカレートして常軌を逸していくんだそうです。

そのコスプレのデザインを、あたしに任せたいらしいです。

そんならそうと早く言って下さい。

あの参考資料の山が、ホントにただの資料であつたことに心底安堵した。

この完成度を女子中学生が縫製可能でしょうか、とか、手縫いとミシンの技術が相当、とか、材料費がどの程度で購入はどこで、とか。

タクシーのなかで紙袋開けて検証し始めちゃった大作家先生に、運転手さんがどん引きだった。

紙袋の中にスク水を見つけてしまったあたしも、運転手さんにフオローする気力が失せた。

大作家先生が紙袋ガサガサさせる音だけが響く車内。重苦しい空気に耐えかねた運転手さんがカーラジオをつけ、偶然なのか必然なのか、アイドル声優の超音波ボイスが飛び出して、クリティカルに

ダメージを受けた。

運転手さんが、恐らく最速で目的地に到着させたのは間違いない。高速道路じゃないのにスピードメーターが× km示してたとか、あたしは見えてないから。

「ご自宅は洒落たデザイナーズマンションで、やはりここでも紙袋の美少女がすさまじい攻撃力を発揮した。

常駐しているらしい管理人さんが、宅配便のお荷物が届いていまず、と言いかけて固まって、仕方ないからあたしがそれらしき荷物を置き場から探して勝手に受け取った。軽いけどかさばる大きい箱と小さいのにやたら重い箱の二つだ。何となく、大きいつづらと小さいつづらが出てくる昔話を思い出した。

エレベーターにもカードキーが必要だったり、セキュリティが凄いい。内装は機能重視っぽくてシンプルだ。

そしてモデルルームのように生活感の無い部屋に通され、今に至る。

何LDKですか。延べ床面積どんだけ。マンションなのにリビングに階段があるって二階もあるんですか。お家賃は聞きたくありません。

「そちらの部屋を、好きに使って下さい。一般的な画材は準備させましたが、足りない物があれば藤埜に言ってください」

はい？ 好きに使えとはどういう意味ですか？

客用らしい空き部屋は作り付けのクローゼットとベッドと、そして内装にそぐわない作業机があつて、眩暈がした。

「あの、ひよつとして、まさか」

「このほうが効率がいい。仕事が終わるまではここに居てもらいます」

予想外だよ。まさかそう来るとは。イキナリ缶詰めなんか不意打ちもいいとこだよ。いや、コスプレの覚悟があつたわけでもないけど。

ドアを見たら、一応鍵はかけられるみたいだ。何かあつたら引籠ろう。そうしよう。

「届いた荷物は貴女用です。日用品など、不足は無いか確認してください」

え。この大きいつづらがですか。大きいつづらはハズレですよ。

開けてみたら、このワンピースのお店の服が数着。下着とナイトウェアまで出てきた。更に旅行準備っぽいポーチには洗面用具とスキンケア用品、バラの香りのボディソープとシャンプーリンスコンディショナーのセット。

ほら、ハズレだ。小さいつづらがアタリとも思えないけどね！

つづーかこんな物までいつの間にお買い上げ？ うん、あたしが

試着室にいた間だろうと思うけど、なんでそれを今の今まで黙ってるんでしょうね。事後承諾というにはこれ計画的じゃね？ 確信犯じゃね？

「……じゃあ、早速仕事します。ええ。可及的速やかに取り掛かります」

そして一刻も早く仕事を終わらせる。

#にのなな（後書き）

……ナニカを期待していた方はいらっしゃるでしょうか。

あと、『あたし』は、“確信犯”の使い方間違ってます。

#にはち

必要なのは7着分。

徐々にエスカレートさせる方向性が、露出。

お仕事のために大作家先生に詳しく話を聞いたら、そう説明された。

ええーとお。いかにも男目線な意見じゃないかと思いますが。

まあ、あたしは言われたとおりに描くだけですけど。

……でも、露出。エスカレートした、常軌を逸した、露出。

迷いに迷って、あたしは藤埜サンに電話した。

「あの、ライトノベルの挿絵でヌードって、ありますか」

間髪いれず返ってきた。

『阿呆ですか』

うん。ですよー。

「でも、先生の指示で」

『先生がはつきりヌードだと言いましたか？』

いや、それは言われていないけど。

「常軌を逸した露出、って、ナンダと思います？」

はあ、と電話の向こうでため息が聞こえた。

『だからヌードというのは安直過ぎるでしょう。……正直に申し上げて、私には、その「常軌を逸した露出」がどんなものか思いつきません。ですが、あなたがどんなものを描くのか期待しています』

おお？

今まで挿絵はパセリにも劣る物言いだった藤埜さんが。

『一作目。第一稿のどこがどう修正されたのか確認しましたか？』

スイマセン読んでません。刷り上った本貰って本棚直行です。

「ええと。矯正器具の記述を加えたんじゃないんですか？」

『逆です。主人公の描写を、むしろ減らしたんです。ですから驚きました。ご存知ないでしょうが、先生は、ご自身の作品は本文が全てだと仰って、後書きも解説もつけません。その先生が、自分の作品で、その表現を、絵に譲ったんです』

「……それって」

『ですから、あなたの描くものを楽しみにしています。できる限りのサポートはさせていただきます。頑張ってください』

電話の向こうで、ちゃんと本気で激励してくれてることが分かる。

大作家先生は、モットーを覆したんだって言った。

うん。頑張ろう。ちゃんと、本気で、頑張ります。

#にのきゅう

頑張る、と決めたものの。

何をどう頑張ればいいのか。

用意されていた画材はそこそ揃っているけれど、やはり使い慣れたものが欲しい。

どうしよう。一度取りに帰ってもいいだろうか。

どうせなら一旦家に帰らせてもらって、カンヅメは明日からじゃ駄目かな。

今日アレだけ振り回されて疲れたしね。

今思い出したけど、夕ご飯まだ食べてないよ。気が付いちゃったらお腹ペコペコだよ。

っつーか大作家先生はご飯どうすんだ。

何となく、この家には食料とか生命維持に必要な物が欠けている気がする。

ビクビクしながら部屋を出て、大作家先生を探す。

探す。

うん。マンションって普通、人を探すような広さじゃないと思うんだ。図らずもお宅拝見してしまった。うっかり大作家先生の寝室まで見ちゃったのは失礼しました。

でも寝室すら生き物の気配感じないって、大作家先生本当に人間ですか。二酸化炭素吸って光合成して酸素出してませんか。

リビング横のドア開けたら、先生発見。ここが書斎らしい。壁一面の書庫にビビッた。

「どうしました」

ああ。小さいつづら開けてたんですね。紙の束は、それ資料ですか。『画集らしきものあるようですが。何の画集？』

「ええと。画材が、やはり使い慣れたものが欲しいんです。一度取りに帰りたいんですが。それと、先生夕食はどうなさるんですか。あたしはここで缶詰めにあたって、どうしたらいいんでしょうか」

生き延びるために。

「そうですね。今から取りに行きましょうか。車を出します」

え？ 先生が車？ いやそれは申し訳ないです。

「いえ。そこまでは。PCまで持ってこようってんじゃないから」

ついでに、自前のお着替えとかも持って来たいんです。あんなオサレなお洋服でお絵かきできません。作業着が欲しいんです。あんな見た目重視（誰に見せるんだ…いや…愚問か）な下着類も着用したくない。

そしてどっか外でご飯食べてきちやおうかなーと目論んでいる。ハラヘッタ。

「普段はパソコンも使っんですか？」

「使います。最近はデータ入稿のほうが早いですし。でも、手書きでやりたい絵もあるんで、半々ですね」

「なら、やはり持ってきてきましょう。それともここでも買い揃えますか？ 機種を指定してくれば取り寄せますが」

…… 大作家先生の金銭感覚がわかりません。

「使い慣れたものが良いので、持ってきます。今日はもう遅いですが、明日にでも藤埜さんに連絡してどうにかしてもらいます。なので先生はお気遣い無く」

「遠慮は無用ですよ。この仕事に関しては万全の体勢で望んでいたきたい。そのために必要な物は全部申し出てください」

なんでそんなにやる気なんだよ大作家先生。本業は純文学なんですよ。ライトノベルは気まぐれなんですよ。どうしてそこまでする必要がある。

「……じゃあ、お腹すきました。ご飯食べたいです」

正直に言ったら、大作家先生、ちよつと笑った。今は感じ良い笑いだった。

「それは失礼しました。生憎、ここのキッチンはお茶を入れる程度しかできません。外食とデリバリー、どちらがいいですか？」

はあ。お任せします。

つれて来られたのは上品かつ上質なレストランだった。イタ飯か。周囲に大作家先生が馴染んでいる。昼間のイロイロよりもよっぽど。

「……不思議なんですけど。どうして先生は、ライトノベルを書くうと思っただんですか」

シェフお勧めのコースを頼んで、お酒は車だからと控えて、ナイフとフォーク操る手も優雅で。

なんつーか、これ僻み根性かもしれないけど、あたしとは次元が違うってゆーか。

大作家先生は、苦笑した。

「そもそも、ライトノベル、とは何ですか。純文学とは。その違いはどこにあるんです」

うわあ……。また小難しいことを。

「私は、今でこそあんなマンションに住めるようになりましたが、最初の頃はバス無しトイレ共同の下宿でした。とある文学賞を取って、今や出す本はほとんど売り上げ上位になる。図書館に行けば、私の本は当然のように置いてあるようになった。しかし、賞を取る前と取った後と、どちらも書いたものは自信作です。内容が飛躍的に変わった訳ではない。中身が同じなのに、じゃあ何が違うんです？」

ええと。……あたしはここ、どうしたらいいのかな。

背中に冷や汗かいてると、大作家先生は、目を瞑って大きく息を吐いた。

「失礼。こんなことを言われても困りますね」

さらりと、大作家先生は話を変えた。

うん。鴨のロースト、美味しいです。このハーブのソース、絶品です。はい、このお店デザートもお勧めなんですね。じゃあドルチエミストお願いします。

大作家先生、本名何て言うんだっけ。

今度、こっそり藤埜さんに聞いておこう。

#このじゅう

目が覚めたら、おしゃれなスタンドライトと品のいいカーテンが目に入った。

……うん。夢だ。夢。

………ってことにして欲しいな！！

「なんで」

いつの間に寝てたんだあたしは。昨日のオサレな春コーデワンピースで寝てるって、何となく大失態の気配が。

よくよく考えて、昨日ご飯食べてお腹いっぱいになった後、高尾先生のお車の中でウツラウツラしちゃったあたりを最後に記憶が無い。

状況証拠はばっちりだ。寝オチだ。

ここまで誰が連れてきてくれたのかなんてそんな少女漫画的なことは絶対に考えない。

ちゃんと服着てる。高尾先生は筋金入りの紳士だった。きっと食欲も睡眠欲も性欲も無いよ！

時計を見ると、5時チョイすぎだった。

どうしよう。

とりあえず着替えたい。お風呂はいりたい。でも他所のおうちで勝手にお風呂なんて。

起き上がると、作業机の上にメモがあつた。

『キッチンにパンを買ってあります。朝食は自由に使ってください。家のものは好きに使って構いません。12時までは絶対に起こさないで下さい』

流暢な几帳面な字だ。そして睡眠欲はあるらしい。

至れり尽くせりです。お気遣いありがとうございます。

先生が12時まで就寝と分かったので、遠慮なくお風呂使わせてもらっちゃえ。

……でも早く着替え取ってこないと、下着がアレしかない。

バラの香りの洗面セットを取り出して、ちょっとどんよりした。

お風呂は広くて、湯船も足伸ばせてゆったりで、そしてホテルのバスルームのように高級感溢れるインテリアで、ばばんがばんばんばん、なんて絶対許されない感じで、やっぱりどんよりした。

最初はバス無しトイレ共同って言ってたっけ。

銭湯とか通つてたのかな。風呂桶小脇に抱えてコーヒ―牛乳飲んだりしたのかな。

考えると、ちょっと面白いかも。

#このじゅうち

編集さんって、便利屋じゃないよね。誠に申し訳ございません。

藤埜さんはこの管理人さんに顔パスらしい。あたしはすっかり外出てオートロックに締め出されちゃったけど、藤埜さん一緒だと管理人さんがロック開けてくれた。

いつも大変ですね、て挨拶されてた。そうか。いつも大変なんだ。なるほど。

藤埜さん、PCの扱いが非常に丁寧で、接続もスムーズで、こちらの電気屋さんよりもよっぽどだと思うよ。ランチやスパナが意外にお似合いで。今度ボルトとナットのセクシーさについて語り合いませんか。

でもって、荷物やらPCやらガサガサ持ち込んで大型モニター設置するのにフレームガンガン組み立てたり、結構物音立ててるのに起きてこない高尾先生も凄いよ。

「あの。今更なんですが、高尾先生の本名って、なんて仰るんですか」

こそーっと、聞いた。

「呉羽隆生ですが……」

すつげ不審そうに、でもちゃんと答えてくれた。あ、そうだったそうだった。

「あ、えと。ペンネームでなく本名？」

取り繕ってみた。

「はい。本名です。……読み方は、『たかお』ではなく『リュウシヨウ』が本来らしいですが、先生は『たかお』で通していますね」

え。またお名前まで小難しい。

「ご実家はお寺なんだそうです。一人息子で、やはり寺を継ぐことを期待されていたとか」

うお。お坊さんですか！ 似合わない！！

「勘当されたと、聞いたことがあります」

きゃああ。すげー。凄いよ。勘当とか、このご時世本当にあるんだ。

「さて。設置はこれでもいいでしょうか？」

大型のモニター、微調整までしてくれてありがとうございます。なんか前より使いやすくなったような気がします。

「お手数おかけしました。スイマセンこんなことまで」

「いいえ。コレも仕事ですから」

にこやかに仰る藤埜さんに、後光が射して見えた。

で、高尾先生、まだ起きてこないけど放置していいですか。

藤埜さんの、これで仕事がはかどりますね、ってプレッシャーとか、気にしない方向で。

リビングで落書きしてたら、低血圧って顔に書いた高尾先生が出てきた。

コーヒー牛乳一気してるお坊さんの落書きの横に、寝起きのドラキュラの落書きも並べてみた。

うん。お坊さんよりドラキュラのほうが似合う。

「高尾先生。主人公のラフ、いくつか描いたんで後で見てください。それでイメージある程度固まってから、コスプレのほうをやりたいです」

ご注文は露出。やっぱりこの場合はロリ巨乳が求められてるんだろっか。

むしろ肋骨浮き出るくらいスレンダーで露出のほうがくる気がするけどな、アタシ的に。

だってね、考えても見てよ、ボン、キュ、ボンなら服着ててもアップील充分じゃなか。むしろダイナマイツは隠してこそその破壊力

だ。谷間チラだけでその先を妄想するのが正しい姿勢だ。違つかね
青少年諸君。

…… スイマセンね個人的主張丸出しで。

そんなこんなで、描き上げたラフ、一押しはホネホネでベリーシ
ョートだ。

「ちなみに、その心は？」

あれ。また心読まれた？

「えー、コスプレの自由度が。スレンダーなら寄せて寄せて上げて
揚げて盛って盛り付けていけばどうにでもなりますが、ダイエツト
と一緒に減らすのは難しいので。髪がショートも同じ理由です。ピ
ンク髪とか。どうせツラ。あとも一つ、女子中学生ってコトですが、
ピアスはどうか。エスカレーターの度合いをピアスの数で。
臍ピアスとか、コスプレのときだけ見せるような位置に」

痩せギスの娘が痛そうな位置にピアス。常軌を逸してる感じが『
露出』じゃなくても出せると思うけどな。ちなみにピアスは普通の
アクセサリーじゃなくて、安全ピンとか鎖とか釘とかボルトとナット
とか。

高尾先生はしばらくラフを睨んで、無言で書斎に消えた。

あ。牛乳ビン掲げた僧侶と寝起き吸血鬼も見られちゃった。

誰がモデルとか、……バレてない、よね？

#にのじゅうに

なんてゆうかさ。

作家とか漫画家とか、ある意味人間やめてるってゆうか病めてるってゆうか。

人として必要なものが欠如してるんじゃないかな。

「く、呉羽先生……、お願いです、一文字でも……」

先生は、他社のお仕事も平行していた。今日はその締め切りだったらしい。

当然のように、原稿ができていない。昨日一昨日何してたんだ。言わずもがな、一昨日は矯正器具贅美してコスプレ服研究して、昨日は半日以上寝てたよね。

目の前に、非常時の藤埜さんと同種の生物がいます。あのコスプレ服の山、この編集さんには絶対に見せられない。

……にもかかわらず、高尾先生は書斎のデスクで微動だにしない。

眉間にしわ寄せて、宙を睨んでいます。

「お茶、いかがですか」

いたたまれないので、せめて編集さんにお茶を勧めてみた。

漫画家の修羅場は何度も経験しているけど、あつちを追いつきと
もなればアシスタント入って大人数で半ばパニくりながらひたすら
描くのが普通だ。

編集さんだって、否応無しに手伝わされていた。

そうか。この場合編集さんは待つしかできないのか。それは精神的にもキツイだろうな。

そして作家さんは、一人で、書くしかないんだ。

「……恐れ入ります……。あの、失礼ですが、お身内の？」

うぎゃあ。そこはスルーしてくれよ。なんて説明したらいいんだよあたしのこと。

「ええと。赤の他人ですが、契約で、とある仕事が終わるまではここに住むことになってます。お気になさらず」

編集さん、すっげ微妙な顔した。うん。ご自由にご想像ください。

ラノベ書くの内緒らしいし、他社の人にぺらぺらしゃべって良いのかあたしには判断できない。

必要なら、高尾先生が説明するだろう。

「ともあれ、まだ何とかなる範囲ではあるんですが。……もっとケツカッチンなんていくらでもありますしね……」

虚ろな目だ。やばそうな感じだ。

「気を確かに持ってください。崖っぷちまで後何センチか測るより、ほら、前向いてゴール見ましょうよ」

ばき、と編集さんが固まった。なんかマズいこと言っちゃったのか。地雷か。

「前、……前……、は、はは、前、そうですね。ええ。前、まえ……、前ってどっちですか」

余計なコト言いました申し訳ございません。

明日の朝また来ます、と憔悴した編集さんが帰っていった。

自分の食事はデリバリーで済ませた。先生、声かけても書斎から出てこないし。ここは無理やり食べさせるトコだろうか。でも、あたしそこまでやる義理は無いと思うんだが。でも先生の財布でピザ取った以上、あたしだけ食べるのはいくらなんでもな。

……っつーか、ココで手料理作って少しでも召し上がってください、が、少女漫画の常套だけど、それなら尚更、絶対に手料理なんかしないと誓う。

フラグとかありえないありえない。

でも、やっぱり気が引けるので、ピザと栄養ドリンクをトレイに乗せて書斎のドアをノックした。

「失礼しまゝス……」

こそーっとドアの隙間から覗いたら、能面よりも無表情の先生が、天井睨んでた。コワ。

「高尾先生。ご飯、どうしますか」

恐る恐る、トレイを差し出してみる。

「……いえ、ここで飲食はしないことにしています」

あ、動いた。生きてた。

のっそりと動いた先生は、心ここにあらずでもリビングに出てきた。

多分、条件反射でピザ口に運んでるけど、何食べてるか意識してはいないだろう。タバスコたっぷり振りかけておけば良かったかな。

「あの編集さん、明日また来るって言ってました。あと、あたしのは適当に言うておいたんで、後でフォローお願いします。それと、こっちのお仕事のほうはどうなんでしょうか。あのラフで進めておいていいですか」

とりあえず言いたいことだけ。

高尾先生は片手でこめかみを揉みつつ、深く息をついた。

タイトル『苦悩の彫像』だな。

美形って結局どんな顔しても美形なんだ。笑顔が綺麗なのは誰だって当然、怒りや苦悶の負の表情すら鑑賞できてこそその美形だ。

今度高尾先生モデルにネーム考えてみようか。……少女漫画じゃなくなっちゃうか。

「……一つ、お願いがあります。あのピアスのアイデア、あれ、他で使ってもいいでしょうか」

苦悩のまま、ポツリと先生が言った。

「え？」

「あなたのアイデアですが。あれを見てから、どうしても今書いている話の登場人物にあのイメージが被ってしまっんです。リストカット常習の少女として書きすすめていましたが、リストカットよりもピアスのほうがしっくりくる。どう考えても」

え。ええと。

「……本当に、あなたのセンスは、……理屈だの理論だの計算だの、到底……」

ひょっとしてそのせいで筆が止まっちゃってたんですか。

え？ それあたしのせい？

……その、スイマセ……？

「……っ全くっ、腹が立つっ！」

がたん、と高尾先生が立ち上がった。

……はへ？

あ。衝撃で栄養ドリンクのビンが転がった。けど、蓋開けてないから大丈夫だ。うん。

……うん。現実逃避だよな。

なんで苦悩の彫像が仁王像になってんだよ。

ちょっと待て、それもあたしのせい？

あたしのせいだったの？

#このじゅっさん

「なんなんですかあなたは！ のほほんと言言で、緻密に綿密に計算して構築した世界をあっさりと！」

ちょ、激昂する美形は迫力1.5倍だよ、何なんだよ先生サマ、持病のおこり？

「しかも、こつちが既に兜を脱いでいるというのに、当の本人はのん気に売れない漫画家です？ 直感だけでやすやす人の上をいきながら、鳴かず飛ばずの現状を何だと思っているのか！ 大体ね、あなたは生温いんです！ 絵の仕事なら何でも口では言いながら気乗りしない仕事は消極的。ただの仕事ですって？ 『ただ』とは何です、作品を生み出す、それはいつだって真剣勝負でしょう、ただもクソも無い！ しかも男のプレゼントを断る口実は『親の言いっけ』、どこの小学生ですか、その上週に一度は親に飯をたかる、自立もできていない、あなた何年無駄に生きてるんです！ 拳句、押しには弱くあっさり流されて男の部屋にまでノコノコ付いて来て！

よくも今まで無事でしたね、よっぽど過保護な環境でお育ちだ、ご両親はさぞかし心配でいつまでたっても親離れ子離れできない悪循環ですか！ どうせ漫画家になるのも反対なんかされたことないんでしょう、全面的に応援されて、もともと人並み以上には器用でちよつとの努力でそこその成果を出して、逆境に抗った経験も、それに打ち勝ったことも無いのではないですか？ 許せない、断じて許せんね、許せるわけが無いでしょう！ こんな覚悟も無い人間に自分が負けたなど！！」

え、あの、その、……息継ぎしてください……？

フシューフシュー、と湯気出しそうな勢いで、先生は大きく肩で息をした。

「さつさと腹を括りなさい！　そして相応の成果を出してもらいます！」

ビシイ、と指を突きつけられた。

ちょ、その、え？

「あなたは、この私が負けを認めた人間です！」

鼻息も荒く宣言された。

言葉を見るなら、多分敗北宣言だ。

なのに、宣戦布告に聞こえる。

#2のじゅん

あの宣戦布告の後。

血圧上がったらしい先生は書斎に籠った。

翌朝、前方を見失ってる編集さんが来たときには原稿は上がっていて、編集さんは喜色満面原稿を持っていった。

こっそり聞いてみたら、元リスカ・現ピアス少女は作中ホンの端役だそう。出番は二回、二言三言メインキャラと会話する程度。どう考えてもイメージ違ったからって締め切りぶっちして書き直すほどの重要人物ではなさそう。

なのに編集さんは、より良くなった、とホクホク顔してた。数時間前は死にそうな顔してたくせに。

そうして、こっちのお仕事の一押し、ホネホネでベリーショート
のピアス少女は、当然使えなくなった。

……結果、今またデザイン起こしてるとこなんです。

「生易しいですね。常軌を逸するほどの迫力がない」

「ヌルいですね。もっと鬼気迫る何かを表現できませんか」

「全くなっていない。狂気がまるで感じられないですよこんなモノ」

……キャラ違ってませんか先生。敬語キャラは貫くみたいだけどね。ちよつとぞんざいな敬語だけどね！ 余計腹立つ敬語だけどね！！

ダメ出しの鬼と化した先生サマが踏ん返っていらっしやいます。

「だってだって、ラノベで萌えキャラなんでしょう？ いくらなんでもこれ以上は」

「あなた、表現者が自ら枠に嵌ってどうするんです。私は逸脱しろと言っているんです。言葉は精確に理解してください」

うがああああ！！ ……と叫びたい。

何なんですか大作家先生サマってば、今まで餌のいらない猫十匹くらい被ってたんですか、急に化けの皮剥いだんですか。

「先生。今からでも紳士の仮面被ってください。この際、あの胡散臭いイケメンスマイルでも我慢しますから」

はん、と鼻で笑うこの人は、一体誰だ。

「あなたにはコレくらいでちょうどいいでしょう」

ちよつと良くない。逝け面にも程がある。

「……じゃあ、どこがダメでどう直せばいいのか教えてくれたら……」

……」

「手取り足取り教えてもらおうなんて小学生ですかあなたは。バツ付いた答案直すくらい小学生でもできそうですけどね」

ムつかああああ！！！！……と叫んでも罰は当たらないと思う。

言ってくれるじゃないですか大作家先生サマ！ よーしそっちがそのつもりなら良いんだなどうなっても！！

こうなったら藤埜さんが腰抜かすほどのエグイのを描いてやる！ 良いんだなホントに！！

「……じゃあ、集中して描くんで。ラフを半日後に提出します」

出て行け、とドアを指差したら、先生はニヤリと笑って出て行った。

何だよそのやれるモンならやってみるな表情は。

くっそう！！ その逝け面、吠え面かかせてやるぜ！！

唸れあたしの黄金の右手！！

東 都で物議を醸してやる！！ そして出版社が窮地に陥っても知らんからな！！

集中するためにドアに鍵をかけて、あたしは作業部屋に籠った。

#2のじゅん

先生曰く。コスプレ少女は、自傷ではない自己否定。普通じゃない位置のピアスも大きく括って自傷行為の一種と捉えられないこともない。だから、ピアス案は最初からボツだったらしい。

……と、なると。

敢えて避けていたけれど。

自分を痛めつけないなら他人を、ならどーだとゆるー方向にもって
っっちゃうよ？

むしろコスプレ的には、アリだよな？

常軌を逸してるよ？ 確実に逸脱してるよ？ ホントーにやつち
やうよ？

もう、いろんなことどーだってイイヤー、な気分で、7枚のラフ
スケッチを描いた。

いっそ清清しいまでにドギツイ女王だ。

ちょっとソフトな革ジャケから始まって、徐々にエスカレートね。
途中ドンジョサマっぱいの通過してね。仮面も面白おかしくアレ
やコレ。

しかしミナサンご期待に背いて申し訳ないが、中身はダイナマイツじゃなくてホネホネなんだよ。肉感的から最も遠いバディでソレやるからむしろ痛々しさ半端無いよ。そーゆー『常軌を逸してる』を描いてみましたよ。

描いて、自分でもこれは酷いと思った。もしこんなコスプレがイベント会場にいたら自分の上着を着せ掛けちゃうかもしれない。描いてて気分悪くなった。

そんなのがラノベの主役張るって、最早それラノベじゃない。でも大作家先生サマのはラノベ風と最初から言っている。風、なら良いのか？

しかし、これがもし本になったとして、読む人いないような気がする。少なくとも本屋で一度手にとってパラパラと中身チラ見してこのイラストが出てきたら、絶対すぐさま棚に戻す。決してレジまで持っていけない。

……その前に編集ストップが確実か。

7枚描いて、その惨さに、逆に頭が冷えた。

なまじっか自分の画力が高レベルなもんだから（ここは謙遜しない）、この絵は見た人に不快感しか与えない。目を背けるだけだ。

先生の求めるモノは、多分、そんなものじゃない、はず。

考えて、描いた7枚、全部バツテンした。

挑発に乗ったとはいえ、半日後にはそれなりのものを突き付けてやらなきゃ気がすまない。コレじゃダメ。ダメダメ。

……一冊めは、既に話があって、それを読んだからイメージが直ぐに固まった。

今回は、絵が先で、そのイメージで先生が話を書くなり。絵に、ある程度の自由がある。その自由を最大限最良に生かせることだ。

うん。美術の課題であつたな。テーマだけ与えられて後は自由。絵とか彫刻とか表現方法すらも自由。

そーすつと、何をどうしていいかわかりません、なんて学生も出てきちゃうんだな。自由課題って、残酷なまでに学生が試される。

『表現のための技術は学べば良い。下手なら努力すれば良い。でも技術だけで絵はかけない』

突き放した態度だった油絵の講師の言葉を思い出した。そんなに昔じゃないはずなのに懐かしい。

必要なのは何かと聞いたら、自分で考えろと言われたっけ。

集中して描いて、何枚も何枚も描いて、鉛筆がチビでどんどん無くなって、それでも描いて。

『常軌を逸した露出』

これならどーだ、と、鉛筆を置いた。

ふう、と息を吐いて顔を上げたら、先生が腕組してそこにいた。

「……………あれ？」

今何時だ。半日後っていつだったっけ。

「できましたか？」

先生が手を出すから、うっかりスケッチブックそのまま渡しちゃったけど。

「……………確かあたし、ドアに鍵かけた覚えがあるんですが」

なんでいるんだこの人。

「そんなもの、ここは私のマンションですからマスターキーくらいあります。ノックしても呼んでも返事が無いので、もしかや倒れているのかと」

それはそれはご心配を。集中してたからね。時計を見たらあたし半日以上籠っちゃってたみたいだし。そこはスイマセン。でもその前に重大な問題があるよね。

「……………鍵かかる部屋だからカンヅメもOKしたのに……………」

言っちゃナンだが大作家先生サマよ、人を騙すのもいい加減にしたらどうだ。藤埜さんに訴えたらどうなるかな、どうにもならないかな。むしろ大作家先生が未婚女性手籠めにとってスキャンダルでも騒いでやろうかな。その場合あたしのダメージも大きいな。でもお堅い純文学の作家がP - - って業界的にはどうなんだろうな。試す価値はあるかな。今に見てるよ大作家先生サマあたしは泣き寝入りするオンナじゃないぜ。

混沌と暗黒の未来に思いを馳せていると。

「これは」

スケッチブックを眺める大作家先生サマが説明を求めているらしい。

「ですから、『常軌を逸した露出』です」

指差されているのは、野暮ったい制服を校則どおりに着たラフスケッチだ。

「等身大の自分自身を、露出」

コスプレがキャラになりきることなら、究極の露出は、ありのままの『自分』じゃないかな、と。

「……………なるほど」

だから、その手前の6枚は、ゴツテゴツテのコスプレだ。あのコスプレ専門店で見たディスプレイの鎧とか。顔もできる限り隠して、身体も分厚く作り物。中に誰かいてもいなくても同じだってくらい

に。

「そこで突き抜けちゃえば、コスプレが逃避じゃなく自己表現になって、将来デザイナーとかそっち方面興味湧いたり？」

あたしの知人のコスプレイヤーは、貧乏劇団で衣装デザインやつてる。だからむしろあたしは、『自己否定でコスプレ』が分からない。あんな明るく楽しくコスプレしてるのに。

「……良くできています。そういうことなら……」

ブツブツと、先生がアッチの世界に旅立った。スケッチブック持ったまま書斎に直行だ。

……どうやら合格点かな。

とりあえず、飯、風呂。そして睡眠。

なんかもうイロイロどーだってイイヤーの限界点を軽く超えているので、遠慮せず大作家先生の財布で定食を出前してがつつり食べて、バラの香り充滿するお風呂でふやけて、誰に見せんだお洒落ナイトウェア着て、結局マスターキーあるなら意味無いじゃん鍵開けっぱなしで良いや、と、寝た。

三流写真週刊誌で『純文学作家の乱れた私生活!!』のアオリ文句踊る大作家先生の巻頭特集ページ眺めてザマミロと高笑いする夢を見た。

正夢だといいな。

#にのじゅうろく

「パパラッチのミナサン……ネタはここに転がってますよ……」

朝というには昼よりな時間、リビングでふつかふかのソファでゴロゴロしながら落書きしてたら、大作家先生サマが書斎から出てきた。

どうやら先生は集中すると一心不乱に書き続ける性質らしい。徹夜明けで無精ヒゲの美形って、妙な色気が……くっそう、ケチつける所があるほうが人間可愛げがあるってもんだ。

つい、『おはようございます』より先に今朝見た夢のイメージが髭髯と。

「パパラッチ？」

その言葉に、超嫌そうに顔を顰める先生に、ピンと来た。

「あ、先生、やっぱり三流写真週刊誌はお嫌いですか」

弱点を見つけたようでちょっと嬉しくなった。

「あんなものを好きな人間の気が知れませんか。低俗な。しかも推測記事ばかりで正しくすらない」

ほえええ。低俗とな。ゴシップなんだから、それは低俗であることがアイデンティティじゃないか。

「そうですか？ 自分に関係なきや、面白おかしい噂話程度だと思いますけど」

ねえ。芸能人の誰某がくつついたの別れたの。毒にもクスリにもならないどうだっていい話。

しかし流石は大作家先生。違うお考えのようだ。

「自分に関係が無ければ、ね」

不機嫌全開で、吐き捨てるように仰る。

「何かあつたんですか？」

この毛嫌い様は。

「……………言いたくありません」

珍しくゲンナリと先生が目を伏せるもんだから、つい、これ以上突付いちゃいけないと仏心が。

「あつたんですね。追求しないで差し上げますので恩にきて下さい」
優しいなあたしって。

「……………」

その奇妙なモノを眺める眼差しは、どういう意味でしょうか。

「じゃ、先生。コーヒーいかがですか。自分の淹れた残りですけど」

先生は、深々とため息を吐いて、頂きますと弱々しく頷いた。

本当にどうしたんだ。疲れてるのか。

疲れているときには甘い物がいいんだよ。

親切にもスティックシュガー5本投入してあげたコーヒーを、大作家先生は一口飲んで咽た。

何かを訴えている睨みつけるような眼光も、げぼんげぼん言いながらじゃ迫力不足だ。

「お水、いりますか？」

氣を利かせたあたしがキッチンに行くより早く、大作家先生がそれを止めた。

「自分でやります」

……チ。水じゃなくお酢でも注いでやろうとしてたのがバレたか。

まあいいや。第一ラウンドは、判定勝ちってとこだよね。

三流写真週刊誌に頼らなくても、仇は自分で討つもんだ。

#にのじゅうなな

先生は、頭の中でアレコレ練って、描き始めるまでが大変なんだけど、いざ書き始めたら筆が早いんだって。

藤埜さんが教えてくれた。

まともなコーヒーを淹れて、藤埜さんと先生サマが話してる。この調子で書き進めたら、優等生で締め切り前に原稿上がりそうだってさ。絵でイメージできると筆もノるみたいだ。

編集的要望としては、あのラフのとおりでほぼOK。でも、絵面をもうちよつと華やかに、だそうだ。

そりゃあね。二次元的にお目め大きくぱっちり、手足もスラッと、美少女が求められてるんだろうけどね。でもさ、先生の書くキャラって、どこにでもいる普通のむしろコンプレックスだらけの少年少女、じゃないのかな。

華やかな容姿してるヒロインが自己否定でウジウジ悩んでる、って、それ、納得いかなかった？　なくくない？

「……と、思うんですけど。先生もそう思いませんか？」

先生に話を振ってみた。先生サマの鶴の一声なら、藤野さんだつてぐうの音も無いだろう。

「そうですね。ですから、あのラフのイメージを壊さない範囲で、編集の意向を尊重してください」

……へ？

「大丈夫ですよ。今回は取り掛かりが早かったので、締め切りまでは余裕です。先生の方は順調のようですし、後は挿絵だけですね」

……………ほ？

先生サマは当然の如く淡々と、藤野さんは上機嫌に、無茶な注文をほざいて下さりやがりましたよ。

「ちょ、平凡、且つ、華やか、って矛盾してませんか？」

どんだけハードル上げる気だ。無茶振りって言葉を知っているか。

「大丈夫です。頑張ってください」

オイ！ ニコニコなんて無責任な励ましをくれるだ編集サマ！！

「あなたは、どうやら追い詰められた方がいい仕事をするようです。もっと追い込まれてください」

なんつーこと言ってくれちゃうんだ先生サマ！！

「そうなんですか？ 緒峯さんは、プレッシャーに弱いタイプで中々成長できないと言っていましたか」

え？ オネーサンがそんなことを？

「踏みつけ方が甘かったんでしょう。麦ではなく雑草です。結構図太いですよ。いきなり連れて来られた他人の家で、すっかり寛げるようですよ」

しっつれーな！ 誰が雑草！？

「なるほど。確かに血色は前よりよさそうですが」

そりゃココ来てからご飯が美味しいからね！！ 外食と出前ばっかだけど、一人暮らしのときより食生活は格段に上だ。でも藤埜サンの言われたくないよ、ゾンビだったじゃん。

「これも作品のための投資です。珍獣一匹飼ったと思えばコレぐらい」

…………… チンジュウ。

「ちょっとちょっとさっきから黙って聞いていれば好き勝手なことを！！ 誰が飼われてるんですか！ あたしがここにいるのはオシゴトのためでしょ！？ もーイイですさっさと描き上げます描いて終わらせます、それでバイバイです！！」

憤然と与えられた作業部屋に戻って、はた、と我に返った。

…………… なんかあたし操縦されてないか？

#このじゅうち

平凡、且つ、華やか。

この二つを両立させるために、あたしは姑息な手段を使った。

つまり、キャラの容姿は平凡。むしろ地味。一応スタイルは普通に良いけど、顔立ちは可もなく不可もなく。

衣装とか背景とか効果で華やかさを表現。

……むしろキャラの平凡さが浮いてるけど、でも絵面は派手。

何しろ題材がコスプレだからね、いくらでも派手にできるってもんよ。

表紙カラーではゴージャスコスプレ衣装の主人公（でも顔は仮面）、あーんど、裏表紙でハンガーにかけたコスプレ衣装を体に当てている平凡主人公（制服、校則遵守）の背面。おまけに裏技、カバーを捲るとシンプル無地Aラインワンピースに裸足、でも可愛らしく微笑んでる主人公。はつきり言ってモノクロだけとおまけが一番良い絵だったりする。この絵は、文庫のカバー下には何も無いという固定観念をもとめせずカバーを捲って見る探究心溢れる冒険者だけが手にするご褒美だ。

どーだ、隠れたカバー下はともかく、表紙裏表紙だけでもネタバシだ。

文庫本体の表紙にもイラスト印刷するってのも、あんまりやらないらしい。つかこのレベルでは今までやったこと無いってさ。いいじゃん初の試みで。

……別にね？ 表紙でネタばれても問題ないくらい面白い中身書けばいいじゃん、とか、藤埜さんもちったあ苦労しろよ、とか、考えてナイですYO？

描き上げた表紙と挿絵見て、大作家先生がまたしても完成原稿に手を入れたこととか、別にガッツポーズなんかしてないし。

出来上がった絵を渡したときに、締め切りまで余裕あるならこれくらいやって下さいよ、とお願いしたら、藤埜さんが酢を飲んだような顔したけど、別に喜んでないし。

晴れ晴れと二冊目のお仕事を終えて自宅に帰った。

やっとお風呂で熱唱できる、一応はこれでも遠慮してたんだ、はあ肩凝った、一流レストランも毎日だと飽きるよね玉子かけご飯が食べたいな、と安心したのもつかの間。

パソコンおよび仕事道具一式を大作家先生んトコにおいてきちゃったことに気付いて、自分で電車でPC運ぶわけにもいなくて、藤埜サンにお願いしたらどうせ三冊目も直ぐ取り掛かるんだからと運んでくれなくて、泣く泣く大作家先生ん家に舞い戻る羽目になった。

……せめてあのキッチンでインスタントラーメンくらいは食べられるように、鍋と包丁とまな板とドンブリは持っていていこう。

閑話 とある（特殊な）服飾店アルバイト、Aさん（20代 女性 特記事項・

もともと活動報告に載せていた小話です。

そのお客さんは、店に入る前から目立っていた。

可愛らしい格好の彼女サンを連れてこんな所に来ちゃうって、どんなツワモノかと興味津々に眺めていると、彼女サンを外に待たせたまま店内に入ってきて、これまたびっくりした。

超美形。

ヤバイヤバイ、私の最愛のルシフェル様（『星の数ほど抱きしめて（SFアクションボブゲ）』の悪役キャラ）の地位が揺らぐ。

3次元なんかに乙女のハートを持っていかれるわけには行かない。

『運命？ これが運命だというのか！』 『神などに縋っても無駄だ！』

ルシフェル様の決め台詞を脳内で反芻して気を静めた。大丈夫、大丈夫、正気に戻れ自分。腐女子人生をルシフェル様に捧げると誓ったんだから！

深呼吸して、改めてお客様を見る。

うん、よくよく見ればスレンダーな体つきは、ルシフェル様のような鴉の濡れ羽色の翼なんてどこにもない。彫りの深い顔立ちも薄い唇も、ルシフェル様の見るものを陶然とさせるパーフェクトフェイスには及ばない。

あのお客はただの三次元。どんな美形だろうとトイレに行く存在だ。

「よし、今後は決して惑わされないぞ！」

握りこぶしで自分に言い聞かせていると、件の美形がカウンターに近づいてきた。

「いらつしゃいませー。何かお探でしょうか？」

うーん。近くで見ると着ている物も一流だし、ツクヅクこの店に不似合いな客だ。冷やかしだろうか。

「一般的なコスプレとは、どんなものでしょうか？」

……うおっと。柔らかいテノール。これはエリック君（『星の数……』主人公の仲間その1、序盤で主人公の身代わりでルシフェル様の奴隷に！）の美声とちよつと似ている。

「……し、失礼しました！ あ の、服をお探ですか？」

一瞬美声に気を取られ、なんとも間抜けな受け答えをしてしまった。服屋で服以外の何を探す。

「はい。できれば、一般的なものから徐々に深いものまで、段階的に揃えたいのですが」

おおっと。この美形サン、初心者か。揃えるって、先ずは試しに一着でいいんじゃないの？

「そうですね…。好きなキャラとか、ジャンルはございますか？ 制服系なんかが最初はお勧めですけど」

そう言いながら、男子は皆大好き、SFロボットアニメ金字塔の軍服コーナーに向かおうとすると。

「あ、いえ。私ではなく。女性用のものを」

美形サンが手を振った。

……え？

………彼女サンか！！ 外で待つてる彼女サンに着せるのか！？！

表のディスプレイに見入っている彼女サンに目を向ける。顔は良く見えないけど、可愛いシフォンのワンピースだ。きっと顔も可愛いに違いない。

ディスプレイのプレートアーマーは2m近くあるから、比較して彼女サンの身長は160cm弱だ。スタイルもよさそうで、コレはお勧めし甲斐があるというものだ。

「プレゼントですか？ イベント用でしょうか。それとも……？」

お二人でお楽しみ用？ とは、あんまりあからさまには聞けないけどさ。

「ああ。まあ、そのような物です」

うひゃあ肯定したよ臆面も無く頷いたよ彼氏がこんだけ惚気てたら彼女サンだって恥ずかしいじゃん閨のことは秘事だって!!

つい、頬が緩みそうになるのを頑張って引き締めてるけど、成功してるだろうか。ニヨニヨしちゃってる気がする。

「そうですねー。では、こちらの制服はいかがでしょう。一昔前にはやったアニメの制服ですが、根強い人気がございます」

襟のリボンはいろんな用途に使えるしね!

ふむ、と美形サンは頷いた。

「他にも、……こちらは今一押し of 深夜アニメで、こちらは個人的に最高峰! of 美少女アニメのヒロインの制服デザインで、……あとコレも、ゲームの人気はさほどではありませんでしたが制服が可愛いので、実際に着てみると楽しいかもしれません」

18禁エロゲだけあって着崩れやすいデザインもお勧めポイントだ。

ふむふむ、と美形サンが感心している。

「後は、ですねー。こちらのコーナーは和装っぽいデザインのもがございます。やっぱり巫女さんは定番! ですし、くノ一コスもございます。コレは忍者アニメの定番で夏向きですね、鉢巻はあちらに各種ございます。それに、今店頭には置いていませんがお姫様系もカATALOGでご注文いただけますよ。あ、メイド服はあちらです。……あとはー、ファンタジーのアニメやゲームのキャラは、キャラも

種類も雑多で自作する人が多いので、アクセサリー系は取り扱っておりませんが、完成の服は、多くはありません」

残念だ。この美形サンが邪神の神官コスで彼女サンが生贄の村娘役なら、そりゃー盛り上がっちゃうだろうに。

「ナースはピンクが一押しです！」

「婦警さんセットはおもちゃの手錠つきです!!」

「あ、コレを忘れちゃいけない、スクール水着！ちゃんと名札も別売りで」

「猫耳！ しっぱ!!」

「コレがあれば猛獣使いも女王様も！」

……ちよつと、いや、かなり暴走した、と自分でも思う。けど、お勧めしたほとんどをお買い上げになった美形サンは、滅茶苦茶オットコマエだった！ 清らしい漢だ!!

これで向こう一年は飽きることが無いんじゃないだろうか。

やっべー、コレ、彼女サンも初心者だろうに。

まさかチョーキョーされちゃうのかな。逃げてー！彼女サン超逃げてー!! (笑)

しかし、本日の売り上げ計算が楽しみだ。いい仕事したな自分！

あ、でも宣伝のためにコレだけは言っておきたい。

当店は、アダルトグッズ販売店ではございませんですよ。あくまでコスチュームプレイに特化した服飾店でございますよ。

……ええと、誰に向かって言い訳してるんだ自分？

#さんのいち

……どうしてこうなった。

泣きたい。マジで泣きたい。っつーか涙目になってる。

目の前の地獄絵図からなんとしても逃れたい。なのに、ヘンタイ大作家先生サマがそれを許してくれない。

会場は空調もちゃんと効いている。なのにこの暑苦しさ、息苦しさを、不快指数の高さはなんなんだ。

ステージ上では、ボディアビルの全国大会とやらが行われておりまっする。

「……あの。なんでこんなモノを見物にきたんでしょうか」

客席にも、ダンベルがお友達みたいな人たちがいっぱいだ。

三冊目のための取材です、と連れ出された記憶がある。今朝の話だ。遠い昔のような気が。いや、気が遠くなってるんだ。

「ですから、取材です。次作は、ボディアビルを題材に……」

「のおおおおお!!」

叫んだ。叫びましたよマジに。

「なに考えてるんですかラノベでしょうライトノベルでしょうライ
トって軽いつて意味じゃないんですか軽い読み物なんでしょうなん
だつてこんな重苦しいもの持つてくるんですかありえないありえな
いですよ読み物つて読む人あつてのものじゃないですか誰も読みま
せんつて信じられな―い！！！」

本気で、大作家先生サマの胸倉掴んで訴えた。

「なにが許せないつてあのナルナルした筋肉ダルマ！ オイリーに
光る小麦色の肌！！ 齒が命なのは芸能人だけで充分だろキラリン
口元！！！！ あんな連中みんな脳内麻薬中毒なんですよ超人なんで
すよ人間超えちゃつてるんですよ！！！」

会場内でこの暴言は流石に拙いと思ったのか、先生はあたしを引
つ張つてロビーに出た。

「そんなに嫌ですか？」

涙目の訴えに、大作家先生も多少は思うところがあつたみたいだ。

「嫌です！ 鳥肌がホラ！」

なにが嫌つて不自然なムツキムキのマツチヨが胡乱な笑顔で決め
ポーズとか、そんなのそつちの倒錯した趣味の人だけで充分だ！！

「もお生理的にダメなんですトカゲや蛇や蛙が嫌われるのと同レベ
ルで嫌悪感です両生類や爬虫類と分かり合えますかいいえ無理です
人との間には越えられない越えちゃいけない高くて分厚い壁がある
んです」

「ほう」

腕のトリハダ突きつけてやれば、大作家先生サマは面白そうにブツブツを見やる。

「なにが『ほう』ですかフクロウじゃないですよチキンですチキンとにかくあたし無理駄目あんな美しくないモン描けと言われても描けないあんなモン描く位なら大作家先生サマのヌードデッサンのほうがなんぼかマシ!!」

「……ほう」

先生サマの声が僅かに低くなったけど、気温もちよつと下がったけど、今はそんな問題じゃない。

「なんでも描くから筋肉ダルマは勘弁して! あんな人体の美を勘違いした不自然な物体なんで描かなきゃならないのあんな益体も無い筋肉に価値は無い!!」

コレだけは譲れない。誰にだって一つや二つ触れちゃいけないブラックボックスがあるんだ。

「……ふむ。そんなに嫌なんですか」

「嫌です! 超嫌です!! ものすごく嫌です!!! イヤとかいうレベル超えて無理です!!!!!!」

涙目で訴えた。本気で駄目なんだよ分かってくれ先生。

「……ならば、是非、描いてください」

ニヤリ、と悪役の微笑で、変態逝け面大作家先生サマが、言った。

#さんのいち（後書き）

作中の暴言は『あたし』がそう思ってるというだけで、作者はボデイビルに偏見は……スイマセン。でも楽しくマッスルしている方々を誹謗中傷するつもりは無いです。

#さんのに

あたしが本気で拒否ってるのに、マジ泣きなのに、大作家先生は訊いてもいない3作目について説明してくれやがった。

1作目は精神の、2作目は外見の、そして3作目が肉体の、『自己否定』とゆるーコトらしい。

この3作目で自傷行為までも含めるから、2作目でピアスはNGだったのだとか。

ああそうですか。そんならどうしてボディビルなんですか。ボディビルってむしろマッスル礼賛肉体サイコーじゃないのか。

「では、ジムに行ってみますか。ボディビルダーがどんな日常を過ごしているか。知れば認識が変わるでしょう」

この上ジムに行つてまでマッスルを見ると。

「先生。ホントにホンキで、マッスルなんですか」

「当然本気です。ですが、主人公は筋骨隆々というわけではありませんよ」

え。

グズ、と鼻をすすりながら、変態逝け面大作家先生を見上げる。

「主人公はボディビルに憧れる女子中学生です。成長途中で鍛えたところで高が知れているでしょう」

……………早く言つて欲しかった。

「……………スイマセンちょっと失礼します」

つつーかさ。今まだマッスル地獄と壁一枚隔てた会場ロビーなんだけどさ。

こんなところでマジ泣きのオンナと見てくれだけはイケメンがいたらさ、注目浴びちゃうの当然だよな。

先生の言葉に一安心したら、周囲を見回す余裕ができた。そして興味津々な視線に気付いた。

先生に一言断つて、女子トイレに逃げ込んだ。

何たる不覚。大作家先生サマの前で無様に泣き出すとは。

手洗い場の鏡で見たら、なんとも情けない顔の自分がある。

バシャバシャと勢い良く顔を洗った。

気を取り直して、気合を入れ直して、ついでに化粧も直してトイレを出ると、ロビーの景色が一変していた。

会場内にいたはずの筋肉ダルマが、ロビーに溢れている。大会が終わったのか、それとも休憩か。とにかく筋肉のイモ洗いになって

いる。

トイレから出られずに右往左往していると、女子トイレにも筋肉……失礼、女性のボディビルダーさんがやってきた。

……いるんだ。女の人でもマッスルがいるんだ。盛り上がった腕の筋肉。Ｔシャツの首がきつそうだよ僧帽筋。普通女子の胸は脂肪のほすだけどソレはどう見ても大胸筋。その見事な大腿筋にミニスカートは……。

女子トイレも楽園ではなくなった。慌ててトイレを出る。がこの光景にひるんで足が動かない。

もし今、蜘蛛の糸が垂れてきたら。あたしは迷わず飛びついて登る。どんな頼りない糸だろうとこの地獄から逃れられるなら。

「どうしました。遅いので様子を見に来たんですが」

……クモノイト。

どうしよう。先生に後光が。

華奢にさえ見える大作家先生サマは、まるで砂漠のオアシスだ。

比較対照がナニだと、たとえ変態でも逝け面でも、清涼剤となってしまう。なんて恐ろしい光景だ。

「先生。お願いします。出ましょう」

すっかり変態逝け面にときめかないうちに。

#さんのさん（ある意味問題アリです読む前に深呼吸をお願いします先に謝って

あたしがあまりにもげんなりしていたせいか、大作家先生はタクシーを呼んだ。

運転手さんに告げた地名は全く知らないけど、このまま帰らせてはくれないらしい。精神的疲労はピークだというのに。

車のエンジンの単調な振動と適度の冷房。うっかり、美大時代の忘却のあなたに追いやった記憶が。

「あれはあたしがまだピッチピチの美大一年生だったとき」

こうなったら、聞け！　あたしの恐怖体験を！！

コレを聞いてもなお、あたしにマツチヨを描かせる気になるかね？

油絵の具とか、アレコレ使う有機溶剤の鼻を突くにおいとか、ほこりとかカビとか、放置されたデッサン用の果物とか、いろんなモノが混ざった特殊な臭気漂う教室。

デッサン用の石膏像が無造作に乱雑に置かれていたり、製作途中のキャンバスが脇に寄せてあったり、とにかく整理整頓とは程遠い空間だった。

基礎のデッサンでは、毎回モデルさんが来て、ただひたすら素描を描いていた。^{クロッキー}速写とか、今でも悪夢に見るくらいだ。

そんな中で、頻繁に来るモデルさんのなかに、ボディビルダーがいた。

ノリノリでポーズするし脱ぐのも嫌がらないし筋肉だし、デッサンモデルとしてはありがたい存在だったが、如何せんナルちゃんだった。実物以上にカッコ良く描かないと臍を曲げるのだ。

なんとゆーか、美大生にも問題があるのだが、モデルさんを対象物として見て、人間として尊重することを忘れるときがある。

何時間も裸のままポーズさせたり。他科の学生が窓やドアから覗いても放置したり。

女性のモデルさんが泣き出しちゃったりする場面もあったりして

だからそんな中、多少扱いが難しかろうと、むしろ喜んでくれるモデルは貴重だった。

「しかしヤツがつ、あたしのマッスルへの嫌悪感を決定的なものにしたんです!!!」

もともとムツキムキの筋肉は苦手だったんだけど。

ある日、いつもの如く制限時間10分のクロッキーでグロッキーになっているときに、地震が起きた。割と大きい地震だった。後から確認したら震度は4だった。

学生は皆動かなかった。疲れ果てて頭が鈍っていたのだ。壁際に積み上げられた石膏像とかが落っこちて割れても、皆何となくぼんやりしていた。教師ですら、動けないでいた。前日提出の課題があったのも原因だ。

しかしそんな中、ただ一人瞬時に動いた人物がいた。ムキムキモデルである。

ヤツは、裸だというのに、外に避難しようとした。ソレはいい。別に止めないし間違っていない。

だが、ヤツと出入り口との直線上に、偶々、あたしがいた。

最短距離で脱出しようとしたマツチヨは、箱いすに座ったままのあたしに衝突し、ふっ飛ばし、自分も無様に倒れた。

一瞬の意識の空白を経て気付いたときには、あたしの上に裸マツチヨが馬乗りになっていたわけだ。

しかしそんな状況下、あたしは見てしまった。見えてしまった。

……スッポンポンのヤツのナニが僅かに反応していることが。

その恐怖たるや、筆舌に尽くしがたい。

叫んだよ。力の限り叫んだよ。命の限りに泣き喚いたよ。母親の

胎内から生まれ出でた時よりも魂の叫びだったと確信している。

瞬間的にヤツの股間を力の限り蹴り上げたことは、正当防衛だ。

友達の女子は皆同情してくれて、恐怖を分かち合ってくれた。しかし教師をはじめとする男性陣は、オトコのセイリは不随意だとか抜かしやがって、むしろケダモノマツチヨの肩を持つ。その時股間を押さえて蹲るマツチヨからの発言は無かった。

その後の、女子の授業ボイコットやら、男女クラス別化運動やら、学年学部を越えての大騒動に至る発端となった。

……………聞くも涙、語るも涙の物語、その被害者たるあたしの心の傷は如何に深いか！

「わかりますか、男の先生にわかりますかあの恐怖が！！ 分からないなら一回ムキムキマツチヨに押し倒されてくださいこの恐怖を実感してください！！！」

話しているうちにエキサイトして、また涙が。

大作家先生は、なんと微妙な顔で、詰め寄るあたしから目を逸らした。

所詮貴様も遺伝子XY、マツチヨの味方か。ヤツを擁護する発言するなら、それなりの覚悟をすることだ！

どんな言葉が、と身構えていると。

「……精神的に未熟だとは思っていましたが。……本当に小学生並だったんですね……」

うえ？

……それはどーゆー意味デスカ。

「ひよつとして、赤ちゃんはコウノトリが運んでくると信じていませんか？」

「どーゆー意味ですか！ 人を馬鹿にするのも大概にしてください……」

憤然と、胸を張った。

「赤ちゃんはキャベツのゆりかごに眠っているんです……」

キュキュキュー……

タクシーが急停車した。

……しーん……。え、ええとお……この空気、どっしたら……。

お約束のボケは、イタかった。痛すぎた。

ターゲットの先生は平然としているのに、誤爆で耐性の無い通りすがりの運転手さんに致命傷を与えたらしい。

「ゴホン。運転手さん、ちょっとしたジョークですから。ちゃんと分かってます。今更そんな」

運転手さん、ごめんなさい。

イロイロごめんなさい。

心底反省してる。このとおりだ。

「あ、あの、降ります。ね、先生、降りましょう、ココで今すぐ！」

大作家先生の腕引っ張って、無理やり降りた。

大作家先生がお金出して、釣りはいらない、と言っていたが、運転手さんお金受け取る気力すらなさそうだった。とりあえず助手席に5千円札放り投げて、その場を可及的速やかに後にした。

#さんのよん

降りてそのままずんずん歩く。

もー恥ずかしすぎる。

成り行きで見ず知らずの運転手さんにまで暗黒の思い出を晒してしまっただじゃないか。

大体あの運転手さんもずっと空気に徹してたのに、なんであそこでリアクションするかな。

「どこに向かっているんですか」

空気なら最後まで空気で居てくれればいいのに、もしくは途中でそれでも存在主張してくれればいいのに。

「道、わかっています?」

そしたらあたしだってあんな体張ったボケしないよ。

「いい加減止まりませんか?」

あれ、笑ってたよね、絶対笑ってたよね、運転できないくらいにクリティカルしちゃったんだよね。

「……このまま突き進むと、ホテル街ですが」

もーあのタクシー乗れない、いや、あの運転手さんには二度とめぐり合わないだろうけど。

「子供の作り方、教えて欲しいんですか？」

ちょ、うつさいな、なに不穏なこと言っただよ大作家先生サマは。

「……………で、え？」

ええ？ なにか不穏なこと抜かしやがりましたか大作家先生サマ！？

「ああ。やっと止まりましたね」

明るい太陽の下、爽やかに似非紳士スマイルだ。

「この際あなたの人格的成長を願って生命の神秘を教えることもやぶさかではありませんが、ソレはともかく、駅は、あっちです」

……あたし、絶対忍耐強くなったよ。滅茶苦茶スルースキル鍛えられたよ。

そのヤバい発言は聞かなかった！ そして今の進行方向から120°くらいの斜め後方が駅だと示されても大人しく方向転換する。

「……………早く駅向かいましょう」

もういいから。イロイロごめんなさい。あたしが悪いよあたしが悪いんだよ、謝るからさ。

もーさっきのことは無かったことにして、次行こうよ。

「こっちです。大通りに出れば、直ぐに駅ですから」

あたしの気持ちを汲んでくれたのか、大作家先生は、普通に道案内してくれた。

「……しかし見事な自爆でしたね。感心しました」

……時間差でキタ!!

「自爆してないです!! あれは運転手さん誤爆しちゃっただけです!! 大体先生が大人しく爆撃されてくれないのがいけないんです!!」

「想定内ですから」

平然と仰る。

「ちょ、なんでそんなことまで予測済み? 先生頭ン中どうなってるんですか」

「お花畑でないことは確かです」

「どーゆー意味!?!」

「生物多様性を痛感しています」

ちよ、なんか小難しいこと言って誤魔化そうとしてる!?

「あなたにも分かりやすく簡単に言つと、『あなたを見ていると面白』」

「簡単に言いすぎだそれ!？」

ぎゃあぎゃあわめいている間に、駅についた。

大作家先生サマがさらつとあたしの分も切符買ってくれて、あたしは更なる自爆をしないよう、黙った。

#さんのこ（ある意味非常に問題がありますスイマセンごめんなさいもう二度と

大人しく、お行儀良く、二人で地下鉄乗って。

結構混んでたけど、二人揃って車両の中ほどに座れた。

ほっと一息ついたところで、先生サマが厳かに仰った。

「先ほどあなたは、『わかりますか、男の先生にわかりますかあの恐怖が！！ 分からないなら一回ムキムキマツチヨに押し倒されてくださいこの恐怖を実感してください！！』といいましたが」

うぎゃあ。エキサイトしてる時の言葉って、頭冷えてから聞かされるとちよつとな。

あ、先生の隣に座ってる学生さん、おもむろに音楽プレーヤー弄らなくても。

「その恐怖なら、リアルに分かります。恐らくあなた以上の恐怖だったと思いますが」

え？

「ええ？ ちょ、先生そんなこと張り合わないで下さいよ、先生がそんな……そんな、じよ、じょーきょーに、……まさか……？」

「やられてません。未遂です」

うええええええ！？

あ、前のつり革のOLさん、お目めが落っこちそうですよ。

「あなたの場合は、事故でしょう。それはあなたも分かっていると思いますが。偶々不幸なアクシデントだった。その上で、事故だけど恐怖だった、その気持ちを男性陣から否定されたからトラウマになったのではないですか？ その時悶絶していたモデルが即座に非を認めて謝ったとしたらどうです？ 悪いことをしたと頭を下げられていたら、ここまで引きずりましたか？」

え？ ……確かに、あの時、悔しかった。

何で男のヒトたちみんな、あっちの肩を持つのか。

事故だ、わざとじゃない、しょうがない、なのに蹴飛ばすのはやりすぎだ、と口々に言った。

怖かったのに。なのに皆、股間押さえてるモデルを可哀相だと庇った。

「まあ、その状況で状態で、彼は到底謝れなかっただろうとも思いますが……。とにかく事故であれ何であれ、押さえ込まれることが怖いというその心境は、分かります。だから否定などしません。共感します」

……。

何となく、気持ちさが、軽くなったような……。

「……私の場合、あれは、まだ二冊ほど本が出て、でも全く売れな

い時期のことでした……」

え？

先生、なにやら苦渋の声音で、語り始めた。

『emergency emergency!! 読者様に、特に男性の読者様にお知らせです!! この先の先生の語りに不穏なものを嗅ぎ取った方は直ちにブラウザを閉じることをお勧めいたします!!』

当時、まだ全く無名で、風呂無しトイレ共同の狭い下宿にいた大作家先生は、近所というには少し遠い銭湯に通っていたような。

昔ながらのオバちゃんが切り盛りする銭湯で、でも近くに繁華街があつて、酒に酔った客が入湯を断られたり、刺青の客がいたり、それなりにイザコザもあるような所だった。

だから先生は、自由業の強みで昼間の空いている時間に通うようにしていた。

そうすると、もともと地元の客が多い銭湯のこと、顔見知りも多少はできる。良く顔をあわせるなかに、ガテン系のオッサンがいた。

深夜から早朝にかけて現場で働いて、ひと風呂浴びてから帰るのが日課だったらしい。

え。なんかそれなりに混んでいたはずの車両が、微妙にこの付近、空いてないですか。

あれ？　なんかみんな息詰めてる気配？

とある日。

いつものように先生が銭湯に行くと、偶々他のお客さんが全然いなかった。男湯には例のガテンのオッサンと先生だけだった。

「……せ、せんせー…？　あ、あの、ですね…？　ちょ、そこらで

「でも、当時私は、この顔ですから女性にはそこそこもてていましたが、オトコにまでそう言う目で見られることは無かったんです。だから油断していました」

続行しないでくださいよ、あたしの隣の人、席立つちゃいましたよ！？

銭湯のマナーに則って、先生は、先ず洗い場で頭と体を洗った。

すると、他がガラガラにも関わらず、ガテンのオッサンが隣に来了。

「や、やめましょう先生。ほ、ほら、電車って、密室なんですよ、密閉空間なんですよ？ ミナサン、次の駅まで降りられないんですよ！？」

「それでも私は気付いていなかったんです。話し好きな人もいますからね。世間話でもしたいのかと、適当に相槌をうつて相手していました」

先生！ この状況にも気付いてください、先生を中心に半径二メートル、危険地帯になってます！！

次の駅、まだなの！？ ちょっと区間長くない！？

頭と体を洗い終えて、先生が湯船に向かおうとした、その時。

なぜか足元に石鹸が。

すってーん、とすっ転ぶ先生。

あいてて、頭打った、何でこんな所に石鹸が。

おい、大丈夫か兄ちゃん。

あ、どうもご親切に。

いやいやいいってことよ。

(中略 でも大丈夫)

(中略 まだ大丈夫)

(中略 ギリ大丈夫?)

.....。

「先生、タクシーは運転手さんお一人ですけど、電車だと他のお客さんいっぱいいるんです。誤爆が恐ろしい被害です、クラスター爆弾です」

宙を見据えて話し続ける先生は、懇願も聞いちゃくれない。

「これは駄目かと諦めかけたとき.....」

諦めかけたとき.....? どうした、どうなったんだ!!

プシュー、『お出口は右側→右側でえす→ お乗換えは.....』

え！？ 駅！？

やった、駅だ！ みんな降りて！ 逃げ出して……！

なのに、誰一人動こうとしない。どういうこと？ 石化？

……いや、顛末を最後まで聞かないと逆に怖くて降りられないんだ！

聞くのも怖い聞かないのも怖い！ なんてホラー……！

何も知らずに乗り込んだじゃったお客さんごめんなさい……！

『ドアが閉まりまあす』

「せ、先生……？」

「これは駄目かと諦めかけたとき……」

まさかのリピートお……！！

いや、この流れなら、救いの手が差し伸べられるはず……！！

「押し掛かっていたオトコの体がグラリと……」

救いの手は現れた。

デッキブラシ持った番台のオバちゃんだった。

「大丈夫かい!？」

勇者の剣
姫様
その手のデッキブラシで、見事ガテン系オッサンを成敗して、先
生を救出してくれた。

オバちゃんブラボー！ ハラショー！！ アンタがタイショー！
！！

どこからとも無く、というか、車両中から、安堵のため息が。

「全く、前にもこっぴどく懲らしめてやったのに、まだ懲りてないのかい！ もうアンタは出入禁止だ！ アタシの目の黒いうちは、二度と暖簾をくぐらせやしないよ！」

そう言って、オバちゃんは男を蹴り飛ばした。強い。

前にも。

そうなのだ。このオトコ、痴漢行為の常習犯だった。そんならむしろ警察に突き出してほしい。

先生はふらふらになりながらも、オバちゃんにお礼を述べた。

すると、オバちゃんは豪快に言い放った。

「アンタもねえ。そんな顔であのクズの好みにはうちり当てはまっちゃったんだねえ。そんな華奢なナリしてちゃ襲ってくださいと言わんばかりじゃないか。アッハッハ！ キレーな顔しちゃって、アタシも若かったらお願いしたいね！」

アイタタター……………

車両内、心は一つだった。先生除く。

#さんのろく

こういつとき、なんて声かけたらいいんだろうか。

慰める？

なんて？

むしろ古傷抉っちゃったらどうしたら……？

「せ、先生。あの……」

沈痛に顔を伏せていた先生は、ふうー、と深々と息を吐いた。

「……ですから、私は、この体験を最大限生かそうと考えたんですよ」

はい？

「文筆業なんてね。身を削ってナンボ、自分ネタなんか切り売りしてナンボです」

へ？

「あの遣る瀬無さをぶつけた三作目が賞をとって、おかげさまで風呂付のアパートに引っ越すことができました」

ええ？

「作品として昇華したため、私は変にトラウマになることも無く、むしろステップアップできたという訳です」

あの出来事には、今や感謝さえしています。

……などと晴れ晴れと先生は仰った。

えええ〜！？

車両内、今みんな目が点だ。この一体感は何なんだ。

「だってそうでしょう？ 賞を取るほどのインスピレーションとモチベーション、根拠の無い矜持をそれと知らしめてくれたこともプラスです。以後は危険回避に気をつけるようになりましたね」

ちよつ、あの、…… ええ… えええええ〜？

「ですから」

呆氣にとられて言葉も無いあたしに、大作家先生は、厳かにのたまった。

「あなたも、是非、描くべきです」

……なんでそーなるっ……？

「これから行くジムは、去年の全国大会優勝者が所属しているところですよ」

「え」

言われた言葉を理解するのに数秒かった。

血の気が引く、って、こういうことだ。

「大丈夫です。私が一緒ですから」

にこやかに駄目押しする先生。

大丈夫に聞こえない。先生が一緒だから逃げ出せない、と脳内変換される。

「……せ、先生、あの、あ、あたし、お、お腹、お腹痛い、アイタタタ、ほんとーに痛い、痛いからここで失礼しますっ!!」

我ながらわざとらしい。でも本気でお腹痛いような気もする。

「そうですか。ではちょうど次の駅ですから、ジムのほうで少し休ませてもらいますか？」

そりゃ、こんな見え見えの言い訳が通用するはずも無いけどさ。

「いえそんなご迷惑をおかけするわけにはいきません、アタシならダイジョウブです一人で帰ります帰れますからっ」

このまま連行されたらどんな地獄が……。

「具合の悪い女性を一人で帰すわけにはいきませんよ」

この似非紳士！！

「じゃ、じゃあ、ジムのほうは後日に……」

お願い。お願いします！！

「いいえ。折角都合をつけてくれているんですからね」

一人で行け！！

「じゃ、や、やっぱりあたし」

一瞬でも先生に同情したあたしが馬鹿だった！！

「では。自宅にボディビルダーを大勢呼んで取材しますか？」

うひひひひ！！

「……………今行けば、もう絶対行かないでいいって、約束してください……」

白旗振ったあたしに、変態逝け面大作家先生（受認定）が、爽やかに笑った。

「そうですね。必要なことがきちんと取材できれば」

……………うそ臭い笑顔だ。約束なんて破る気満々だ。つつか、一言も約束とかしてねえし。

逃げられないようにがちりホールドされて駅に降りたとき、車
両内から妙に生暖かい眼差しが。

#さんのなな

もっさ。だいさつかせんせえサマはさ。ジブンネタきりうりするんなら、そのままびーえるのれーべるにてんこうしたらどうか。

脳筋ガテンと理屈屋物書きなんて、いかにもありそうじゃないか。本能だけで押せ押せの脳筋に、引きずられる理屈屋。

そしてびーえる界に新風を巻き起こすんだ。期待の大型新人！
衝撃の問題作！！

「……その場合、挿絵はあなたにお願いすることにしましょう」

あーじゃあ攻はせめてスポーツマンでお願いしますマツチヨは嫌です受はそりゃもー美形に描いて差し上げますから。

……て。

あれ？ 心の声に、返事が？

「……てればしー……？」

「全部口に出しています。妄想も大概にしてください」

これから向かう先が、ナニなものですから。妄想に逃げるくらい許してください。

「……じゃあ、ワンコ系編集者攻と文筆業美形ドS様誘い受で」

大作家先生はぴたりと足を止めた。

「黙れ」

あらやだ逝け面。でも今はマツチヨの恐怖に勝る物は無い。

「黙ったら行くの許してくれるんですか。マツチヨは嫌マツチヨは嫌」

あたしがヘタレてたからか、イタイ妄想があまりにもだったのか、先生は駅を出た先のコーヒースタンドに立ち寄ってくれた。

フラペチーノとベーグルサンドを買ってくれたのは、黙らせようという目論見だろうか。

「……そんなに駄目なんですか」

食欲なんかあるはずも無く、目の前に置かれた美味しそうなそれに手も伸ばさないあたしに、先生サマが言う。

何を今更。嫌だ嫌だとアレだけ言ったじゃないか。

「駄目です。本気で駄目です」

訴えれば聞き入れてくれるかもしれない、という微かな期待にすぎた。

「大体ですね、ウェイトトレーニングというものは、ですよ」

ココは、頑張って理路整然と、訴えてみようではないか！

「本来、肉体を鍛えるというのは、目的があると思うんですよ。スポーツ選手が鍛えるのは、競技のためでしょう。野球なら、サッカーなら、柔道なら、短距離ランナーなら、卓球なら、ジョッキーなら、ピアニストなら、パイロットなら、自衛隊なら、忍びなら、暗殺者なら、勇者なら。その競技によって、どこを重点に鍛えるか、どういうトレーニングが必要なのか、いろいろ考え抜いて、その競技に適している体に仕上げるわけですよ」

競技じゃないのも混ざった気がするけど。

「ですが、ボディビルは、本末転倒なんですよ。何かのために鍛えるんじゃない、鍛えるためだけに鍛えるんです。おかしいでしょうそんなの！ しかもその鍛え上げた体は、例えば腕をまっすぐ体に沿わせて下におろすこともできないんですよ、筋肉がじゃまして常に肘を張った状態になっちゃうんです、人体ってそう言うものじゃないのに！」

ゴホン。理路整然、理路整然。

「ヒトの体というものは、非常に精密に美しくできているとわたしは思っています！ 造形もさることながら、その成長が凄いです。先生の手なんかいい例です」

コレは前から思っていた。先生の手は高ポイントだ。

「まっすぐすんなり伸びた指、手荒れ一つ無い綺麗な手ですけど、

指の腹が平らになっていてペンダコがくつきり。肉体労働とか家事とかまるで無縁の物書きの手ですよ。ホントこのヒトは書くことだけに集中してるヒトなんだと分かります。ついでに上体の筋肉が全体的に薄いとか、先生肩こり酷いでしょう、肩こりからくる頭痛は尾を引きますよ。それに腰の内筋もうちよつと鍛えとかないと年とってから腰痛酷くなります。あと腹直筋、先生便通悪いでしょう。便秘はいろんな体調不良の元になります。薔薇の湯のオバちゃんじゃないですけど、あたしも先生はもう少し鍛えたほうが全体的に健康になるだろうと思います」

……あれ？　話がズレた。

「それは置いといて、あたしの手だって所々インク付いたペン刺して刺青になっちゃってるのとか、消しゴム握りすぎて親指直角に反っちゃうとか、左手の小指外側紙に押し当てる癖があるから硬くなってるとか、全然綺麗な手じゃないけど、あたしはこの手気に入ってるんです。描く手ですから。そんな風に、体はその人その人で作られるんです。スポーツ選手だって体型見たら大体何やってる人かって予想が付くでしょう？　そう言う風に鍛え上げられた体なら、あたしだってカッコいいと思います」

先生聞いてる？　ちゃんと、一生懸命話してるんだよあたし。

「でも！　ボディビルは、その名の通り、ばでいをびるでいんぐしちゃうんですよ。鍛えることだけが目的なんですよ！　目的と手段がおかしいんです！　そもそもって作り上げたその筋肉でやることは、たかが震度4で自分が逃げ出すだけ！！　ナルナルとポーズして自己満足！！　オリンピックは何のためにあるんですか！！」

……イカンいかん。エキサイトしちゃ駄目だ。理路整然。

「なので、あたしは、ボデビルというものがですね、全く！ 理解できないわけです」

どーだ！ 多少イロイロおかしいけど、言いたいことは言ったぞ！

言い切って、折角買ってもらったフラペチーノに手を伸ばした。全部とけきっていた。

先生は、沈黙思考の彫像だ。

はあ。珍しく頑張ってしゃべったからお腹すいた。生ハムとクリームチーズのベーグルサンド。先生のチョイスは外さないな。

しかしベーグルサンドって、顎が疲れるよね。会話しながら食べられる物じゃない。

あたしの言葉を咀嚼しているらしい先生と、ベーグルサンド咀嚼しているあたしと。

賑やかなコーヒースタンド。有線の軽妙なDJの声が上滑りしているなあ。

ただの薄味アイスコーヒーとなったフラペチーノを最後まで飲んで、ごちそうさまでした、と手を合わせた。

……先生。そろそろ帰ってきてください。

#さんのはち

そのまま、コーヒースタンドで2時間が経過した。

……その間、あたしは、一回お手洗いに席を立ち、自分用にキャラメルマキアート、先生にも一応形ばかりはブレンドを買って、どうせ飲まないで冷めちゃうんだろうなと思いつつもミルクと砂糖を勝手に投入して彫像にお供えし、キャラメルマキアートを飲み干し、携帯用の小さいスケブに沈黙考の彫像をスケッチし、通りかかりの店員さんに絵を褒められ、じゃあコレアゲマスと先生の絵を勝手に譲り渡して狭い店内長時間テーブルに居座っちゃう罪悪感を解消して、店員さんにお冷とお絞りサービスしてもらって、冷めたコーヒースケッチし、先生の手だけでもスケッチし、顔だけのスケッチしたらまた店員さんがチョコチョコ覗いていたので二割増美形に描いた先生の肖像を進呈し、アイスになったお供えのコーヒーを勝手に頂いて、再びお手洗いに行つて戻ってきたら、先生が正気に戻つた。

「お帰りなさい。思考の迷路は脱しましたか」

なんとゆーか、あたしもかなり大作家先生に慣れたな。

「はい。有意義な時間でした」

先生。ジムのこと忘れてるといいな。

「それは何よりです。では時間も経ちましたし、お店出ましょう。とりあえず駅に」

「いえ、ジムに」

……くっそう覚えてたよ！

「……行くんですか」

これは、やっぱり逃げられない、かなー……。

仕方ない。実際描かなきゃならないとしても、主人公はマッスルじゃない女の子だ。背景に一匹二匹マッスルが紛れ込むくらいはどうにかこうにか。

ジムに行っちゃったら、とりあえずマッスルは目に入らない、筋肉なんか透明人間。そこにいないものとしてスルー。自己暗示。

ダイジョウブあたしは女優。握りこぶしで自分に言い聞かせる。見えない見えない。ダイジョウブ。

……今直ぐ第三次世界大戦始まったら、きっとあたし喜んじゃうな。ジムどころじゃないって。

「……種を明かしますと、今日は全国大会の開催日なんですよ。大会参加者なら当然先ほどの会場の方に行っていますし、同じジムの仲間も都合の付く限り応援に行っているでしょう。つまり今日ならば、ジムには受け付け程度にしか人がいないはずですよ」

明後日の方を眺めて、大作家先生が言う。……言う。

……え？

「……あなたほどではありませんが、私も別に好き好んでマッチョマンを見たいとは思いません。ええ。全く思いませんね。ですから、こういう日程にセッティングしたわけです」

……なんて言ったの？

「トレーニングマシンなど一通りは知っておきたいので、取材は外せないのですが」

つつーかさ。つまり、先生、自分も嫌だったの！？

「先生、まさかあたしが嫌がってるの、面白がってました………？」

なんなの？　そう言うこと？

「いいえ？　面白くなんかありません。ですが、あなたは追い詰めの方がいい仕事をするので、まあ」

……『まあ』、ナンですか！

「実際、あなたのボディビルに対する認識は、かなり鋭いと思いました。手段が目的となってしまうた、その辺りの矛盾は作中でも触れる予定です。先ほどの話を聞けば聞くほど、あなたには是非、『無駄な筋肉』を描いていただきたいと思いますよ」

楽しみです、と仰る大作家先生。

改めて、あたしは大作家先生の悪辣ぶりを思い知った。

#さんのきゅう

当初の予定より遅い時間に訪れたジムは、ホントーに閑散としていた。店番代わりにいたのが、この職員のトレーナーさん一人。……一人でも充分暑苦しい人だ。

都内有数の設備とやらで、どうやって使うのかさっぱり分からない計測機器やらなにやら、モノモノしいマシンがいっぱいだ。

先生は、案内してくれた中年のマッスル許容範囲ギリギリアウトなトレーナーさんと話し込んでいる。

こんなもの見る機会はそうそう無いだろうから、あたしは一人写真を好き勝手に撮らせてもらった。

壁にマシンの使い方の説明イラストとか張ってあるんだけど。参考にそれも写真撮ったけど。

……なんでこんなイラストまでマッチョで描く必要があるんだ。マッスル教か。

おっと。

先生が、なにやらマシンに座っております。

上からぶら下っているバーのような物を引っ張るようです。

トレーナーさんが、万歳するポーズから肘を曲げて頭の後ろに手を下ろしている。先生がバーを持ったまま同じように手を下げた。

ガッシヨン、と、ワイヤーでつながった錘が上下した。

なるほど。やっぱり動かしているところを見ないとな。

これはココの筋肉を意識してください、とか。トレーナーさんが解説している。

そしてまたポーズを変えて、ガッシヨン。

ホウホウ、総合マシーンとやらは、コレだけでいろいろな運動ができるようになっていくんですね。なるほど。

先生が姿勢を変えて、今度は足にフックを引っ掛けている。

ガッシヨン。

へえええー。さすが、機能性を追及する日本人。一台で30通り以上のやり方があるんですか。

「……ところで、先生。さっきから一番軽い錘だけしか動いてないですよ。いや、先生がマッチョになったら困りますけど。」

「……ついでに家でできる腰の内筋鍛える運動教えてもらったらいいかがでしょうか。腰痛対策に」

先生、書き始めると本当に机にかじりつきだしね。腰痛とかヘルニアとか心配した方がいいよねきっと。お腹回り鍛えると便秘も改

善するんだよ。後は食事だけだよ。

……ちなみにあたしは、椅子がわりにバランスボールを愛用している。あの不安定なものにのっかり続けるのは結構筋肉使うのだ。あたしも一時期腰痛に悩まされ、先輩漫画家さんのお勧めで試してみたら、あらびつくり効くじゃん！とゆー。インドアな職業の方に耳寄り情報だ。酷くなった腰痛には逆効果なのでその場合は病院に行つて下さい。

そんな健康情報を思い浮かべていると、トレーナーさんは、なにやら先生に耳打ちしていた。ニヤニヤと。先生が苦笑して首を振る。「それ以外なら、こういうストレッチも良いですよ。ゆっくり息を吐きながらしゃがんで、吸いながら戻る。7回5セットを、毎日朝夕に」

と、トレーナーさんが珍妙なポーズで奇妙な動きを見せてくれたので、それも写真に撮っておいた。ラジオ体操第二の中にありそうな、変なポーズだ。

「まあ、ざっとは分かりました。あと、日常のことも伺いたいんですが」

「はいはい。聞いてますよ」

トレーナーさんは隅っここの休憩場所らしきベンチに案内して、いくつかのカタログとか缶とかを持ってきた。

うわぁ。プロテインとかいろいろ。

「食事とかね。参考までに、今回大会にエントリーしたメンバーの献立票がこれです。大会前のものがこつちで、こちらは普段のものですね」

プリントアウトされた表には、カロリーや栄養素の細かい数字までぎっしり。とはいえ肝心のメニューはといえば。

野菜とフルーツと玉子の白身と鳥のささ身、それに栄養剤とプロテイン。

……これが食事か。しかもこれ一食じゃなくて一日の分量なんだよ。

食材と薬物が横並びって、プロテインは食事なのか。このでつかい缶が一週間分って何の冗談だ。

「当然間食もしませんし、お茶の類も飲みませんよ。酒もやりません。水だけです」

トレーナーさんはなぜか鼻高々に胸を張った。

「ボディビルに必要なのは、自分を如何に追い込めるかという才能です」

……そりゃね。確かにスポーツマンとか、追い込んだトレーニングするんだろうけどさ。

「ま、究極のマゾですよ」

え。それ自分たちで言うっちゃうんですか。

「あ、でも自分の肉体を苛めるってことはサドかな。まあ普通の人には中々理解できないようですが」

……あれ。あたしそんなに態度に出してたかな。失礼しました。

カラカラと笑うトレーナーさんは、一般的にみんなそうですと事も無げに言った。

「……じゃあ、なんでボディビルやってるんですか」

あまりにも平然と言うものだから、つい、不躰なことを聞いてしまった。

「さあねえ。なんででしょうね。気が付いたらスクワットしてるよ
うな。『呼吸する』『鍛える』みたいな」

……さっぱり理解不能だ。

「まあ、鍛えずにはいられないように生まれついたんですよ。でな
きゃこんな苦しいことやりません」

「ああ」

ぽん、と先生が手を打った。

「分かります。それは分かります。非常に」

ええええええ！

なんで先生イキナリ理解示してるんですか！ 先生だってマツチヨ見たくないって言ってたくせに！！

「ありがとうございます。非常に有意義なお話を聞けました。これで、迷い無く書けます」

爽やかな笑顔でトレーナーさんと握手なんかしてるし。

「いいえ。こちらこそ。小説とかでボディアビルのことを広く知ってもらうのも良いことだと思います。またいつでも来てください。…もっというる教えて差し上げますよ」

最後だけこそそと声を潜める意味はナンだろうな。あたしには関係ない関係ない。不穏なものには触らずスル！。

……腰の内筋とか、言わなきゃよかった。小さな親切のつもりが、巨大な迷惑を。

先生にびーえる妄想話ふった罰が当たったようだ。

#さんのじゅう

主に精神的に疲労困憊で、ジムを辞した。

そりゃーもー、今日一日で一生分のマッチョを見た気がする。

でもこれからそのマッチョを描かなきゃならないんだよねー……
はあ。

駅までの道すがら、お仕事のためにも情報収集だ。

「先生。それで、今回はどういったお話になる予定なんですか」
ボディビルに憧れる少女って、……想像できるか？ いや、世の中
中広いんだし実際にたら申し訳ないんだけど。

「お話したとおり、ボディビルに憧れて自分も鍛えようとする少女
が主人公です。家庭環境が複雑で、自分が女子であることを嫌悪し
ている、という心理から、ボディビルに嵌るという設定ですね。肉
体の否定というより性の否定でしょうか」

おおお。なるほど。その辺は分かります。分かりやすいです。そ
うかマッスルが男っぽいものの象徴になるわけね。

「自己を否定して否定して、それでも否定できない自分を削りだす
ところまで追い込む予定です。……が、今日の話聞いて、多少予
定が変わりそうです」

へえええ。なるほどなるほど。

……で、絵のヒントは？

「自由に描いてください」

そー言われてもね、それこそ一番難しい注文なんだけどね。

「ええと。じゃあ、最初の家庭環境って、どんな感じですか」

話す間に駅について、またしても何も言わずに先生が切符買ってくれる。

来るときの惨劇がちと脳裏をよぎる。いやいや、もうあんな最終兵器は出てこない、……はず。

今度は座れないくらいに混んでいた。ドア近くのつり革つかまっ
て並んで立つ。

今、先生の半径2 m以内に、人は5、6人だ。
危険地帯

あたしは盾になれませんから、最悪、隣の車両に逃げてください。
お願いします。

先生は、来るときの悲劇なんか気付いてもいないようで、普通に
話を続行した。

「主人公の家庭は、片親ですよ。母親が家出して、父親と二人だけ
です」

ああ。

「小学生低学年で、母親に捨てられたと思い込んだら、まあ多少は性格も捻くれるでしょう。もともと勝気な性格なので弱みを晒すこともできない。必要以上に正義漢。幼稚な男子になんて負けたくない。自分がしっかりと父親の助けにならないといけない。自分に課すものが沢山ある。そのために強くならなければならないと思い込んでいる」

うんうん。

「しかし中学ともなれば男女の体格差というのが目に見えてくる。背の高さも力強さも」

分かる分かる。

「そこで、自分も鍛えなければならない、と考える」

……。

「はい、先生。鍛えようと思ったって、中学の部活にあるような運動じゃなくてボディビルにいく女子中学生は、いないと思います」

「はい。分かっています。主人公とボディビルとの出会いは、なるべくインパクトのあるものにしたいて考えています」

にやり、と先生が笑う。ああ。もうなんか腹積もりがあるんですね。読者にサプライズですか。お金払って本読んでくれる人に、なんてことを。

「あれ？　じゃあ、その出会いのシーンって、挿絵はいります？」

「あつたほうがいいだろうと思いますよ。是非描いて欲しいですね」

藤埜さんとも相談かな。実際文章書きあがってからでも普通は間に合うんだし。間に合うように進行してるはずだし。今回は先生前倒しに動いてるから実際の締め切りは大分先のはずだし。

「先生、それだけイメージはつきりしてるなら、あたし文章出来上がってから取り掛かってもいいんじゃないですか？」

「いえ。重要な脇役を、先に描いて欲しいと思っています」

脇役？　今回は脇役にもスポット？

「どんな脇役？」

ナニその笑顔。

……悪寒が。

「震度4で逃げ出すボディビルダーです」

#さんのじゅうち

意識が飛んでいた。現実逃避とも言っ。

気が付いたら先生ン家の近所のお蕎麦屋さんだった。

お蕎麦屋なのにカツカレーが超美味しいお店だ。

先生が天ざる二つ頼んでるところで我に返ったわけで。

「あ、あたしカツカレー」

……………食べ物美味しいってのは重要だと思うんだ。

「…じゃあ、天ざる一つと、カツカレーを」

笑いを噛み殺しながらオーダー訂正する先生は、お店のオバちゃんも見ほれちゃうくらいだけだな！

「そんなんには騙されない。これは人の古傷抉るドSだ」

自分に言い聞かせてみた。

「人聞きの悪い。古傷なんか堂々と晒せばいいと言っているだけです」

鬼がいるよ。

「晒せつて。……やっぱり鬼畜な事言ってるし」

「克服したいなら正面から向き合っべきだと言っているんです。今なら私もそばにいますよ」

……………。

先生。

今なんか、凄いい台詞さらりと仰いませんでしたか。

少女漫画的な。

「どうやら、あなたは問題に直面すると、一歩退く性質のようです」

え？

「身を退く、半歩下がる、顔を伏せる、目を背ける。体の重心が後ろに退くんです。そういう反応をする人物というのは得てして、万事について逃げ腰だ」

ええ？

「積極的に物事にぶつかっていく人間の反応は、顎を引く、身構える、見据える。常に前重心です」

……………だって。

「積極性というものは成功体験の積み重ねですが、それ以上の失敗

を乗り越えた証左でもあります。失敗を失敗と思わず、立ち止まらず、方法を模索する。だからこそその結果です」

……………だからって。

「ですから。今なら、私がいいます。あなたが逃げ出そうとしたら、首に縄をかけてでも逃がしません。これを機会に、是非克服してください」

うへ？

「さっさと乗り越えてより良い物を描き上げるまで、許しませんから」

……………ちよっ?!?!

「大丈夫ですよ。死ぬことはありませんし」

ありえないありえないありえない!!!

なんなの!!なんなのこの無駄イケメン!!! 一瞬トキメキかけたじゃないか!!!

この流れでこうクルが普通!! ああ、変態逝け面大作家先生サマは普通じゃない! 全く普通じゃない!!!

あ、カツカレーこっちです。天ざるそっち。

じゃあ、いただきます。

ヤケ食いじゃないよ。カツカレーが美味しいのがいけないんだよ。
決して何かを期待したわけじゃないんだから！！

#さんのじゅっに

一つのことには気を取られると、周りが見えなくなるタイプだ。と、自分でもそう思う。

大失敗で痛感するって、……人間、痛い目見ないと分からないってことかな。

大作家先生のドSな指示を二の次にするなんて、我ながら後悔のこの字すら出てこないよ。

アレから何年経ったのか。

忘却の彼方だと思っていた『震度4で逃げ出すボディビルダー』の面影は、描いてみればはつきりと思い出せた。

とゆーか、散々スケッチしたからね。

最早、手が覚えてる。……なんてことだ。

自分の画力に絶望する日が来るなんて。

どうして忘れていないんだ。忘れたと思っていたのに。忘れたと思っていたのに。

「苦悩は後回しにしてください。顔と全身、ちゃんと描くように」

センセイ。今あたし悲劇のヒロインな気分なんです。

この気持ちをネームにしたら、ひょっとして素晴らしい少女漫画がかけるかもしれません。

「それを現実逃避と言っんです。目の前の嫌なことから逃れようと、脳が勝手にほかの事を思考する。しかし、それが素晴らしいアイデアだと感じるのは、錯覚です」

うつうつ……。ぐうの音も出やしない。

ドS変態逝け面大作家先生サマは、自分で宣言したとおり、あたしに思考すら逃げを許してくれなかった。

そして強制されるままに手を動かせば、あやふやな所など欠片もない完璧な素描。

こうして見るとあのマッスル、全国大会に出場していた筋肉よりは劣っているみたいだ。何となく、上体に比べて足の筋肉が弱いみたい。バランスが悪い。

……いやっ、マッスルの優劣なんて全く分からないけどね!!

「顔もきっちり描いてください」

先生サマ。

あたし先生に何かしましたか。

……いや、結構な態度だった気もしますが、でも、ナンだって
こつもあたしに関わるんですか。

絵か。

歯の矯正器具か。あれがあたしの敗因なのか。

今更時間を巻き戻せるはずもないしな。あのときの迂闊な自分を
どうにかしたいものだ。ドラえもん！

「現実逃避も大概になさい。そもそも、あの矯正器具のアイデアは、
敗因ではありません」

じゃあ何が悪かったっての。教えてくれたらちよっくらタイムマ
シンでもヒッチハイクしてやり直すから。

「なら、生まれる前まで戻って、母親の胎内から悟性と忍耐を拾っ
てきなさい」

……先生。舌鋒に容赦がありません。

「あなたに逃げる余地など与えないと言ったでしょう」

泣きたい。泣いていいですか。

「泣こつが喚こつが、やることは同じです。描け」

そんなこんなで、地獄の獄卒さながらのドS逝け面に見張られて、何枚も何枚も、憎いアンチクシヨウの絵を描いた。

描いてると、あの頃の必死に描いてた自分を思い出す。制限時間10分地獄の速写とか。ちょっとでもデッサン狂っていると無言でスケブの右上にバツ描いてく講師とか。

とにかく、まともな技術身に付けたくて、頑張った。描きたいモノを描くために。

描きたいもの。

……………っこんなマツチヨが描きたいわけじゃないっての！！

「なーにやってんだろあたしってば。こんなのナルナルしてるだけで美しくない、全くカッコいいなんて思えない」

イライラしてきた。

「大体ね、鍛えるって、その筋肉有効活用しないでどうすんのよ」
ばき、と鉛筆の芯が折れた。

「その無駄なエネルギー 青年海外協力隊にでも費やせってのよ世のため人のために使えってのよ」

そつだよ、自己満足だけで終わるようなモノに価値は無い！

「そんなものに、どうしてあたしが煩わされなきゃならないんだ！
」

折れた鉛筆先生に突きつけて宣言した。

「もーいいです！ 充分わかりました！！ こんなものに煩わされる自分が馬鹿みたいですよ、丸めてポイです！ ポイ！！ この先マツチヨだろうと筋肉ダルマだろうと人体標本だろうと平然と描きますよ描けます！」

大作家先生は、勝ち誇った顔で、頷いた。

「次は、教えられる前に自分で気付いて欲しいものです」

ピキ。

……馬鹿でスイマセンね！ でもあたしこんなネタもー無いし！
次なんて無いし！！

#さんのじゅっさん

くっそう。

あのドS変態逃げ面が、ぎゃふんと言うつこ見てみたい。

とはいえ。

……どーしたのか。

今までに判明している先生の弱点は、パパラッチとマッチョだ。

うん。どうしようもないね。

と、ゆーわけで。

他の弱点を探すことにします。

呉羽隆生観察日記。

初日。

朝。9時起床。起き抜けにコーヒーを一杯飲む。ブラック。かつ
てのスティックシュガー5本入りコーヒーは相当なダメージを与え

ていたんじゃないだろうか。二度と同じ手は使えないだろうけど。

その後、書斎でお仕事。覗いたらすっげー目で邪魔って言われた。
ム力。

そのまま3時間籠る。

昼。散歩がてら昼食。今日は和食な気分だったらしい。地鶏の照り焼き定食。

そのまま小一時間、公園や表通りを散策。美人さんの秋波は見事シャットアウトしたくせにティッシュ配りは3つも貰ってた。二つはあたしにくれた。……一つは自分用なのか。

帰ったら、先ずきつちりうがい手洗いして、また書斎にお籠り。

チラッと見えた感じ、先生は、アイデアを練っている段階ではほぼ脳内でのみアレコレ考えているらしい。書き始める前にざっとノートに大筋書き出して、後は原稿用紙だ。

……今どき、手書き。ポリシーなんだろうか。でも高級な万年筆とかは使ってない。普通のボールペン。

書斎に籠ってるときは、お茶もコーヒーも飲まない。書斎には飲食物持ち込まないらしい。

夕。仕事がおしてるみたいで、デリバリーのお惣菜屋さん。サラダ多め。一応栄養バランス考えてはいるのかな。でもその分量じゃ一日30品目には到底足りないけどな。せめて朝ごはん食べれば、もう少しバランス良くなりそうだけど。

ご飯の後お風呂、で、また書斎。明け方まで籠っていたみたいだ。付き合ってらんないからあたしは途中で寝た。

二日目。

朝、10時起床。先生、一日25時間制なんだろうか。起き抜けにコーヒー。ブラック。

そして書斎。

昼。ちゃんと12時に昼食。おしゃれなカフェ。でも食欲は無かったらしい。ターキーのバケットサンドは、半分以上あたしの胃の中に消えた。コーヒーはおかわりしてた。二杯目にはミルク入れた。

その後散歩。コースは決まっていなかった。昨日とは全然別方向。やっぱりティッシュ配りには引がかかっていた。

帰宅して、うがい手洗い、ごーとー書斎。何がそんなに引がかつてなのか、やっぱり筆は進んでないみたい。

夕。気分転換したいのか、外食。車でちょっと離れた海沿いの夜景が見えるおしゃれなレストラン。

しかし先生、こういうとこ良く知ってるな。いわゆるデートスポット。

……別に、あたしに気を使ってこういうトコ連れて来るような人じゃないことは重々承知している。ってことは、自分が来たいトコ

に来てるんだろぅな。

あたしはただのおまけ。だとすると、…先生一人のときにも来てたんだろぅか。

……皆さんにどんな目で見られていたのか非常に気になるところだ。うん、人目を気にする人じゃないってことも嫌って程分かってるけどね。

そして湾岸線グルっとまわって帰ってきた。ドライブしたかったのか。車内でのBGMはテキトーなラジオ。音楽に拘りはないらしい。

そして帰宅。お風呂。書斎。そして多分明け方に就寝。

三日目

朝、11時起床。ブラックコーヒー。

今日はさつと部屋の掃除してからお昼。蕎麦屋。盛り蕎麦。常連さんにサービスって、サラダおまけしてくれた。オバちゃん、多分先生が野菜不足だと見抜いてる。

散歩は公園内をぐるぐる。でも帰り道にまたティッシュ二個ゲツト。

帰宅してうがい手洗い。書斎。

夜、あたしが声かけるまで時間を忘れていたらしい。ご飯はデリバリーでピザ。イヨイヨオシゴトセツパツマッテル？

お風呂。昨日一昨日よりも長め。湯船で寝たまま溺れてんじゃないだろうかと心配になる頃出てきた。濡れた髪も乾かさずに、書斎

……え？ トイレ？ もちろん何度が行ってるけど、流石にそこまでは記録しないさ。いくらなんでも。便秘気味だろ絶対、とか考えてないデス。

……三日間の観察結果。

何とも収穫のないレポートだ。レポートとか、こついつの昔から下手だったんだよね。何書いていいのかわからない。

……弱点、このままで見つかるんだろうか。

無理っぽい気がする。

書斎に籠られちゃどうしようもないし。ここはさっさとお仕事片付けてもらわないと。

……よし。

スケッチブック片手に、書斎に突撃だ。

「先生！ 今回はナニに詰まってるんですか！」

ギロ、と睨まれたけど、ココで怯んでなるものか。

「書斎に籠ってても、解決しないです！ 一宿一飯の恩、返させて貰おうじゃないですか！！」

一宿一飯どころじゃないけどね。思っつーか強制だけだね。とにかく絵がイメージアップに役立つのなら、役立ててください。そして早く弱点を探らせてください。

スケッチブックを掲げて、睨みあう事暫し。

「……………子供、です」

やったぜ、先生が折れた！

「はいはい。男の子？ 女の子？ 何歳くらいですか。どんな感じで」

いそいそとスケッチブックを広げる。

オーダーは、素直な女の子。幼稚園くらい。転んで、泣くのを我慢。

おうおう。なんだかありがちな。先生そんなシーン考えてるんですか。

「やっぱりそう思いますか……」

ありがち、とは思ってたんですね。

「今どきの子は、むしろ警戒心強いんじゃないですか。物騒な事件もあるし、保護者も注意してるでしょうから。むしろ通りすがりに声かけられたら誘拐犯扱いとか」

言いながら、いかにも誘拐されちゃいそうな可愛い女の子を描いてみる。親がたくさん手をかけて健康に綺麗に大事にされてるよう
な。

髪はちゃんと結ってて、清潔な服。成長を見越して少し大きめ。靴も汚れたり踵潰れてたりしない。

「……ちよつと違いますね。元気よく駆け回っていきそうな」

じゃあ、キュロットスカート。髪はポニーテール。

「習い事は、スイミング。前歯が一本抜けて生え変わる時期……って感じ？」

自転車は補助輪付き。でも、そろそろ外したいかなー。って頃かな。

子供用自転車に乗ってる女の子を描く。すきっ歯で大口開けて笑ってる。

「……もう少し、ボーイッシュに」

んー、じゃあ、髪はショート。短パン。

膝小僧に絆創膏もサービスだ。

「お兄ちゃんがいるような？ そしたら服もお下がりがな。見た目、男の子に間違われちゃうくらいでいいですか」

んでも、頬の辺りに女の子らしさも残してみた。触りたくなるほつぺだ。

「……………元気良く駆けてきて、見知らぬ大人にぶつかって転んだとしたら、どうします？」

この子が？

「うーん。その大人が直ぐにごめんねと謝って、立ち上がるのに手を貸せば、『大丈夫』って言うんじゃないですか？」

「不機嫌ににらまれたとしたら？」

「ぼけつと突つ立ってるのが悪いんだ！とか？ 素直に、好意には好意を、悪意には悪意を返す感じで？」

ふむ、と先生が考え込む。

子供とぶつかって、睨んじゃうような大人か。

ふんふん、とそのシーンを描いてみた。

外だろうな。見通しの悪い角だろうか。それとも、建物から出てきたとこかな。よし、お店のドアから出てきたら、ドッカン。

軽い子供の方が転がっちゃって、ノーダメージでしかも睨んじゃうくらいだから大柄な男の人かな。でも子供が脅えるほどには柄が

悪くない。子供慣れしてない独身男だな。そーすると、服とか無頓着でくたびれてる。無精ひげかもしれない。

子供が転んでも黙って見下ろして、手もポケットに入れたまま。アオリの構図で子供目線の絵だなコレ。

勝手なイメージで描いてると、先生がじつとスケブ眺めてる。

「うーん。睨むってゆーか、どうしていいか分からなくて固まってる感じかな？ 大柄で無愛想、勘違いされやすいタイプ？」

ちよつと目元に困惑を足してみた。どーだ。

「……だから、なんでそう……」

「あ、スイマセン。ご注文は子供のほうですよね」

同じシーンを、今度は大人目線で描く。しりもちついちゃった見た目男の子中身女の子。痛いけど我慢！って顔。急いで、遊びに行く途中だったとしたら、ボールか何か持ってるかもだ。

うんうん。公園でお友達が待ってるんだね。ボール持っていく約束だから遅れたら大変だ。でも家でおやつ食べてたら遅くなっちゃって慌ててたんだ。きつとお母さんの手作りおやつだ。ちよつと失敗作混じってる。

…… よーし、こんな感じ？

先生に見せると、また、はあ、と頭を抱えた。

「そのシーン、客観も描いてください」

はいはい。じゃあ真横からの構図で。

さらさらと鉛筆を動かすのを、先生がじっと見ている。これで少しはオシゴト進むだろうか。

ゼヒ、さっさと天岩戸から出てきてください、そして弱点探しにあたしが付け入るスキをプリーズ。

#さんのじゅっよん

「……これはなんですか」

ついに先生が、リビングにふらふらと出たきた。

そして落書きしてたスケッチブックを覗く。

「……牛乳好きの僧侶と寝起きのドラキュラと天照大神です」

全部先生モデルだけだね！

「……ふむ」

うん。追求しないでください。

「コーヒー飲みますか」

「いいえ。自分でやります」

……やはりスティックシュガー5本は大ダメージだったようだ。
先生は速攻断った。

「で、お仕事終わったんですか。編集さんとか来るんですか？」

なんかもーこのリビングのこのソファ、寝心地が気に入ってしま

って、普段の落書きは大抵ココが定位置になっちゃったんだけどな。

「いいえ。散歩がてら、届けに行くつもりです」

ああ。そういうトコ先生フットワーク軽いですよね。

「この前の編集さんですか？」

あの前方不注意の。あの人にはちと顔合わせづらい。先生が説明してなかったら、多分盛大な誤解してるだろう。

「はい」

「お留守番してます」

「駄目です」

うわー、なんで駄目なんだよ。

「ついでに食事もしてきますよ。一々出直すのは二度手間です」

そんな手間は惜しむんだ……。

まあ、出版社まで行かないで外で待つてればいいか。先生が連れてってくれるご飯はいつも美味しいし。

……と、餌に釣られたことを、今後悔している。

うん。先生は届けに行くとは言ったけど、出版社までとは言わなかった。どこかで待ち合わせって可能性も当然あったわけか。

駅近くのカフェで、あの編集さんと顔合わせちゃって、向こうもすっげー気まずそうな顔した。

普通にお茶飲みか時間調整かでカフェに入ったものと思い込んでいたあたしは、苺レアチーズケーキに今まさにフォークを差し入れようとしていたところだった。

い、今更、逃げらんない……。

「構わず食べていてください。直ぐ済みます」

先生。いくらなんでも、ちょっと礼儀というものが。

先生は構わず編集さんに椅子を勧め、テーブルには妙な緊張感が漂った。

「短編の原稿です。コレで、全部終了ですね」

「ありがとうございます。……それで、今後なんですが……」

「申し訳ない。ご覧の通りですので、お話はまた後ほどに」

にべもない。先生はスパッと話をぶった切った。

……先生。その編集さん、飲み物頼むどころかお冷すらきてないよ。カフェ入ってきて今まで一分経ってないよ。

あたしはダシにされたみたいだ。

……うまうま。この苺レアチーズケーキ、紅茶と良く合いますね。アーモンド風味のタルト台って初めて食べました。先生は美味しい店良くご存知だなー。

察するに、この編集さんの社とのお仕事はコレで終わりらしい。で、編集さんはぜひとも次のお仕事の話をしたい。でも先生は、今はそっちのお仕事を引き受けるつもりはないっぽい。はつきりすっぱり切り捨てないのは、とりあえず今のところは、だからか。

……うーん。

どうしよう。あと一口でケーキ終わっちゃうよ。あたしは今時間を稼ぐべきかそれともさっさと食べ終わらせて席を立つべきか。

お皿を覗んでいると。

「美味しかったですか？」

不意打ちで先生がこっちに話を振るので、反射的に、力いっぱい頷いてしまった。

「すっごく！」

そうしたら、先生サマがニコリと微笑まれました。あたしは学習した。この微笑は、危険信号だ。

「それは良かった。私にも味見させてください」

と、フォーク持ったままのあたしの手をとって、残り一口のケーキをブスリとさして、自分の口に放り込んだ。

「あ、ああ！！　あたしのケーキ！！」

最後の一口なのに！！

「……少し甘すぎませんか」

唇に付いた苺ジャム親指で拭いながら、先生が寸評を。

「紅茶と一緒にいただくとちょうどいいんです！」

このケーキへの侮辱は許さん！

「ああ。そうですね。それなら」

「そうですねじゃないですあたしのケーキ！」

「では、また何かご馳走しましょう。とりあえず、出ましようか」

シレッと伝票とって、席を立つ。

……編集さん置き去りで。

「え？　でも」

「行きましょう」

……なんで腰に手を回すかな。距離が近すぎます。そしてその如

何にもな微笑みは誤解を量産しています。

わざと誤解させてどうしようってんですか。

先生はこのサバイボな芝居を、カフェを出てからもしばらく続けた。

「で、説明してくれるんですか？」

あたしは説明を求める権利があると思うけどね。

先生と二人で地下鉄って、いやな思い出しかないな。二度あることは三度あるのかな。

今度は車両内空き空きだから、被害者はほとんどいないよ！

「見たとおりですよ。……あちらの仕事は当面請けなくなかったの
で、少し距離をおきたかったんです。ダシにして申し訳ない。です
が、中々上手くいきましたね」

上手くって。先生は上手くやったと思いますけどね。

彼女にあまあまなラブラブ彼氏。基本、エスコート上手だし。見た目紳士だし。

問題は、彼女役があたしって事だと思えますけどね。

ってゆーかさ。

「先生。あの編集さん、イロイロ誤解してると思うんですけど」

「誤解させたんです。当面オナに浮ついて仕事が手に付かないとも思っただけです」

うん、ソレはそうなんだけども。でもね。

「あの。あたし、前に先生のトコであの編集さんに会ったじゃないですか」

そっぴいばそうでしたね、と先生が頷く。

「その時、ですね」

やっぱり誤解を招くようなことを、ですねー。

契約がどうかこうとか言っただけのような気が。

あの時の発言と、今日の先生のベタ甘な態度と。

つながり合わせたらどんな誤解に発展するかなー……？

「先生。パパラッチ、お嫌いなんですよね？」

嫌な予感しかない。先生のみならずあたしもだ。

#さんのじゅっ

先生が三流写真週刊誌お嫌いなのは、自分がネタにされたことがあるから、だそうな。

確かに、著名な文学賞なんてご立派な肩書きとこのルックス、多少は話題になるだろう。しかし、それだけでもなかった。

売れっ子作家ともなると、作品のメディア化とか当然そういったお話もあるわけです。先生には、例の問題の受賞作に映画化のお話がありましたとき。

出版社の意向とかアレコレいろいろあってお断りもできずに、さて企画ですイザ、となってから、問題が。

先生のお書きになるものは、はっきりキツパリ、エンターテインメント性に欠ける。人間の心理を深く抉る緻密で繊細な筆致は、映像化に向いていない。

監督にも演じる役者にも、そして多分視聴する側にも相当なレベルが要求されるだろうと、あたしでも想像できる。

なのに。

監督は痛快アクションムービーに実績をもつ中堅。主演俳優には話題作りのオーディションで抜擢された新人。原作にはないヒロイン役にモデル上がりのタレント女優。

先生サマはそりゃー憤慨なさった。だろうな。作品滅茶苦茶にさ

れるのが目に見える。

しかし出版社としてはメディア化はいい宣伝になるのだ。映画化作品と帯が付けば本屋では平台に山積み、公開間近ともなるとテレビでおおっぴらに宣伝できる。本の売り上げが桁違い。うっはうは。

んで先生サマも、一度は企画を了承してしまった以上これは仕方がない、と諦め半分納得しようとしたらしい。勉強になった、今後は二度とこんな過ちを犯すまい、と。

しかーし！ ジャジャーン！！ 更なる問題が！

映画化記念ぱーちーなんて最早どーでもいーやー、と、やる気無く、しかし無視することもできずに嫌々出席したら、ヒロインの女優さんが先生の美貌にノックアウト！！ 肉食系女子の猛アタック開始！！ 嗅ぎ付けた記者さんが騒ぎ立てて、ハイ、巻頭カラー独占！！

その女優さんあたしも知ってる。あんな美人に言い寄られて振るって先生ただけ面食いの、とか。自分に自信がなきゃこの美形な先生サマにはアタックできないよね、とか。フツー男の人的に、美人に言い寄られて悪い気はしないんじゃないかなー、とか。話のネタに、付き合っちゃっても良かったんじゃない？とか。チラッと思っちゃったけどさ。

出版社に抗議しても、誰だかバレバレだけど一応仮名、くーらしいくーようだと思測推測だらけの記事、名誉毀損には当たらないときたもんだ。記事自体、主役は女優さんの方だしね。

んでも実際のパーティー会場で女優さんに付きまとわれてる先生サ

マの写真がばっちり使われていては、読む人がどう思つかなんて……そりゃあなあ……ってことで、先生は大変困った事態に陥った。

そんな騒ぎの中、映画化のほうは先生サマにこっぴどく振られた女優さんが降板し、おかげでスケジュールが狂って今度は監督が仕事押せ押せで撮影どころではなくなり、先生サマのあずかり知らぬところで、企画倒れとなった。……なんつー杜撰なお話だろうか。

セキュリティの厳しいこのマンションに引っ越してきて、ゴシツブなんぞ知らぬ存ぜぬを貫き、漸く最近になって先生の周囲が落ち着いたところだったんだそう。

そんな経緯で、先生サマは例の出版社とは距離を置きたかった。でもやっぱり出版大手だしイロイロつながりもあるし、はつきり敵にはまわしたくない、と。うーん、大人の都合ってやつだね！

……と、というような説明を、藤埜さんから聞いた。

ことの元凶、大作家先生サマは、書齋でイロイロ電話を掛け捲っている。今後の対応に苦慮しているようだ。大体先生サマも迂闊なんだ、ダシにするならするで先に言ってくれば、あたしだってコレこんなことがあったのでそれは得策ではナイデスヨと応じたのに。

藤埜さんは、ライバル社と言う以上に、その出版社には並々ならぬ恨みがあるようだ。金の亡者、作家を使い捨て、売り上げ第一、……後はなんだったかな、枕詞のように出版社名の前にマイナスの形容詞がアレコレくつつけていたのが大変印象に残りました。うん、

藤埜さんがどんだけソコ嫌いかは分かったから。あ、今更言うまでも無いけど、その出版社が例の前方不注意の編集さんトコです。

そのゴタゴタのせいで先生サマがちよいと捻くれて業界に不信感持っちゃって、継続中のお仕事以外新規は断り続けてるもんだから、今回名前変えてライトノベルって企画も、ある意味リハビリっつか苦肉の策だった。

有名萌え絵師ことごくクビにしたのも、そういうナーバスな背景があつたから、先生の意向尊重が第一だったんだってさ。

今知らされる舞台裏。衝撃の真実。

そんなデリケートな状況下、おぼれる寸前で藁ことあたしが登場。うっかり先生サマの創作意欲刺激したもんだから、これは絶対逃がすな手放すな、とトップダウンの指令が出て、先生サマがいつでも直ぐ絵を描いてほしいという意向をポロリと漏らしたら、編集部一丸となってあたしをカンヅメにする陰謀を企てた、と。

……黒幕は組織だった。先生が主犯じゃなかった。いや、先生もコレ幸いと乗った感はあるけどさ。事後従犯ってやつか。緒峯さんも一枚どころじゃなくかんてるっばい。あたしの性格折込済みだ。

後はご存知の通り、押しに弱いあたしはあれよあれよと思うツボに陥った。

そーゆー話聞かされた後で、おかげさまで先生も以前のように執筆できているようですありがとうございますとか。

最初っからダシにされてたんだ。

すっかり藤埜サン信用していたあたしってば、どんだけ……。

#さんのじゅうつく

「一先ず、様子見で」

書斎から出てきた先生サマは、開口一番、気の抜けることを言った。

「ええー？ あんだけ人脅しといて、様子見？」

何なんだよ醜聞沙汰がどうか言ってたのは。

「仕方ありません。今の時点で実際に何か記事になったわけでもなし、芸能人でもない一作家と一般人女性がどうなろうと記事にする価値は低そうです」

そうか。悪い方にばかり考えてたけど、大したことないのかもしれない。だいいいな。

「が、万が一のために、一応形ばかりは取り繕っておきましょう」

は。

なにをどうとりつくろうの。

「ご両親に挨拶に行きます。連絡してもらえますか」

へ。

なにがどうしてそうなる？

あたしのおかーさんという人は、なんというか、可愛い人だ。

実家の居間で、大作家先生サマを前にあたふたとお茶とケーキなんか出して、まああそうなのー、それでなれ初めは？　なんて嬉しそうに話してる。

先生サマも爽やかな笑顔で嘘八百、いつから先生とあたしがお付き合いなにかしてるってゆーんですか。

説明してもらったし納得もしたけどね。

もし万が一記事になったときに一番ショックなのは両親だから、正式にちゃんと交際していると先に話しておく。それなら記事になっても何かの誤解と思ってもらえるってね。んで最悪の醜聞に仕立て上げられても、きちんとしたお付き合いですよと反論もできる。

理屈はわかるよ。……でも、他でもないお母さんを騙してるんだし。お父さんまで騙すつもりだし。

「……んもう、いいでしょお母さん！　そんなアレコレ聞かないでよー！」

先生もそこまで愛想振りまかなくてもいいじゃんか。その顔充分有効利用してるよ。

お母さんがお夕飯と一緒に、とか言い出す前に、何とか先生引ッ

張って居間の外に出た。

お父さんにまで遭遇させるのは嫌だ。お父さん前々から彼氏連れてきたら一発は覚悟しろって言ってる。むしろ手薬煉引いて待ち構えてるけど。

「一発ぐらい、甘んじて受けますよ。大事なお嬢さんでしょう」

「イイイイイ先生そんな漢前発言今全く必要ありません」

「……必要でしょう？」

ホラ、と指差されて、居間のドアの隙間から覗く母親と目が合った。

キラッキラしてるし。ワックワクしてるし。

「もお、この娘ったら恥ずかしがらないでいいのに！ キヤ、お母さんが照れちゃうわ！」

「……………お父さん。このお母さんの暴走を止められるのはアナタだけです。」

「おかーさん。とにかく、そんな訳で。あたししばらくは仕事でこっち来ないけど、元気だから」

「私が責任を持って、きちんと様子を見ます」

先生余計なこと言わなくていいし！

「こんな人がいてくれたらもうお母さん心配しなくていいわー。ちよつとぼんやりな娘ですけど、よろしく願いますね」

お母さん今アナタは愛娘を悪魔に売り渡しましたよー！！

「はい。こちらこそ。……自分は物書きの道を選んで親に勘当されましたから、……温かい家庭というのは良いですね。少し羨ましい」

先生その鉄壁の猫胡散臭いことこの上ないから！！

「まあああ」

ホラお母さんコロツと騙されてる！

「いつでも遊びに来てくださいね！ 大歓迎よ！ あ、今度はすき焼きでもしようか、一人じゃ中々家庭料理も食べられないでしょう？ お庭でバーベキューなんていかが？ 冬には鍋もいいわね！ お酒はいける口かしら？ お父さんの晩酌に付き合ってくれたら嬉しいわ」

「もーいいから！ じゃ、お母さん、もう行くね！ ほら、先生も」

無理やり先生をぐいぐい押して玄関までがまた長い…。

「あ、これ持っていきなさいな。お母さんのビーフシチュー。ちゃんと器に移してチンするのよ？ これも。この前お料理教室で習ったの。梅シソのドレッシング。さっぱりしてなんにでも合うから。三食ちゃんと食べてね？ 面倒だからってご飯抜いたりしちゃ…」

「はいはい分かった分かったありがとうじゃあまたねおかーさん！」

玄関を出てからもまた…。

「あ、待って待って、これ今日焼いたパウンドケーキなんだけど」

「もーいーから！！　じゃあね！！」

追いかけてくる声が無くなって、ホッと息をつくとき、先生サマがくすくす笑ってるし。

「ああいうご家庭で、こう育つんですね。……お父様にも是非お会いしたかったのですが」

どういう意味だよ！

「もう目的は済んだでしょう！　いいじゃないですかあたしのお母さんがどんなでも！　何なんですか先生あんな愛想振りまいちゃって！　お母さんがタイプなら、残念ですけどあの両親未だにラブラブですよ、娘のあたしが邪魔扱いされちゃうくらい」

「いえそれは。しかしお父様はさぞ色々苦労なさったのでは？」

だからどうという意味さソレ。お父さんは未だに朝行つて来ますのチュウしてるくらいだ。お母さん前にすると鼻の下伸び切ってる。

「なるほど。夫婦のあるべき姿ですね。理想的な」

「もー子供が恥ずかしいほどのラブラブ夫婦です。未だに恋愛中です。年甲斐も無く」

だからあんまり人に言いたくないんだ。恥ずかしい。

「そんな憎まれ口を。嫌いではないのでしょうか？ 素敵なお両親です」

……そりゃね。恥ずかしいけど、嫌いなわけじゃないし。

「あんな素直な方を騙すのは心苦しいですね。…羨ましいと思ったのは本心ですよ」

「……変な記事が出なければいいんです。ソレを祈っててください」

ホントね。お母さん、先生のこと気に入っちゃってたんだから。

これで実は…なんて、言える訳がない。

お母さんがツカリさせるのが一番嫌だなあ。

とか思ってたなら、帰りに寄り道でキラキラしいお店に連れて行かれた。

店員さんが次々とお勧めをトレイに取って見せてくれる。ダメだ。まばゆさに眩暈が。

「先生が選んでくれたのが良いです」

早々に戦線離脱した。セールストークとか催眠術だアレ。ドレもコレも素晴らしいお品物です。ハイ。うそっこのエンゲージリングなんて真剣に選ぶ気になれません。

お金出すの先生だし。先生が自分の嘘にいくら出すのかの問題だ。

……嘘のために婚約指輪までいらないと思うけどね、っつーかそこまでやっちゃってむしろ先生、後からどうする気だろうな。

よろよると一歩下がって眺めていたら、先生はハートにカットされたピンクサファイアのリングをお選びになりました。ああそう。周りには小粒のダイヤ。そりゃあご立派な。あ、お値段は聞きたくありませんよ恐ろしい。

ハイハイ、指のサイズは9号です、どういうわけかピッタリですか、お直しの必要がありませんですか。

このデザインは結婚指輪もお揃いである。二つ重なると違った趣に、ほー、へー。

ええ？　なんで結婚指輪？　え？　なんでソレまで？　あ、セツトでお安く。違う、いらないますから、むしろ不要ですから！　ちよ、先生そこは頷いちゃいけないトコじゃ！

うえ？　婚約指輪だって内側にイニシャルなんか入れたら返品できないじゃないか、やりすぎじゃね？　先生サマどこまでやるの？

「……私も、あのお母様には、非常に罪悪感を刺激されたということです」

お店出てから、先生サマがボソツと仰った。

ココまで準備しておけば、確かに万が一の時にもお母さんも安心だろう。

うん。うちのおかーさん最強かもしれない。

#さんのじゅうなな

上手いこと自分を騙せれば、この状況、少女漫画なシチュエーションなんだろうな。

美形の作家。同居。婚約指輪。更に逆境もスパイスだろスキャンダル。

しかし現実はそう甘くないってことだ。

第一に、お互いがお互いを異性と見ていない。致命的だ。

この先どうあっても甘い展開は無い。ありえない。

現に今だって、大作家先生サマは容赦なくマツチヨの絵をご所望だ。

うん。先生の書くものは、尊敬する。凄い。

けど人間としての大作家先生サマは、……なんつか、人間として、やはりちよつとな。24時間7日間付き合うにはメンドクサイ人種だと思うな。

つまりは、先生の才能に惚れても、人間性には惚れられない。いっそ藤埜さんレベルで惚れ込んじゃえば、人間性なんかどうでもよくなるのかもしれない。

……やっぱりワンコ編集×美形ドS作……。

ゲイン、と脳天に衝撃が。

「…私もあなたの絵の才能は非常に評価しますよ。負けを認めたと
言うのは本気です。が、その妄想に付き合う気はありません」

そりゃそうですねー！ あたしだってリアルに先生と藤埜さん
がピーだったらちょっと引く。

「でも表向きフィアンの頭、拳骨で殴るって酷くないですか」

「表向き婚約者でホモ妄想繰り広げるのは良いんですか？」

だからさ。克服したとはいえ、やっぱりマッチョは描いてても楽
しくは無いわけですよ。現実逃避ですよ。

「……じゃあ、ココであたしの友人の実話をご披露いたしましょう
か」

ギロリと先生が睨むもんだから、手は動かしてるよ。んで口も動
かすよ。

お友達のBちゃんは、イワユル隠れ腐女子だ。

見た目は、全然オタっぽくない。おしゃれに気を使っていてスタ
イルもいい。そしてどっちかってーと肉食系だ。

そんなBちゃんが彼氏をゲットしました。

彼氏のCサンはちょっと地味目な草食系。しかしBちゃんの見目は正しい。Bちゃんが少し見た目に手を加えるとあつという間に垢抜けた爽やかサンに変身した。

Bちゃんという素敵な彼女と、客観的にも平均以上の外見を手に入れ、Cサンは自分に自信が付きました。

すると仕事も上手くなります。ますます自分に自信が付きます。もう良いこと尽くめ！

素敵な彼女は積極的であれこれリードしてくれます。エッチだつて上手で色々してくれちゃいます。Cサンは何の苦労もなくいい気持ちにさせてもらえるわけです。

何でもかんでも男が仕切んなきゃヘタレとか文句言っちゃう他の女子とは違います。なんて素晴らしい彼女！

もうCサンはBちゃんの言いなりです。彼女の言うとおりにすれば間違いない！コレは最早崇拜！！

……そこまでCサンを手懐けたBちゃんは、オモムロニこう切り出します。

『……ホントあなたって素直で従順で、理想の受だわ。ねえ、今度素敵な彼氏をゲットしてみない？俺様でDSな鬼畜攻。きつとあなたの隠された才能が開花するわ。私、一皮向けたあなたも見てみたい』

（ココで先生サマがそんな馬鹿な男がいるんですかと突っ込んだけど、実話だ）

もちろん、Bちゃんには鬼畜攻の心当たりがあるのです。

しかし、Cサンが途中で正気に帰って、断固拒否った。まあ当然だな。

Bちゃんは、それならもうアンタ用なしよ、とあっさり別れた。

… Bちゃん的には当然だな。

…… Cサンがその後どうなったのかは知りません。草食系女子に癒されてるといいなと思います。子ウサギちゃんゲットが上手く行かなければ二次元に逃げ込むのが次善かもしれません。オンナはこりごりだと男に走ったら、ソレはそれでBちゃんの思う壺。

「……とまあ、男女間には、さまざまな悲劇喜劇が起こりうるわけですよ」

「それが実話なら、Cが馬鹿すぎるのと、Bが酷すぎで恐ろしすぎます。時々女性が、男は女の気持ちがかかっていないと嘆きますが、女性だって男の内面を無視している」

「ですから男女間というものは、計り知れない溝があるのです。相互理解なんて幻想です。お互い思い合ってる男女でもそうなのに、ましてや偽りの婚約者の間で、たかがBL妄想ぐらい」

「百歩譲って脳内で止めるならまだしも、口に出すのは止めてください。地味にダメージです。おぞましくて悪夢につながれそうです」

「薔薇の湯の出来事も糧となさる先生です。きっと男男間の壁も克服します」

「……あなた、そんなに私が嫌いですか」

「誰がそんなこと言ってるんですか。先生の作品は尊敬してます。先生の文才だけは尊重します。こんなDS変態逝け面とその場しのぎとはいえ婚約だなんてあたしの人生終わったとか、考えてませんか」

「……それは、イケメンってところだけは評価していただいているんでしょうか」

なに間抜けなこと言ってたんだ大作家先生サマ。言葉は精確について自分で言ったじゃん！

「漢字です。逝け、面、です！ 見るものに不幸を呼ぶツラってことです！」

「……この顔で色々苦勞もしてきましたが、そう言う評価は初めてです」

うん？ 先生サマ自分の顔別に好きじゃないよね？ 何をショックつけてるんだ？

「万万が一の時には、責任を取ることもやぶさかでないと考えてい

たのですが……そこまで」

「なんの話ですか？　とりあえずほとぼり冷めるまでは大人しくお仕事でしょう。ほら、できました」

小話を披露しているうちに、マッスルの絵が完成。トレーニングマシンでフッハツの図。

うん。良い現実逃避だった。あ、Bちゃんの話はマジだから。そこそこヨロシク！

#さんのじゅうち

そんなこんなで半引き籠もりでオシゴト中。

藤埜さんが雑誌片手にやってきました。

……ええ？ そんな早く記事になるものなのかな。あ、でも新聞とかは前日のこと記事にしてるんだし。不可能じゃないのかな。

…などなどビビッていたら。

「とりあえずこの号は大丈夫でした」

ですって。そんなら思わせ振りに入ってくるな。

「やはり記事にする価値は低いということでしょう。しかし、穴埋めのネタを確保していることも考えられます。しばらくは様子見が必要かと」

藤埜さんと先生が、難しい顔で今後について話し合っている。

……多分あたしも当事者だろう。なのに建設的な意見は期待できないと思われているのか、全く話に入れてもらえない。

仕方ないので、『ゾンビとドラキュラの深刻な相談』を描いてみたら結構ハマった。ゾンビと僧侶はミスマッチだ。モンスターはモンスター同士相性がいいらしい。

『最近、右足が腐り始めたんです。ドラキュラさん、エンバーミング遺体処理の相談なんですが』

『ドレドレ、ああ、これは酷い。防腐液が足りなかったんですね。一度腐り始めたらもう諦めるしかありませんよ。塩漬けにすると多少は長持ちしますが、その代わり干からびます』

うん。深刻な相談だ。

出来上がりに満足して顔を上げると、二人がこっちを見ていた。

「え？ 防腐剤？」

はあ、と先生サマがわざとらしいため息を。

「何を言っているんですか。今度、こちらの小説雑誌でインタビュー記事載せることになりました」

藤埜サンは、紙面を1ページ分確保したらしい。先生のちょっとしたインタビューを掲載する枠だ。

うんうん、と頷きながら、藤埜さんも補足してくれる。

「その中で、私生活について軽く触れる質問もします。ハッキリとでなく匂わせる程度に」

そうですか。そう言う対策は、専門家にお任せします。

「……でも、うちのおかーさん、絶対記事読むと思います……」

そんな雑誌が出たら、きつと大騒ぎしちゃうな。

『きゃあ、これってどういうこと？ もう二人の間ではそんなお話がでているの？ 大変！ 準備だっているいろあるのよ、結婚ともなると。ああもうどうしたらいいかしら！』

うん、目に見えるようだ。

『結納とか、お式はどんなの？ 節目節目の行事は大事にしなきゃ。あ、お母さんついでお着物仕立てちゃおうかしら。明るなお色の礼装が欲しかったのよ。どう思う？』

…… 大変だ。

「先生。違う方向に問題が大きくなります。程ほどに。ゼヒやり過ぎないようにお願いします」

先生サマは、分かっていますと頷いてくれたけど。ホントに分かってるかな。

うん。お母さんにもちゃんと釘刺しておかないと。

…… 後、お父さんにもお母さんの暴走を止めてもらわないとかもしんない。

#さんのじゅっく

基本、インドアな人間だから、スケッチブックさえあれば何時間でも時間は潰せる。

……しかし、迂闊に外に出ないほうがいい、とゆるー制約は、逆に外出したいという思いを煽るよね。

リビングで、最早あたしの指定席と言っても過言ではないふかふかソファから立ち上がって、背伸びを一つ。

やっぱり散歩くらいはしたい。書斎のドアに向けて怒鳴ってみる。聞こえてるかな。集中してたら返事はないだろうけど。

「先生？　もしかしてあたし一人なら、ふらふら外に出ても大丈夫なんじゃないですか？」

先生サマと一緒にだから問題なんジャン！

そのこのコンビニでもいい。外の空気が吸いたい。あー、ついでに本屋に行きたいな。今月の新刊って何があったっけ。

そう言えば×切ヤブリ常習の漫画家先生ンとこ、最近ヘルプアシ行っていないけど大丈夫なのかな。

大作家先生のお仕事以降アシとかの話がまるで来なくなったのは

オネーサンの差し金なんだろうけど。今更気付くあたりホントあたし迂闊だな。

頭の中で外出コースを思い描いていると、先生サマが書斎から出てきた。ちょうど区切りの良い所まで執筆できていたらしい。

「……却下です。あなた一人で、もしどこぞの記者に捕まったら対処できますか？」

想像してみた。

……イマイチ、想像力が。あたしがマイクを向けられるような状況ってのが、どうにも現実味がナイ。

「だから危機感が足りないと言っているんです。危機管理というものは最悪を想定して対応を考えるのが基本です。警戒する理由があるのにそれを怠るのは愚かというより他ない」

……だからさ。イチイチ言い方がね。

「そう言うところが、人間性を評価できないってゆーんです」

「それは申し訳ない。…まあ、文才を評価してくれているなら、私はそれで充分満足です」

くあ。他人の評価なんか気にしませんってか。

「うつわー、平均以上の人が言うとお腹立つなー」

無然と文句言ったら、先生サマがニヤリと笑った。

「ほら。平均以上の評価は頂いているようですし?」

先生サマ。最近本性見せ過ぎじゃないですか。最初の巨大な猫は何処に行った。胡散臭い爽やかエセ紳士は。

「……そんなこんなでストレス発散したいんです。先生は外行きたくなりませんか」

「書いている間は気になりませんが。では夜ドライブでも行きますか?」

この際、先生一緒でも我慢します。外に出たいです。

「お仕事の都合が付くなら、じゃあ連れてってください」

もー、どーだってイイヤー。

夕方にお仕事切り上げた先生が約束どおり車出してくれて、どこ行くつもりか知らないけどドライブに出発した。

少し遠出しますか、なんて呟いていたから、……遠出、ってどれくらいが遠出なんだろうか。

コンビニで飲み物とお菓子買って、長距離の構えだ。帰ってくるの深夜かな。もともと宵っ張りだから別にいいけど。

……が。

世間的に、今日は週末だったらいい。自由業って曜日の感覚がないから気付かなかった。

首都高がブレーキランプで真っ赤だ。

「……動きませんね」

「そうですね。この先のジャンクションを過ぎれば大丈夫でしょう」
渋滞で、でもドライバーがイライラしてないなら、なんてことない。

「どっち行くんですか？ 渋滞情報が……、ほら」

情報表示板で、首都高のほとんどが赤やオレンジに染まっている。

「海側とか真っ赤ですよ」

時間的に金曜の終業後、遊びに繰り出すピークにあたっちゃったみたいだ。

「……ですね。行き先を変更します。山の方に」

「山？」

渋滞で動かないのをいいことに、先生は運転中だというのにギアをパーキングにしてカーナビを操作した。

ピッピと変わる画面を見ても、頭の中の地名が付いていかない。
どこ行ってくて？ 山って、山ってどこだ。

行き先設定されたカーナビは、次のジャンクションを左に行けと指示している。

方向音痴なあたしは、地図を見ても現在位置すらよく分からない人間なので、つまり行き先について推測しようなんて無駄なことだ。

「どこ行くんですか？」

素直に聞いたのに。

「答を人に聞いては面白くないでしょう？」

……ってさ。

「少しは自分の頭で考えてみなさい。自分の行き先なんですから」

はいはい。えーっと。このジャンクションでー左が東北道？ だからー？

山方面？ って、こんな時間から行くドライブで山って、どこさ。

早々に答を諦めたけど、再び先生サマに聞くのも癪に障るので、話題を変えた。

「で、三冊目、進行具合いかがでしょう？ 前から書いてるんだか

ら、そろそろ見えてきたんじゃないですか」

前の車のブレーキランプぼんやり見ながら、ペットボトルのキャップを開ける。ついでに先生の分の飲み物もホルダーに置いた。

「そうですね…、後一日二日で書きあがります」

ほうほう。それは凄い。

「締め切りまで大分余裕があるじゃないですか。なんて優等生な。じゃあ絵もそろそろ始めちゃっていいですね」

頷く先生サマに、頭の中で段取り考えた。

書きあがったら読ませてもらって、主人公のラフ上げて、藤埜さん交えてデザイン決めてー……。

「そういえば、結局ラフ描いたのボディビルダーだけですけど。主人公ってどんな感じ？」

前に聞いたのは、片親の家庭でちょっと捻くれて、でもアレコレ頑張っちゃう主人公だった。

「……そう、ですね……。外見で言うなら、どこにでもいる女子中学生でしょう。むしろ庇護が必要に見える女らしい容姿で、自分の容姿を嫌っています。無頓着を装って、清潔ではあるものの地味でラフなものばかりを身に付ける。当然スボンだけです。制服のスカートも嫌っていて必要なとき以外はジャージ」

ふんふん。中身は可愛いのにモサダサな格好ね。

「特に病弱ではないけれど、食生活がインスタントなど偏っているので健康でもありません。成績はそこそ良い方だけれど一番ではない。運動も女子の中では良い方」

「あー。近くに、成績でも駆けつこでも勝てない男子がいるんですか」

んで、主人公の目の仇にされちゃうのが常道だな。でもその男子、実は主人公にラブってのが少女漫画だ。

「いえ。個人ではなく。成績面や運動面、あるいはクラス内でのまとめ役とか、それぞれ上に行く男子がいるわけです」

……少女漫画の王道が否定された。否、その皆が主人公に矢印なら逆ハーが成り立つぞ。

「主人公はコンプレックスを抱えて悩みますが、最終的には、それぞれに負けているところも勝るところもある、と納得します」

え？ んで、誰かとイベントは発生しないの？

「その辺は全部主人公の環境に過ぎません」

うん。そっかー。……ライトノベルと少女漫画じゃ違うよね。

「……思っに、……いくら少女漫画でも、その発想では……」

はあ、とため息つかれた。なんかすっげー憐れまれた気がする。

……悪かったなどうせあたしは売れない少女漫画家だよー！！

話す間にジャンクション過ぎて、先生の言ったとおり、渋滞が解消された。

それで？　じゃあ物語はドコで展開するのさ。

「そこで、ボデビルが絡みます」

ああ。はい。マツチヨが。……震度4で逃げ出す、例の。

#さんのにじゅう

ありえないありえないありえない。

「先生。大いに不満があります」

片手を上げて、粗筋説明中の先生サマにモノモウス。

先生サマの作品にケチ付ける気は毛頭無い。しかし。

「コレばかりは譲れません。どうしてマッチョがそんなにオイシイ役なんですか」

大雑把な説明によると、マッチョが主人公にとって憧れポジション。許せない。

「最終的には転落しますが？」

「それでもです。あんなマッチョ見て『ステキーカッコいいー！』とか？ ナイナイ」

断固拒否の姿勢を示したあたしに、先生サマ、頷いた。

「地の文では客観的な面を強調しますよ。格好良いと思いつ込むのは主人公のみ。最後には勘違いだと気付きますよ」

飄々とハンドル捌きながら嘯く。

「でもやっぱり物語は主人公視点で進みますよね？ 『カッコいい』扱いで終盤まで？」

「まあ、多少は。しかしその辺主観と客観のズレをコミカルに表現します。主人公の視野が狭くなっている部分でもありますし、丁寧」

……うーん……。

「……でも、あのマッチョを『カッコよく』は……。その、何だかんだ言ってますね。描く時は、対象を好きでなきゃ良い絵にはならないと言っのが持論なんです。どっか一点でも感情移入して妄想でも何でも膨らませて、愛ある絵にしなきゃなんですよ」

うん。前回酷すぎて自主的にボツした絵は、愛の欠片もなかった。

「そこは、実在の人物と切り離していただけると助かりますが。出来上がりを読んでもらえたら、印象はかなり違っただろうと思います」

やっぱり引き気味なのがバレバレなのだろう。先生サマも慮ってくれたらしい。けど。……ホントかなあ……。

「…メインのキャラって、それぐらいですか？」

「ですね。後は主人公の父親と、親友、幼馴染くらいです」

ん？ 幼馴染？

「幼馴染って、男の子？」

「はい。主人公に一方的に嫌われている」

「ンでもその子は、主人公嫌ってないんですね？」

お？ 今までの二作ともラブ要素皆無だったけど、ひょっとして？

「幼馴染は、主人公の両親のゴタゴタも全部知っています。そして、主人公が意固地になっていると分かっている。何となくどうにかしてやりたいとは思っているけれど、どうしていいのかも分からない男だというだけで毛嫌いされて、イライラしています」

「おおー！ それですソレ！！ 青春！ 幼馴染一押しじゃないですか！」

真っ向否定された少女漫画の王道が！

「主人公の感情としては、男である幼馴染が羨ましい。嫉妬ですね。ですから、性差を容認できれば最終的に良き理解者、友人ポジションで収まります」

……がつくり。

「なんか、先生の話ってラブはないんですか。胸キュンな展開は」

ライトノベルの読者層なら、少しぐらいはそう言う展開あってもいいんじゃないかなー。

「泥沼の愛憎劇なら一度テーマにしたことがあります」

「ソレ胸キュンじゃないし」

初恋の甘酸っぱいアレコレな爽やかな話はないんだろうか。

「そうですね。なら、四作目にはそう言う要素も入れて見ますか？」

「できるなら、ゼヒ。やっぱりラブイ要素もあつたほうが楽しいですよ、あたしが」

挿絵のお仕事のね。ドキドキ頬染めちゃう少女とか。

ホラあたし少女漫画家だし！（主張）

先生サマは、わかりました、と請け負ってくれた。やった。

「大まかに構想はあるんですが。恋愛要素も、……入れようと思えばいけるでしょう」

切り良く話もまとまった所で、先生サマの操る車は高速道路のインターを降りた。

あれ、ドコだこ。結構な距離走った気がするけど。

#さんのにじゅうち

高速を降りたら、いかにも山だった。

普段灰色ばかりの景色を見慣れているから、夜に生い茂る木々なんてちよつと怖い。昼間ならスケッチのし甲斐があるのに。

「ええーと？ 目的地？」

「ここも山付近、ではあるよね。どこだ、と思ったら道路標識があった。……いろは坂？」

「…うえ？」

「ちよつと遠出、のエリアが広すぎる。もうちよつとで関東はみ出ちゃうんじゃないの？」

「……先生、『ちよつとお出かけ』で、最長どこまで行った事ありますか？」

財布と鍵だけ持って出かける程度って、どんなんだ。

「学生の時分には、それこそ国内なら何処へでも行きましたね。流石に真冬に北海道に行ったときには着の身着のままだったことを後悔しました」

「先生、意外と行き当たりばったりな人ですか？」

それこそ意外だな。きっちりしてそうなのに。

「計画しなくてもどうとでもなる部分は、流れに任せるほうが良い場合もあります。はっきり目標が見えていれば、結構間違わないものですよ」

……。

「先生って時々お坊さんっぽいです」

こんなお坊さんが説法してくれるお寺なら大繁盛だろうな。……
先生の実家のお寺ってどんなところだろう。

「……私の家の話、聞きましたか」

ぐいーん、と急カーブに差し掛かった。シートベルト握って踏ん張る。

「はい。……スミマセン、勝手に」

前後にいっぱい車がいて、みんな結構なスピードでカーブに突っ込んでるのが凄い。地元の人かな。

「別に隠していませんから。…勘当されたことも、自由にさせてもらって感謝しているくらいです」

またまたぐいーんと。遠心力ってすごいな。

「……この前お母さんに言ってた事はなんだったんですか……」

この耳で確かに聞いた。温かい家庭がなんとか。

「一般論です。傍で見る分には良いものだなと思いますよ。自分がその一員になれるかどうかは別問題です」

ぐいーん。

「……先生、殺伐としてます」

なんちゅーかさ。先生サマって、生き物の気配が薄いんだよね。寝室覗いちゃった時もあったけどさ。

「分をわきまえていると言ってください」

意味が分からん。

ぐいーん。

目が回ってきた。先生サマよく平気だな。こういうのハンドル握ってれば平気って聞くけど、運転免許持ってない人間には分からない感覚だ。

「人の事より自分はどうなんです。曲がりなりにも一人暮らしで家を出て自立しているつもりなら、自分の家庭を作ることと視野にあるのではないですか」

ぐいーん。

「……ええーと。ぶっちゃけですねー。そのうち可もなく不可もない見合い相手と結婚するか、生涯独身か、その程度だろうと思ってますけどー」

うえ。気持ち悪くなってきたよ。コレが昼間で晴れてれば、周囲の景色も綺麗なんだろうけどさ。

「それこそ意外です。あなたは恋愛や結婚に理想を抱いているタイプかと」

「いや先生サマ、夢や希望があるから少女漫画家なんですけどね。でも理想と現実もよく分かってますよ」

ぐるーん。

んでも正直、実在の男の人に夢は見ないかなー。だってほら、あのマツチヨの一件でもさ、男性陣誰一人理解を得られなかったし。……先生以外。

「ああ。そっか。だから先生男の範疇除外なんだ」

謎は全て解けた。先生という平気なのは、そう言うことか。

ぐいーん。

いろは坂って殺人的だな。

「先生。気持ち悪いです」

もっとスピード落としてくれればいいのに。なんで周りの車もこ

んな速さで。

「大丈夫ですか？」

大丈夫じゃないです。マジ気持ち悪いです。

#さんのにじゅうに

いろは坂ってヤツは九十九折の山道で、途中で具合を悪くしても路肩に止めて休めるような道幅なんてほとんど無い。とゆうかうっかり停車なんかさせられない状況だそう。

先生サマは大変気を使いながらも、さほどスピードを緩めることなく坂を登りきった。

なぜなら、週末のいろは坂となると、イワユル峠を攻める走り屋さん系が大勢いて、つまりあたしがのん気に地元の車だと思っていた車はほとんどが攻めに來た車だそう。

大抵は一般車に対してそこそコマナーも良いらしいけど、やっぱりヤンチャな連中もない訳ではない。無用な面倒事を避けるためにも、車の流れに逆らわず通り過ぎるのが一番、とゆうことで。

……先生サマよ。ならなんでこんなトコに來たんだ。知ってたなら避ければいいじゃんか。

視界がぐるぐるする。吐き気も酷い。

ドライブでこんな悪路誰が想定する？

っつーか先生が平然としてるのもなんだか理不尽だ。あたしがこんなに酷い目に遭っているというのに。

「ちょっと車止めてください。もう吐く。マジ吐く。胃液どころか内臓まで吐きそう」

ハッキリ言葉にできたかわからないけど、唸って言ったら先生、もうちょっとの辛抱ですとかなんとか。とりあえず一番近いところに、って言ったから、聞こえてはいたんだろうな。

もう吐き気をこらえるだけでイッパイイッパイで、いつの間にか車が止まったとか気付いてなかったけど、先生サマが一度車を降りて、しばらくして戻って来た頃には、こみ上げる酸っぱいモノも少し静まった。

「大丈夫ですか？ 部屋を取れましたから、歩けます？」

あー。車降りられるのか。助かった。

差し出された手に縋って、フラフラする頭をどうにかこうにかスツキリさせようと辺りを見回して、へえ、て目を見張った。

レトロな瓦屋根の、でも立派な建物がある。控えめな照明が、雰囲気良い。凄く良い。

くそうこんな体調じゃなきゃスケッチするのに。せめて写真。和服美人がいれば尚良し。

……と思って見ていたら、和服の中年の女性がいた。おお、良い感じ、……違う、アレはイワユル仲居サンだ。

「お連れ様、いかがですか？ 宜しければ、車椅子かストレッチャ

「をご利用になりますか」

……え？

「いいえ。支えれば大丈夫です。案内を」

「はい。こちらです。お部屋、今ご用意致しておりますので、直ぐに横になっていただけます。市販のもので宜しければお薬をお持ちいたしますが、いかがなさいますか」

……なにごとだ。

「一先ず休んでみて、それでもどうにもならなかったらその時お願いします」

「かしこまりました」

吐き気を堪えつつも必死に考える。今何がどうなってる。

先生サマに支えられつつ歩む先は純和風の立派な建物で、中に入るのには実はちょっと嬉しい。黒光りする太い柱とか、年代を感じる。赤じゅうたんのロビーとか畳敷きの廊下とか、趣のある建物は、ちよつと本気でスケッチしたい。ええい何でこんなときに吐き気と戦わなきゃならないんだ、スケッチブック寄越せ。

「先生、ここ、何処ですか」

「大丈夫ですか？ 直ぐに部屋ですからもう少し頑張ってください」

「部屋って何、それよりスケブくださいスケブと鉛筆」

「はい？」

「なんて雰囲気ある廊下！ このレトロな空気、歪みのある板ガラスと木の窓枠、抑えた照明、さいっこの景色が目の前に！ 吐いてなんかいらんない、ぶっ倒れてる場合じゃない」

吐き気より景色だ。

「……大丈夫なんですか？ まだ顔色は悪いですが」

「顔色は何、この趣ある廊下で誰が吐くかってんですよ、この景色を見られただけであのいろは坂登った甲斐があります」

大正浪漫的廊下に心奪われていると、脇からくすくすと笑い声がした。

「お気に召していただいたようで光栄でございます。この建物は、当ホテル創業以来、当時のままの趣を残しております」

案内してくれていた仲居さんだ。

「細かい意匠も、全体のバランスが素晴らしいです！」

ありがとうございます、と慇懃に頭を下げる仲居さんは、しかし流石客商売だ。

「廊下は逃げませんし、具合がよくなりましたら改めてご覧いただきたく存じます。お連れ様の仰るとおり、まだお顔の色が真っ青です。先ずはゆっくりお休み下さい」

ハッキリキツパリといわれ、有無を言わず部屋に通された。

具合が悪いつてことで先に床を用意してくれていたらしい。そんなに酷い顔色してたのか、妙な押しの強さで布団に押し込まれてしまった。

「……………今更確認なんですが、先生、ここって何処ですか」

見回せばホテルの和室で、しかも上等なお部屋であることは間違いない。床の間の掛け軸もなんか曰くありそう。

「いろは坂を登って近場のホテルです。予約もなかったので空いている部屋を適当に」

……………車を止めると言ったのは、とりあえず路肩でもどこでも、という意味だったのだが。

「……………でもこの建物見られたので、モロモロ良しとします」

もー建物中見て回りたい。他のお客さんの迷惑になるかな。怒られちゃうかな。

横になってみたら眩暈がして、やっぱり血の気が引いていたみたいだから大人しくしてるけど。でも小一時間も休めば充分だし。

「つくづく、絵のことなんですな」

感心したように先生が言う。

「先生だって人の事言えるんですか」

自分だって、所構わず思考の迷宮に迷い込むくせに。

「……ですね。このホテルは、文豪が定宿にっていて、ゆかりの品なども残されているそうです。ロビーに展示コーナーがあるらしい」

はいはい。

「あたし大丈夫ですから、行ってきたらどうですか。何かあったら仲居さん呼びますから」

先生サマはいそいそと出て行った。

……近場のホテル。

近いのは嘘じゃないかもしれないけど、でもわざわざココを選んだ可能性は高いだろうな。

……。

でも、一部屋ですよ。

泊まっちゃう気なんですか先生サマ。

警戒する理由があるのにそれを怠るのはどーだこーだと言っているのは先生だと思っただが。

……まあ、突発的に出てきたんだし、わざわざ追っかけてくる記者もいないだろうし、いいのかな。

お布団に寝転がったままバッグ引き寄せて、常に持ち歩いてる小さいスケブを引っ張り出した。

今見た廊下と、この室内と。簡単に線を引く。

うーん。やつぱ、細かいところがイマイチ見えてなかった。もうちょっと休んだら、スケッチしに行こうかな。

眩暈が治まるまで、と思って目をつぶって、……目が覚めたら、早朝の空気だった。

ぼけつと見回すと、壁際に寄せた机で先生サマが書きものしていた。ひよつとしてこの人ずっと執筆してたのか。

「……オハヨーございます…?」

背中に声かけたら、はっと振り返る。

「ああ、……今何時ですか」

起き抜けのあたしに聞きますかそれ。

枕元に置きっぱなしだったバッグから携帯電話取り出すと、早朝5時半だった。

「5時半……。運転に支障があるので、チェックアウトまで少し休みます」

先生はこめかみを揉みながら、もう一組並べて敷かれてた布団に潜り込んだ。

……なんだろな、この状況。

……。

まあ、いいや。

あたしは自分が寝ていた布団を上げて隅っこ寄せると、枕元に放り出したままだったスケッチブック持って、館内探検に出かけた。

うん。やっぱり歴史ある建物は良い。

ロビーにはホテルのパンフレットが置いてあって、それによるとこの建物は明治に建てられ、何度か増改築を経て今のようになったらしい。

6時も過ぎると、従業員が忙しく立ち働くようになって、のん気にスケッチしてもいられなくなった。

仲居さんが気遣って、大浴場はもう開いてると教えてくれたから、朝風呂に行ってみた。

お風呂の脱衣所も、レトロなステンドグラスがあったり使い込まれた籐籠が良い感じだったりで、他にお客さんがいなければスケッチできるだろうと長風呂して人が切れる頃合を見計らったけど、ボチボチ人が入れ替わり立ち代りで、逆上せそうで諦めた。

部屋に戻ったら、先生まだ寝てるし。

…… ホント、何なんだろうな、この状況。

#さんのにじゅうさん

その後は、普通にチェックアウトして、ボチボチ観光したりもした。

中禅寺湖沿いの道は走っていて気持ち良いし景色もよかった。竜頭の滝は『滝』というイメージとちよつと違ったけど涼しげで気持ちよかったし、華厳の滝は流石というか圧巻だった。先生サマが『夜の華厳も良いんです』と残念そうに言ったから、昨日の目的地はココだったのかと分かったけど。

んでも有名な神社仏閣は素通りで、アレレ、って感じた。先生サマのガイドマップには東照宮も二荒山神社も中禅寺もないらしい。

時間があれば戦場ヶ原も良いんですが、と言いながら、老舗らしい湯葉割烹のお店でご飯食べて、東京に帰った。

うん。『ちよつと遠出』は小旅行だ。

これから先生サマと外出のときは気をつけよう。出かける前に目的地を明確にする必要がある。

……流石に昨日の服のままなのはね。一応ちよつと気になるよね。

そんなジュージツしたウィークエンドでリフレッシュしたら、お仕事ですよ。

先生は三作目をほぼ書き上げていて、早速藤埜サン交えて挿絵のお話。

うえーん。やっぱりマッチョの出演が多い。何でこの主人公マッチョ崇め奉っちゃってんの。視野が狭まってるってこういうことか。読みながら突っ込みを入れ、ウェイトトレーニングにのめり込んだやう主人公に早く正気に帰れと念じ、見守っちゃう周囲にどうにかしろとイライラし、空気で終わっちゃった幼馴染に未来があるよとエールを送った。

今回は、如何にマッチョを面白カッコよく描くかが課題で、もともと可愛い系の主人公は視野狭窄の度合いを前髪で表すぐらいで特に捻りがない。

ちょっとつまらないので、空気で終わる幼馴染始めクラスメイト男子一同を乙女ゲー並に各タイプ取り揃えてみた。こーゆーのに向きもせずマッチョに走る主人公。バッドエンドまっしぐらだな。

それでも、トレーニングしてメリハリボディを手に入れちゃった主人公が、ラストでは自分に似合う可愛い服着るシーンにはリキ入れたし、表紙の背景でポーキングしてるマッチョは描いてる内に多少は可愛く思えてきたし、前回から引き続きカバー下にも気付いた人特典なイラスト入れた。

そんなこんなで、締め切り余裕で、3冊目のお仕事が終了。

次のお仕事までは間が空くから、先生サマが4冊目に取り掛かる頃に連絡くれるってことで、数ヶ月ぶりに自分のアパートに帰った。

……うーん。あのソファ持ってきてきちゃ駄目かな。すっかりゴロゴロ具合が気に入ってしまった。

#さいごの、いち

……どうして、こんな……。

ぺらりと捲った手書き原稿。まだ途中だというそれを読んで、愕然とした。

『高尾紅葉』の4冊目。自己否定を一貫したテーマに、精神と外見と肉体を否定してきたシリーズ。

4冊目は。

まだ結末の無い4作目は。

4冊目。年に4冊って言われたら、普通3ヶ月に一冊計算だよね。前回は大幅に締め切り前で上がったことを計算に入れても、そろそろ次取り掛からないとやばいんじゃないかと思う。

次に取り掛かる頃に連絡するって言ってたのに。

「……なのに、何の連絡もない……」

久々に自分のアパートに帰って、しばらくは羽を伸ばしたし、オ

ネーサンはあたしが自由の身なのを知っていて、助っ人アシの話や雑誌のカットを回してくれたから、ビフォー大作家先生な日々を過ごした。振り回されることも無く何事も自分のペースでできる。自由ってスバラシイ！！

……が。

4冊目、どうなってるんだろうか。

先生、また行き詰まってるんじゃないだろうな。

藤埜サンに連絡してみようかな。

……自ら進んで大作家先生サマのところに行くのは、ちと抵抗がある。

なにせ、お母さん騙くらかしてくれたおかげで、実家に顔出すと必ず先生の事を聞かれる。根掘り葉掘り聞かれるのが嫌で、最近ではアレコレ言い訳して実家に行ってない。

そうすると、当然お母さんのご飯が食べられないわけで、先生サマに美味しいお店連れまわされた舌は、コンビニ飯も自分の料理も不味いと文句を言う。……餌付けされた。

自分の貧しい食生活を反省し、ちょっと気合入れて自炊しているんだが、料理はなかなか上達しないし。指切るし。商売道具の指になんてことを！ くっそうそれもこれも全部先生のせいだ！！ と癪癪おこしてもアパートに一人じゃむなしい。

先週になって、大作家先生サマのインタビュー記事が載った雑誌

が送られてきて、巨大な猫被った爽やか笑顔の大作家先生サマが、当たり前障り無い質問に当たり前障り無い回答をしていた。

しれっと左手に指輪嵌めてるし。プライベートも充実してますなんて応えてたし。充実ってなんだよ一人で執筆に没頭できますってか。

その記事のおかげで母さんの長電話に付き合わされる羽目になった。どうしてくれよう。

そんなこんなで、自分から直に先生に連絡するのは嫌なのだ。

でもお仕事気になるし。最初のと看みたいに超特急で描く羽目は嫌だし。

進み具合、確認するだけなら、いいよね…？ 大丈夫かな…？ とビクビクしながら藤埜さんに連絡してみた。

そしたら、直ぐに先生のマンションに行ってくださいってさ。

何だやっぱ先生詰まっていたのか、と、とりあえずスケブ抱えて先生ン家にお伺いして、そして。

「今、半分まで書きあがっています。読んでください」

と、原稿を渡された。

え？ 先生って、完成するまで人に見せないんじゃないのかなかったの？
人に読ませるときにはもう完成形であるべきってモットーじゃなかったの？

まあ、言われたなら読みましょう。

どんな主人公かな。どんな風に描こうか。

……そう思いながら読み進めて、読み進めるほどに、血の気が引いた。

4 作目の主人公は、画家を目指す少女。

……これは、この主人公は、『あたし』だ。

#さいじの、こ

子供の頃から絵が好きだった。

つたないクレヨン画でも母親に見せれば喜んで褒めてくれた。褒められるのが嬉しくてどんどん描いた。

描けば、それなりには上達する。

周囲の大人は口々に褒めた。子供にしては上手い。小学生にしては上手。

そうやって、自分は絵が上手いんだと思い込んだ。

絵に自信があって、ただ漠然と、将来は絵描きになるのだと考えた。

中学では美術部に入った。そこでも、教師が教える基礎基本を直ぐにモノにして、どんどん上達した。

一年生にして、中学生の美術コンクールに入賞した。

鼻高々で、どんどん絵を描いた。描くことが好きで、描いて褒められることが好き。

3年になって、初めて壁にぶつかる。上手だけど、絵の技術は中

学生レベルを超えているけれど、それだけ。コンクールでも、一番にはなれない。

描くことに疑問を持つ。

何で描くのか。何を描くのか。何のために描くのか。

一度疑問に思ったら、今度は、何も描けなくなる。

中学生の女の子の話。

書きかけの4作目。

「テーマ自体はありきたりでしょう。よくある話です。ここから、かつての何も考えずただ描くだけだった自分を否定していくわけですが」

先生が、読み終えたのを見計らって口を開く。

何を言っているのか、耳では聞こえているのに、よく分からない。

「どんな風に、叩きのめしていこうかと、思案中です」

……叩きのめ……。

「何を否定するか。どこまで否定できるか。そして、この主人公が最終的にどう結論を出すのか」

……なにを、先生、そんな淡々と言ってるの。

「……私は、それが知りたい」

……。

悪魔を描けって言われたら、今の先生の顔を描く。

神様の絵を描けって言われても、多分、今の先生を描くだろう。

そうだ。

先生の書く話の中では、先生が、唯一絶対の創造主だ。

……だからって。

「だからって、何であたし!?!」

こんな、人を丸裸にするような真似、していいはずが無いじゃないか!

「言っただけです。あなたは、私が負けを認めた人間だと。……一度負けたからといって、以降肅々と頭を垂れるとは限りませんよ」

爽やかエセ紳士スマイル、でも、目が、怖い。

「そしてこうも言っただ。さっさと腹を括れ、相応の成果を出

せ、とね」

穏やかに笑ってるだけのはずなのに。

「こんな覚悟も無い人間に自分が負けるなど許せない。……才能だけに胡坐をかいて、そこそこの成果で満足するような人間に用はありません」

先生が、畳み掛ける。

「私は、仕事として執筆活動をしている。金を稼ぐという意味なら、確かに作家活動を仕事と言っていい」

エセ紳士スマイルすら止めて。

「ですが、例え一銭も稼げなくても、例え誰一人読む人がいなくても、例えあれは物狂いだと後ろ指差されても、死ぬ瞬間まで、書くことを止めません。私は書くために生きているんです。それが私の覚悟だ」

それが神への誓いであるかのように真摯に。

「あなたに問います。……何故、描くのか」

最後だけ、まるで甘い睦言でもささやくかのように、問いを紡いだ。

#さいじんの、さん

目の前に、ことん、とコーヒーが置かれて、我に返った。

そして自分も悠々とソファに座ってマグカップを口元に運ぶ先生。

「……………」

白昼夢、じゃないよね。さっきのアレは現実だ。だってあたし原稿手に持ったまま。

「現実逃避はそれぐらいにしてください」

……ああ。どうせなら頭真っ白になったままフェードアウトしたかったな。無理か。

「逃避っつーかですね。思いもよらないこといきなり言われて、思考が追いつきません」

原稿読んで、この主人公があまりにも自分に似ているからびっくりした。主人公の行動を予測して外さないくらいに、自分の思考回路と重なる。

「んでもあたしは中学生じゃないし、画家を目指してるんじゃないって漫画家だし、別に今描けなくなってるわけでもないし！」

そうだよ、一瞬勘違いしたけど、この主人公があたしのわけが無

い。例えモデルにしたとしても、キャラクターとあたしは別だ。

「……そこから否定しますか。まあ構いませんが」

「や、だから、これ、色々違うしですね」

先生が、コト、とマグカップをテーブルに置いて、身を乗り出した。

「そうですね。色々違います。あなたはとくに成人しているけれど中身は精々高校生レベルの甘ったれだ。漫画家を目指しているのではなく一応デビューはしているわけですし、今、絵が描けなくなっているわけでもない。ですが、……ネーム、というんですか。漫画の下書きの下書きだと聞きましたが。そのネームは、どうなんですか？」

ぐ、と言葉に詰まった。オネーサンだ。情報源はオネーサンしかない。

「ここ数ヶ月。私はあなたがスケッチブックに落書きをしているところは何度も見ました。ですが、漫画のストーリーを考えている素振りは一度も無い。……いや、一度はあったか。ボディビルダーを描けと強要した時に、現実逃避にチラツと口にしていたけれど、でも実際その後ネームに取り掛かってはいないでしょう」

……そんなことも、あったかもしれない。

「あなたは、今、漫画が描けなくなっている。違いますか？」

……違う。最後にネームを仕上げたのは、確か先生の挿絵の

話に来るちよつと前。それだって、自分でも全く納得できない、どこかで聞いたような話のツギハギみたいな、苦し紛れに捻り出したもので。

その前も、前も、ずっと、自分でも何描いてるのか分からないようなものばかり。

「しかし、小説やゲームのコミック化の話は断っているとか。あくまで自分のオリジナルに拘っているんですか？　しかし、仕事なら何でもやる、と口では言う。何がしたいのか良く分かりませんね」

オネーサン、そんなことまで話したの。

「ですから、あの主人公は、私が観察したあなたをデフォルメしたに過ぎません。特徴は捉えていたでしょう？」

……観察。

思わず先生の顔を見たら、無表情に、こつちを見詰めていた。

「……まさか、先生、ココで仕事しろってカンヅメしたの、…絵が問題なんじゃなくて観察が目的？」

なんて失礼な！　ノゾキか？

「いいえ。当然、絵も欲しかった。あなたの絵には、見るものに納得させるだけのレトリックがある。しかし、恐らく描き手であるあなたは、その辺りを意図していない。無意識にやっているものだろうと推測できる。あなたはほぼ直感だけで描き上げていますからね」

……え、ええと。

「例えば、役者の演技には定番の手法というものがある。動揺を表すのに呼吸を乱す、これは平素から呼吸をコントロールしている必要がある。安定した呼吸が乱れるから、見る者はそこに動揺を見出すのです。役者は最初稽古でそれを意識し、本番では無意識にできるほどに体に叩きこむ。そこまでやらないと演技しているという白々しさが出てしまうからです」

ちよ、ちよつと待ってください？ あたしにも分かりやすく。

「あなたの絵は、その稽古の段階をすつ飛ばしている。いきなり本番で通じるレベルで、実際通用してしまった。……稽古をしていないから、自分が何をやっているのかを分かっていないのです」

待ってってば。いや、なんか深刻な話だったのは分かるよ？ 先生サマが真剣に話してるってのは分かるよ？ でもさ。役者の話と、漫画の話と、違うくない？

「先生。途中からお話に付いて行けていません。要するに、あたしが駄目って話？」

そもそも、レトリックって何？ って辺りから、もう振り落とされてるんだが。

先生サマ、ちよつと呆れた顔して、こめかみをぐりぐりした。

「……要するに。あなたは馬鹿で、恐らく私も阿呆だという話です」

イグノーベル賞を取った犬語翻訳ツール、あれは偉大な発明ですね。言葉が通じないというのは致命的だ。

先生サマは両手に顔を埋めて呟いた。

……回りくどい例え話しなくても、何を言いたいのかは分かる。本当は、言われなくても分かっている。でもさ。

でも。じゃあ、考えろって、……ムカデは考えたら一歩も歩けなくなるんじゃないの。

#さいじの、さん（後書き）

説明するまでも無いですが、レトリック 修辞法。言葉を効果的に使って適切に美しく表現する言語技術。文学上の技巧表現。

……先生はこの場合、絵の表現での技巧という意味で使ってるようです。

イグノーベル賞は、……知らない人は調べてね。（え）

…先生しゃべりすぎじゃね？

#さいじんの、よん

目の前のコーヒーが冷め切って、先生も顔を覆ったままで動かなくて。

「やり方を考えないと。帰納法か演繹法か……」

ブツブツと、なんか言ってる。

とりあえず。

「……先生が、アホってことはないと思いますけど」

思ったことを口にしてみた。

「分かってます。あたしが駄目ってこと。本当はもうずっと分かってた。でも認めたくなかったから考えないようにしていたんです」

湯気もないカップのコーヒーの水面を見る。ちょうどデザイン性の高いルームライトを映しこんで見える。

「ちょっと待ってください。駄目、とはこの場合何を指しているんですか」

先生が、顔を上げて身を乗り出す。

「だから、あたしがです」

ム力。嫌なことをわざわざ言わせないで欲しい。

「それは違いますね。あなたが駄目なわけではない。あなたの何が駄目なのか。そこを突き詰める必要があります」

……ああもう。先生サマはイチイチ。

「だから！ 漫画が駄目ってことです！ 技術ばかりあっても駄目なんです！ 絵が描けるだけじゃ駄目！」

つい、怒鳴ってしまった。ずっと心のどこかで思っていて、でも否定し続けてきたことだ。

「皆がワクワクして面白くて感動できる話が描きたいって、思うだけで、全然駄目で、だから、……だから、ずっと、それだけは考えないようにして」

駄目じゃない、頑張って描き続ければ、自分が諦めなければ、そうすればいつかはって思い込もうとして。

先生がティッシュ取ってくれた。遠慮なく鼻をかんた。……泣いてないから。涙なんか拭いてないから。

「あなたが否定するものが一つ分かりましたね」

微笑んで言うものだから、一気に頭に血が上った。

「なんでっ！ 知りたいからって、そんな、あたしがどうだろうと

っ
」

「関係あります」

先生が更に身を乗り出すから、その分身を引いたらソファの背に当たってしまった。間にテーブルがあつてよかった。…と思ったら先生サマがあるうことが立ち上がってテーブルに膝をついてまで身を乗り出してきた。いくら膝の高さのカフェテーブルとはいえ、乗りあがるのはお行儀が悪いよ！

「ほら。あなたは、こういう時、身を退く。押されればそれだけ引いてしまう」

付け込まれるだけです。

……とか言われても。

逃げ場を探して左右を窺ったら。

「逃がさない、と言ったはずです。首に縄をつけてでも逃がしません」

それ、今じゃないし。マッチョの時の話だし。

「考えるヒントは、今までに充分すぎるほどあった。だから、考えなさい。あなたが、あなた自身の結論を導き出すまで」

先生は、囁んで含めるように言って、あたしの上から退いてくれた。

「ぎゅっして、描くのか」

#さいじの、じ

考えろって。

なんで描くのかって。

そんなの、描きたいからだ。

だって気が付けば描いてるんだからしょうがないじゃないか。手元に筆記具が無くても、頭の中では見るもの全部が絵になってる。

言葉を聞けば絵が浮かぶ。音楽を聴けば絵に変換される。

「…そんなの、わかんない。なんでかなんて知らない」

先生が、正面から移動して隣に座った。真っ向から見られるよりも圧迫感が無くなって、だから、言葉がするりと出た。

「先生は何で書くんですか。書くために生きるって、じゃあ生きる目的はわかったけど、書く目的はなんなんですか。言葉って何かを伝える手段でしょう?」

誰一人読まなくてもって、そんな覚悟、誰も受け取ってくれない言葉でもいいの。

「何で書くことなんです。他のなにかじゃ駄目なの? どうしてかって、そんなの口で言えるようなことなの? 説明できるんですか」

……もしかしたら先生サマなら説明できるのかもしれない。

「描かずにはいられないんだから、しょうがないじゃない」

じつと両手を見た。もしこの手が、なんて考えたくも無い。筆を口で銜えて絵を描く画家もいたっけ。うん。この右手がもし怪我でもして動かなくなったら、左手でも、足でも口でも使う。

「……先生が、書くために生きるって言うなら、あたしは、……描いてないと息できない、みたいな」

口にしたら、スコンと納得した。

そうだ。呼吸するみたいに、受け取った刺激を絵にして吐き出す。泳ぎ続けなきゃ息できない魚みたいに、描けなかったら死ぬ、……とまでは言わないけど……いや、描かない自分を想像すらできない。

「そうですね」

先生が、よく出来ましたとも言つように頭を撫でたからびくつとした。え。なにこの距離。いつの間に。

「あなたはいつだってスケッチブックを手放さない。いつだって何かを描いてる。何故描くのか。簡単だ。描かずにいられないから」

あのジムのトレーナーと同じですね、と付け加えられて、愕然とした。

いや、ちょ、それは！ 同じにされたくない！ 改めて思い出す

と確かにあのトレーナーさんが言ってたことと一緒にけど、でも全然違う！！ 違わないかもしれないけど、でも断じて違う！！

「その芯を見失わなければ、後は余計なことを殺ぎ落としていけばいいでしょう。例えば、なぜ少女漫画なのです」

フェイントかよ！！ 気を逸らしといて切り込むあたり先生取り調べの刑事サンですか！？

もう虚勢とかどうでも良くなって、だから、素直に応えた。

「……ええと。好きな漫画があつて。だから、あたしもあんなのが描きたいナー、と」

うん。口にするといかにも子供っぽい動機だ。単純な。

「いいんじゃないですか。最初はみんなそのようなものでしょう。ですが、あなたの適性は、多分少女漫画ではないですよ。少なくとも物語を構成する、という部分では致命的な気がしますが」

……ぐ。……もうちょっと容赦してください。

「……構成が駄目なら少女漫画に限らず漫画全般駄目じゃないですか」

「そうですね。しかし、適性だけで物事が決まるわけではない。適性が無くともやりたいことを選ぶ人も大勢居るでしょう」

うん。

「ですが、商業誌では難しいでしょうね。仕事としては成り立たない」

……だよねー……。

「……でも。あの、あたしは高校生のときに、雑誌の新人賞に応募して、それで佳作に入って、オネーサンが担当についてくれて、ずっと漫画描いてて。美大に行ったのも漫画のために、……漫画を描くってことしか考えてこなくて。だから、今更」

「今更、『大人になつたら何になりたい?』を考えるのは無理だ?」

……先生サマはイチイチ全くグサグサと。

「そうじゃなくて。他の道があったって、あたしは、この道を選びたいんだってことです」

だってまだこの道が無くなったわけじゃないんだから。細くて頼りなくてもまだ先があるんだから。

「ふむ。他の可能性は選びたくない。また一つ否定するものが見えてきた」

……先生と話していると、ぐちゃぐちゃに絡まってるいろんなことが、ばつさり断ち切られていくみたいだ。

はつきり目標が見えていれば、結構間違わないものですよ。

気軽に言ってた先生の声を思い出す。

芯さえ見失わなければ。

うん。

あたしは、ただ絵を描くことが好きで、絵を描いていられれば良くて。でも、描かされるのは嫌なんだ。

……仕事をえり好みしてたのも、そこだ。自由度のあるカットなら請ける。でも原作付きは制約が多くていやで、マッチョは描きたくない。

それが分かっちゃうと、仕事と口では言いながらも、結局好きなことを好きなようにやっていただけって分かる。

先生が、甘ったれだと言うのも当然だ。

あたしは、『仕事』なんてしてこなかったんだから。

「そこは、私も同じです。好きなことをやって、それが偶々仕事として成り立った。それだけの幸運な人間です。売文稼業と割り切っていたら、仕事を整理したりしない」

……ああ。そうですね。大作家先生サマはね。

「……自己否定、というのは」

省みて考え込んでたら、先生が声音を和らげてポツリと言う。

「過ぎればただの馬鹿ですが、成長のためには必要なものでもあり

ます。自分のここが嫌だと思う。だから直そうとする、より良い方へ努力しようとする。正しく自己否定ができれば、その人は成長するでしょう」

歯並び矯正少女もコスプレ少女もデビル少女も。先生の話の中で、みんな最後には笑顔だった。

「今回、いつもより低年齢の読者層であることを考慮して選んだテーマがそれでした。……しかし、二十代女性にも応用できるようですね」

ムツカ。一瞬流石大作家先生サマと尊敬しかけたのに。最後に茶化すように付け加えられて、ポイントマイナス。

「あなたがあくまで少女漫画を選ぶのか、描くことなら別の手段もあるのか。後はじっくり考えればいい話です。ですが私としては、今後私の本の挿絵はあなたを指名したい。その余地だけは残しておいて欲しいと思います」

……うん。結論がどうなるにしても、描くことは大前提だし。

先生の小説は、正直、面白いし。描かせてもらえるなら、それは光栄なことだ。

#さいごの、ろく

じいん、と、してたら。

「さて。4作目ではもう一つ課題があったんですが」

スルリと首に冷たいものが巻きついた。

「ちょっとじつとしてください」

へ？

隣から先生が両手を伸ばして、何か首にかけられてる？

「できた。念のため聞きますが、金属アレルギーなどはありますか？ チタンのチェーンなので、アレルギーはでにくいらしいですが」

首元を触ったら、これは、チェーンと、……指輪？

「この前の指輪です。先日受け取ってきました。あなたは手に指輪などしないでしょう？ だからチェーンもおまけです」

「……え？ って、あの、エンゲージリング？」

そういや、そんなものもあったな。つつかアレ本当にイニシャルまで彫ったの受け取ってきたのか。

……いや、今問題なのはそこじゃない。

「なんで今あたしの首に？　ちょ、先ず一旦外して、これ、え？　なに、どうなって…？」

慌てて外そうと留め金探ったら、……これどうなってるの？

「ちょっと変わったアジャスターだそうです。脱落防止に頑丈なタ
イプで慣れないと外しづらいようですが、外さなければいい話です
よね」

イヤイヤイヤ、そうじゃなくてですね！

先生サマ、なんて胡散臭い爽やか笑顔なんだ。危険信号過ぎる。

「4作目、恋愛要素が欲しいと言っていたでしょう。この件は、作
中どう決着させるか未だ思案中です」

うへ？

「そんなことも言ったかも知れませんが、それは作中の話で！
その時あたしは自分がモデルとか知らないし！　恋愛とか意味わか
らないし！　それにこのエンゲージリングって嘘つこでしょ！？」

チヨイ待て！　いくらあたしでも嘘で恋愛はできない！

「本物です。なんなら鑑定書も見せましょうか？」

「違う！　意味が違う！」

なに寝ぼけたことを言ってくれるんだ先生サマ。

睨み付けたら、余裕の顔で笑われて更にムカついた。分かっているボケやがったな。

「小説にかこつけていますが、本気ですよ。信じられないのなら、いくつかの証左がありますが」

へ？

「考えても見てください。私が、仕事の関係者とはいえ、誰でも彼でも自分のテリトリーに入れる人間だと思いますか？」

え？

「あ、むしろガード堅そうな感じですけど」

「でしょう。では、何故あなたをわざわざここに住まわせたと思いますか？」

ええ？

「……イラストのため、……と、観察のため……？」

何を言い出すんだ大作家先生サマ。

「そのただけに、半ば拉致するようにここに連れて来る必要は？時々呼び出すだけでも用は足りたとは思いませんか？」

……。

嫌な予感しかしない。ちょっとその辺で黙ってくれないか先生サマ。あたし今すぐ立ち去るから。

立ち上がろうとして、両肩を押さえ込まれた。寝心地抜群のこのソファ、今はそのフカフカっぷりが邪魔だ。

「逃がさない、と何度言えば分かってももらえるのでしょうか」

ヤバイヤヴァイ。この体勢はやばいつて。

退く、って、つまりこーゆー危険があるってことですな。実地で理解しました。今後は押されても退かずに前のめりを心がけます。

「ご両親も応援してくださいっているようですよ？ 先日はお母様からお電話をいただきました」

「え、それ知らない！ なにそれ！！」

「あの雑誌をご覧になったようですね。これからプロポーズをしたんだと言ったら、激励されました」

おかあさあああああん！！ つつか何でお母さんが先生の連絡先知ってたんだ！？ あのハイテンションな長電話はそのせいか！！ いやそんな追求は後回しだ。

今はこの危険をどう回避するかが最重要課題。

#さいごの、ろく（後書き）

……先生実は自分から告白したことが無い人。

#さいこの、なな

「先生。あの。確か前に、暖かい家庭は、傍で見ると分には良いけど自分には関係ない、てなことを言っただけですか」

確かにこの耳で聞いたぞ。

「言いましたね」

「それって、つまり、先生は結婚に夢も希望もないって意味ですね？」

そうだと言ってくれ。結婚とか家庭とか、先生サマがまさかそんな。

「いえ。むしろ理想があるから、書くために生きる自分には分不相応なものだと思っています」

両親にとって良い息子ではありませんでしたし。

自嘲する顔は、そりゃー鑑賞に値するもんだけだな！ でもこの至近距離で見たくないよ危険物って張り紙で隠したいくらいだ。

「しかし、あなたなら大丈夫だと思ったんです」

ちょ、どーゆー言い草だ！？

「大丈夫ってなに！？ そんなんで指輪とか、変でしょ！？」

ただのファッションリングじゃない、この指輪、体裁はエンゲージリングなんだ。そんなものを受け取れるはずが無い。ピンクサファイア何カラットあった、小粒のダイヤ散りばめたデザインで台はプラチナ、ホイホイ首にぶら下げられるか！？

「何度も言いますが逃がすつもりは無いので、そこは諦めてください」

首に縄ってそう言う意味なのか！？！

「あたしはだから恋愛とか結婚とか夢も希望もあるんです」

お父さんとお母さんみたいなイチャイチャはいくらなんでもただ。でもちゃんと恋愛ってものに憧れが。

先生サマが至近距離でまっすぐ眼を見るから、目を逸らしたりつぶったりしたら大変なことになりそうな気がする。

蛇に睨まれた蛙の図だ。

いやいやいやいや、待て違うその捕食関係の例えは今洒落にならない。

「そのうち可もなく不可もない見合い相手と結婚するか生涯独身かその程度だという、夢や希望？」

「うっわ、そんなこと覚えてないで下さいよ！」

なんで嘘でも高学歴高収入高身長な結婚相手募集とか言わなかったんだあたし！

……その方がもつとヤバイのか。大作家先生サマは紛れもなく高学歴高収入高身長おまけにイケメン。

「あなたはどうかやら男性恐怖症というか嫌悪症というか、異性を回避する傾向があるようですが。『男の範疇除外』の私なら可もなく不可もないでしょう？」

「ちょ、まさかそれ気にしてたとか言わないで下さいよ、そんな車酔いで朦朧としてすっかりポロツと言っちゃったような」

「すっかりポロツと本音を言った、ですよ？ 流石にここまで意識されないとなると、どうしてくれようかと思ったのですが」

……いくらなんでも具合の悪い女性に無体を働くわけにも行きませんし。

「って今すんげー不穏なことほざいた！！」

「私は今までにも何度か意思表示してきた。それをまるつきり無視してきたのがあなたでしょう」

「いや、そんなん知らないし！！」

マジ知らん。意思表示ってなんだ、そんなの欠片も無かった！！

「ではハッキリ言いましょう。私はあなたが欲しいんです」

…え、…うえええー！……？

「……先生。この状況で、この体勢で、その台詞で、その言い方
って、……なんかイロイロ間違ってます」

「……訂正。正直に言い過ぎました。あなたが好きなんです」

ちょ、正直なのかよ！！！！

いくらなんでも嘖然としていると、先生は身を起こして、ついで
にあたしも引き起こしてくれて、普通に座った。

「……ちょっと待ってください。それでも緊張しているんです。立
て直しますから」

拳を額に当てて、苦悩している。

……あれ、ひょっとして今、逃げるチャンス？

こそーつと10cmほど移動したら、手首をつかまれた。

「だから、逃がしません」

今、目え瞑ってたじゃんかどうして分かった！

「最初から説明します。聞いてください」

意を決したように、先生サマが顔を上げた。

うん。手握られてるから逃げないし。だからこの至近距離でなく

ても話是可以るよ。日本人的なパーソナルスペースってもんはね、もーちよつと距離感をダイジにね。

「つまりは、一目惚れなんです」

「先生。辞書貸して下さい」

「『一目惚れ』とは。一度見ただけで、ほれること。ちよつと見ただけで好きになること。…という意味です」

……………先生の言ってる一目惚れって一般的な一目惚れか。他にトンでもない意味が隠されてたりしないのか。

「最初に、原稿を読んで物語の世界に入り込んで、主人公と一緒に泣いて笑う、あなたのその素直な感情に好感を持ちました。その後、キャラクターを非常に的確に捉えていることにも感心して、文章以上の説得力あるイラストを見たときに完全に落ちたんです」

やっぱり矯正器具が敗因……。

「ええと。つまりそれは、イラストに惚れたってことですよ？ 絵、ですよ？」

「イラストも当然ですが、先に読者としてのあなたがある。……あの時、ただ素直に物語を受け入れてくれていると感じたんです」

……。

そついや、あの時先生は捻くれてたんだっけ。砂漠で一杯の水の恩ってやつだろうか。

「その上、創作意欲を刺激してくれる絵を描ける。こんな人が一番に私の書くものを読んでくれて、いつでも絵を描いてくれたら良いのに、と思いました」

「先生。やっぱりそれを一目惚れっていうのはおかしいです。だって異性として惚れてるわけじゃないし」

うん。恋愛要素はどこにも無い。

「私は、書くことが生きることだと言ったでしょう。つまりは、一生を共にしたい。そう思ったんです」

先生。一生を誓うその前にいろいろ段階があるはずですよ。

「これがもし男性だったなら如何ともし難いですが、幸い年齢的にもちょうどいい女性だったので、もう結婚するしかないかと」

「飛躍っぷりが超絶技巧だな!!」

どうしよう。最初の印象は間違ってる。大作家先生サマは変だよ。変態だよ。

「後は、どうやって外堀を埋めるか」

「先生そう言うときは普通先ず相手の意向を確認するんです!!」

何なんだ大作家先生サマ、いろいろメンドクサクなってきた、ちよっとマジ黙って欲しい。

「あなたの担当の、…緒峯、と言いましたか。彼女が、真っ向から挑むと必ず逃げられると断言したもので」

オネーサあん！！ 余計なことを、つつーかもしれないその後
の拉致とカンヅメの系引いてたのはまさか！！

「しばらく一緒にいて警戒心を解いてから押しの一手で落とせ、と言われました」

「先生それ絶対オネーサンに騙されてる！ つつかあたしも騙されてる！ 諸悪の根源が判明した以上、先生はこんなところで油売ってないで巨悪に立ち向かうべきです！！」

だからその手を離して！ 目え覚まして！！ いつもの冷静なへ理屈屋はどこいったんだ！！

「色々協力してもらって、感謝していますよ」

「協力ってナニ！？ 色々ってなに！」

「恋愛においてはあらゆる手段が正当化されるんです」

「そーゆー話なの！？」

「あれこれ言ったところで、目標ははっきりしている。私はあなたが欲しい。それだけだ」

先生は捕まえたままだったあたしの手を、すつと持ち上げて。

……手の甲に、く、く、く、くち、口がくっ付いた！！

#さいごの、なな（後書き）

いろいろ説教臭いこと言ってた先生サマにも弱点はある。

……先生の著作、真っ向ストレートに恋愛がテーマってのは無い。

#さいじの、はち

やめてー！ーええ！！！

先生マジ凶悪すぎるからそれ！！！！

中身はどうあれ先生サマは紛れも無く美形、それがあたしの手に、
キ、キキ…キ…、言えるかこんちくしょー！！！！

「……落書きで、何度か私を描いてくれたでしょう？ 実は嬉しかった。あなたは性格上、強請もされないで嫌いなものをかいたりしないでしょうから」

え。僧侶とドラキュラと天照、ばれてた？

いや、そうじゃなくて、……ええ？ あたしそんなつもりはない！
確かに落書きでわざわざ嫌いなもの描いたりしないよそりやそう
だろ、だからってじゃあモデルにしたから好きかと言われれば、そ
りゃー先生サマくらいの顔貌なら、誰だって描くだろう！

「私のそばにいてくれませんか。不自由させない程度には甲斐性もあるつもりですが」

どうしよう。

泣く。

マジ泣く。トリハダが。

少女漫画的展開だ。超イケメンが手にちゅーでプロポーズ、見開き大ゴマで花と点描とキラキラでラストシーンだ。

そんな王道のはずなのに。

確実に王道じゃない落とし穴がある。

……主にラブとかドキメキとか胸キュンとか。

「……先生。念のために確認したいんですが。……先生の言う結婚って、メリットデメリットで計ってませんか」

泣いていいかな。人生初の告白&プロポーズ、なのに。

「打算でする結婚が無いとは言いません。いや、むしろ相手の経済力とか考えずにする結婚のほうが少ないかもしれません。でもですよ？ 昔の政略結婚じゃあるまいし、打算だけ、ってのはどうかと思っんです！」

「ちが……」

何か言いかけた先生サマ遮って続けた。頑張って、自分の右手も

取り戻した。

「さっきから聞いてると、先生が読者として絵描きとしてあたしを非常に評価してくれていることは分かりました。そこは実に光栄なことでだと思います。でも！」

ひ、退くもんか！　がんばれあたし！！

「執筆の邪魔にならないとか絵が役に立つとか一緒にいて大丈夫とか、そーゆーことだけで、ソレって友達でも一緒じゃないですか」

うん。先生サマのプロポーズが、どうにもトンチンカンな気がしてしょうがない。そうだよ友達だよ。

「あたしは、少女漫画みたいな恋愛に夢も希望もあって、だから、け、けけ結婚とか、無理です」

ハッキリキツパリ、言った！　ちょっとこっぴड़ずかしいこと言っただけど！！　よくやったあたし！！

ちょっと勝利が見えてきたところで、敵も然る者、先生サマの顔つきが微妙に変わった。やばい。勢い込んで続けた。

「あ、あの！！　いつでも絵描きますよ！　読むのも！　何ならご近所に引っ越してもいいです！」

先生サマは何考えてるか分からない顔でジーっとあたしのこと見てる。どうしよう。

「どうせ宵っ張りだから夜中でも平気です！　電話一本で呼ばれて

飛び出てきますから!」

ジーッと見られてる。

「だ、だから、あの、……」

イカン。涙出てきた。どうしよう。

頑張つて堪えてたけど、耐え切れなかった涙がホロツとこぼれたら、後は止まらなくなった。

だって、だって、おかしいよ。変だよ。先生サマほどの美形なら選り取りみどりじゃんか。なんで選りにもよってあたしにそんなこと言つ訳。

絵が欲しいなら、いつだってちゃんと描くし。挿絵の話とかあれば超頑張るし。

えぐえぐと、しゃっくりが止まらない。鼻水も出てきた。

はぁー、と先生が深くため息ついた。

……スイマセン。止まらなくなっちゃったんです。ちょっと放つといてくれればいいですから。っつかずつと放つといてくれますから。

「焦って申し訳ない」

ゆったりと背中に腕が回されて、落ち着かせるようにポンポンと叩かれた。

え。先生のシャツに鼻水付いちゃいます。

「この挿絵が終わってしまったら会える口実もなかなか無いので、気が急いていました」

背中をトントンと子供みたいに宥められて、ちよつと、しゃっくり治まったけど。

「……早すぎました。先ずお友達から始めましょうか」

あ。うん。そうだよ。そうだね。お友達だよお友達。

「……うぎゅ……」

鼻詰まって変な声出た。うん、って言いたかったんだけど。

「ふ、うん、しょーです、け、結婚とか、おかしいし」

お友達。うん。それなら安心。

「絵のために引越してはくれる訳ですか」

「え、あ、うあい」

とりあえず、涙は止まった。まだ鼻はぐずぐずだ。

「物件を探すのも大変です。友達というなら、ルームシェアしましょう。どうせあの部屋は使っていないのだからちよつといい」

「あい、うん、そんなら」

うん。ルームシェアか。そっか。そんなら。あ、でもお家賃いくらだ。

「それで、追々本気だと分かってもらいます。忍耐には自信がありますから、そこは信用してください」

「ん？ え？」

うえ？

「恋愛に夢も希望もあるというなら、叶えるべく努力しましょう」

……え？ あれ？ あれれ？

「段階を飛ばして申し訳ない。あなたが中身も中学生レベルだとうっかり失念していました」

へ？ あれ？ お友達、だよな？

「せんせ……？」

身を引こうとしたら、ぎゅっとされた。

「……忍耐には自信があるんですが。完全に安心されてしまうのも癪なので」

これだけ、と耳元でささやかれて。

……ほっ
ぺに、何かが。

「今はね」

#さいこの、はち（後書き）

……土下座。やっぱり土俵際でうつちやり。

スイマセン作者への罵詈雑言受付中。

#さいごの、きゅう

例えば。

今、リンゴが欲しい。リンゴを買いたい。

なのにどこにもリンゴが売ってない。

探し回ってようやく売ってるところを見つけたら、なんとお値段
一個十万円！ えええー！！！！

そんな時横から、こちらのリンゴは一個千円ですよ。百分の一で
す！ お安いでしょう？

百分の一なの！ 安い！ 千円なら買える！

…………でもよくよく考えたらリンゴ一個千円もおかしくない？

結婚という一個十万円のリンゴを前にして、ルームシェアという
一個千円のリンゴを買ってしまった。

あれ？ でも、そもそもあたし最初っからリンゴ欲しがってなん
かないよ？

…………騙されてる…………？

高尾紅葉の4冊目は。

画家を目指す少女は、あれこれ技術に拘って本質を見失っていたことに気付いて。素直に描きたいものを、感動をそのままに描くことを思い出して。当たり前すぎて意識もしなかったことに気付かされて、そうしてまた絵を描き始める。

気付くきっかけをくれるのが、ヴァイオリンでプロを目指す男の子で。既に海外のコンクールなんかでも活躍しちゃってるけど、やっぱり競争に疲れてて。その男の子も、主人公に会って、自分が見た音楽が好きでヴァイオリンを弾き始めたことを思い出す。

お互い原点を確認して、考えすぎてぐちゃぐちゃに絡まって見えなくなってた芯の部分を、絡まった糸を断ち切ることで取り出した。そして、それぞれの道で頑張ろうって、エールを送って、……そのまま別れちゃうんだな。男の子は音楽で留学しちゃうし。主人公は日本で美術専科の高校に進学だし。恋愛要素は、予感だけ残して発展せず。

でも最後、男の子のソロデビューCDのジャケットを、主人公が描くってゆーエピソードがついた。

最後の1冊は、今までの3冊と違って、主人公をギリギリまで追い詰める自己否定じゃない。否定するだけじゃない、自分が自分を認めるっていう部分を丁寧に描写してた。

身に付けた技術は無駄じゃない、多彩な表現が出来るようになったんだ。コンクールのための勉強は、楽曲の理解を深めるのにも必要だ。

より自由に、自分の世界を広げるために。技術も勉強もただの手段で、目標さえ見えていれば、見失わなければ、手段に振り回されない。

そんな風に、完結した。

挿絵はね。

うん。主人公以外は、いい出来だと思うよ。男の子が河川敷でヴァイオリン弾いてるシーンとか、音が聞こえそだと藤埜サンに褒められたしね。

問題は主人公でね。

先生サマに何度もダメだしされて、しかし一度自分がモデルとか聞かされちゃうと、どう描いていいか分からない。

こればかりは、いくら先生サマに言われてもどうしてもダメで、じゃあ、これが自分なら。と、ふと思いついたアイデアをね。

「……………それが、これですか」

ラフスケッチを、ビクビクしながら提出です。もー再提出何度目
だか。

「手、だけとは」

はい。手だけです。

鉛筆や絵筆を持った右手。スケッチブックやキャンパスを持つ左手。それに描いてる途中の絵。ヴァイオリンのスケッチとか河川敷の夕景とか、まるで描けなくてぐちゃぐちゃに描き潰した紙とか。

描き手の目線です。鏡がなきゃ自分って見えないじゃん！！小説が主人公一人称なら挿絵だって主人公の目線で良いじゃん！！

「……………なるほど。あなたらしいと言えるかもしれません」

だってね！顔とかどうしていいかまるつきり考えられないんだもん！課題で描いた自画像思いつくよ。アレはえつぐい課題だった。

「これなら、他のカットもすべてスケッチブックに描かれた絵のようにして合わせましょう」

先生が、頷いた。おお。合格？

「挿絵全部、主人公が描いたスケッチという演出にします。既に描き上げた分は、予告や他に回せばいい」

え。折角藤埜サンに褒められたアレは、せめて隠れたカバー下あたりにして欲しいな……。

ともあれこれで、最後のお仕事にも目処が付いた。後は描くだけ。うん。いい絵に仕上がる予感。

よっし、と気合を入れなおして、自室に、……先生のマンションの、あたしの部屋に、こもった。

先生は、ルームシェアを言い出してすぐ、本当に引越しその他あれあれよと手配して、今、あたしの大事な画材その他家財道具一切合財が、ここにある。不要なものは捨てたからこの一部屋で充分なんだけど。

あの時、主人公のモデルとか、いきなり婚約指輪とか結婚とか、テンパッてパニックつてるときに譲歩した条件出されて、思わず頷いたけど。

詐欺の手口じゃないか？ 先生立派に詐欺師になれるよ？

……んでも、ソファはフカフカだしご飯はおいしい。

このマンションは賃貸でなく実は分譲だそうだ。ローンもないって、先生の印税収入どうなってんだ。恐ろしい。

だから、管理費の一部を払わせてもらってるだけで、お家賃は0円。ルームシェアってそう言うモンだっけ、と疑問に思わなくも無い。

なんか、こー、……あたし凄いでしてる？

実は、このルームシェアには非常に嬉しい特典が。

あたしがネームで構成に詰まってる、先生サマがアドヴァイスしてくれるのだ。そうだよ、先生サマは話作りのプロだ。あたしが詰め込みすぎでアレモコレモと考えすぎて肝心のテーマが埋没するんだとか。読者がストーリーを理解するために必要なポイントとか。流石先生です。拝んじゃいます。

ひょっとしてオネーサンよりも的確な指導をしてくれてる気がする。

オネーサンは、あの後問い詰めたらあっさり自供した。曰く、あたしがいつまでも鳴かず飛ばずだから、売れっ子作家との仕事は刺激になると思った。一冊目の後、先生があたしに興味持ってたからこれ幸いと暗躍したって。

……ちよつとやり方ってもんがさ。ショック療法とか言われてもさ。

あたしの連絡先住所が変わったことを告げるとニンマリと笑うんだから。性質が悪い。

でも、この挿絵が終わったら、またネームを見てもらう約束だ。

あたしの出した結論は、少女漫画も頑張る。で、それ以外のお仕

事も積極的に請ける。とにかく前向きに頑張る！！

……挿絵のお仕事に限っては、なんちゅーか、先生サマ専属的な扱いっばいだけども。

先生の本の挿絵が好評で、イラストレーターについての問い合わせがいくつもあったらしい。けど。

あたしは今回のお仕事の契約とかちゃんと確認してなかったんだけど。先生サマが偽装ペンネームなのにあわせて、実はあたしも名前を伏せてみたいだ。……献本もらってたのに。イラストレーターの名前ってカバー折り返しとかに小さく載るだけだから見てなかったよ。どうせあたしの名前なんて売れてないんだから伏せる意味あんのかと思うけどね。

その名前での挿絵は、先生と組むときだけにしてくれて。そして、結局あたしは実績の無い漫画家だし？ 名指しのお仕事なんかこないし？ ……とゆーことで結果的に先生の本だけ。

先生も、当初一年の予定だった覆面ラノベ作家を今後も継続する。ライトノベルってジャンルの自由度が良いらしい。そうだよな、一口にライトノベルって言っても、読み捨てから本気で読み解きたい傑作まで、いろいろあるし。

当面は漫画を頑張るから、仕事量的にはこれでちょうどいい。だって先生の挿絵はそれなりに大変だ。先生のご注文も厳しいけど何より編集的意向とのすり合わせが。ライトでキャッチーな萌え絵つてもんについて先生と話し合いたい。

そんなこんなで、結局、やってることは今までとあんまり変わっ

てない。

けど気持ち全然違う。

描きたいから描いてるんだって。ある意味開き直ったというか。

周りから見比べて落ち込んだってしょうがないし。……デビュー作がいきなりヒットとか、高校生デビューとか、いっぱいいるけど。

あたしはあたしのペースでやるしかないし。売りたいから描くわけじゃないし。……ちょっとは売りたいと思うときもあるけど。やっぱり評価されると嬉しいと思うけど。

……いやいやいやいや、だから、ぐちゃぐちゃ考えたって、しょうがないし!!

前のめりに頑張る!

……。
……。

.....。

..... いろいろ棚上げしてる問題は、ね。

あ、例の醜聞騒ぎは、これもオネーサンの陰謀だったらしい。ど
んだけ暗躍してたんだろうか。逆境もスパイス！ってオネーサン……
……あたしも他人事ならそう思う……。あたしには大げさに言ってた
けど、実際、一般人が記事になることはほとんど無いんだって。だ
から心配無用。……藤埜サンもグルだったんだよ。オネーサンに脅
されて協力させられてたとか言い訳してたけどホントかな。脅すつ
て何。

……プロポーズ云々のほうは。

先生の態度は今までとほとんど変わらない。あれ以来、変なこと
言わないし。

だから多分、絵とか読み手とか、一緒に住んでればいつだって応
じられるから、それで事足りたんじゃないかなー、って思う。

でも書斎に籠る時間がちよつと少なくなつてその分リビングで寛
いでいることが多くなつたとか、ご飯連れて行ってくれるときにド
ライブや遠回りな散歩が増えたりとか、時々思い出したように服買
ってくれたりとか、ちよつとしたスキンシップが増えたとか……も
う慣れたけど。慣れちゃったけど。慣らされたとも言つかも知ん
ない。

首輪、もとい、首にかかつてる指輪は、未だ外れてない。

この留め金外れないんだもん。鏡見ながら弄ってみても首元じゃ良く見えないし、これ知恵の輪じゃないかと思う。先生にお願いしても取ってくれない。実は外し方知らないんじゃないかと疑っている。

オネーサンなら取れるかもしれないけど、オネーサンに頼む度胸は無い。これ以上ネタを提供したくないじゃないか。指輪なんて知られたら。恐ろしい！

だから、あたしが本格的に居候になっただけで、今までと変わってない。

うん。変化なし。

だから、問題なんか無いってことだよ。

無いよ。ナイナイ。

……デスヨネ先生？

共同作業？

当初の契約のお仕事は、無事に……いろいろあったけど何とか無事に終わった。

そして新たなオシゴトです。今度は最初っから契約ちゃんと読もう。絶対。

いつも先生と二人のリビングに、今日は藤埜サンもいる。ちょっと違和感。

先生は、今度は一冊読みきりじゃなくてシリーズを計画中だということ。最初っからキャラクターデザイン織り込んで話を創りたいんだって。キャラ原案くらいの位置づけであたしも参加する。……責任重大とか、プレッシャーとか。いやいや、前のめりをモットーに！！

なので、そのための企画です。

「前の4冊で高評価を得ていますから、数年がかりのシリーズも大丈夫です」

おお。藤埜サン大きく出たな。

「やはり主人公の成長を書きたい。語り手は高校生の少年、メインのキャラクター数人の群像劇。学校が舞台」

先生が、眉間にしわ寄せてます。

ふむ。学校が舞台か。部活動かな。

「熱血スポ魂とか？」

あんまり熱血なのはどうか、と聞いてみたら、先生は首を振った。

「いえ。打ち込むものが見つからずにフラストレーションを抱えている」

ほうほう。

スケッチブックを広げて、鉛筆を取る。

「んー。優等生じゃない。ゲーセンとかで時間つぶしちゃう。でも普通を逸脱するほどの度胸もない？」

ちよつと悪ぶってる感じに書いてみる。服装とか少しだらしない。でも見るからに不良！ってほどでもない。

「ああ。雰囲気はこんな感じです。語り手役には観察者の意味合いで、……」

先生が横に来てスケッチブック覗きこむ。膝に広げてるから、覗き込まれると……顔近い。慣れたけど。

「冷静に見届ける役割なら、メガネ？」

「冷静、ではないですね。古典劇などではしばしば道化が進行役に

なります。そんな役回りで、一步引いた所から皮肉にアレコレ言う……、しかし否応なしに巻き込まれて、気付けば主人公の一人になっている、進行するにつれて、自分が動かざるを得なくなる」

うん。その姿勢だとあたしの耳元でしゃべっちゃうことになるんですよ先生サマ。気が付いてくれないかな。

「あ、じゃあ糸目だ。いっつも笑ってるような、でも実は笑ってない細目で、それでいざって時開眼しちゃうんだ」

オレはそんなキャラじゃないってボヤきながら窮地で友達助けちゃうんだよ。ありがとって言われたら二度としないって顔背けるツンデレ。

「……な感じ?」

斜に構えて片手はポケット。背は高いから周り良く見えるよー、でも足元の石に躓きそう。

そのまま、主人公たちについてあれこれ聞きながら何枚も描いて、気が付いたら藤塾サンがいなくなってた。

「あれ?」

はた、と顔を上げた。

「とつくに帰りました。キャラクターが決まったら連絡することになっっています」

「あ、はい」

先生がコーヒ―淹れてくれた。……先生サマの淹れるコーヒ―はおいしい。何でだろう。

「今回は男の子ばかりなんですか。女の子のキャラはなし？」

描いたのは全部高校生の少年だ。友情、努力、勝利！……な話だろうか。

「一応考えてはいるんですが……恋愛要素をどうするかが決まっていないので……」

キタよ、恋愛！前は期待だけさせといて発展しなかったし！

「ラブ！胸キュン！！ときめき！！ゼヒやりましょう！！！」

そしたらヒロイン思いつきり可愛く描くよ！

「どうしよっかなー、守ってあげたい小動物系？小悪魔ちゃんもいいなー」

ワクワクと、スケッチブックに向き直った。やっぱり華のあるおんにゃのこは描いてても楽しいし。

主人公複数なんだから、ヒロインも複数でよくない？いろんなタイプいたら嬉しいよね！

つきつきと女の子描いてたら、先生が隣に座った。

「……今、恋愛をつまく書ける自信がないのですが……」

先生が、マグカップテーブルに置くと、ふかーく息を吐いた。

「え？　なんですか。先生なら大丈夫ですよ！」

藤埜サンに勧められて、今、苦手なハードカバーを読んでいたりするわけですが。

純文学ってエグイ話ばかり、という先入観を、見事ひっくり返された。先生の書くものは、やっぱり尊敬できる。

「……あなたに協力してもらえたら、書けそうな気がするんです」

頭抱えなくてもいいじゃん、協力ならいくらでもするし。つつか、ちゃんとお仕事なんだから、あたしの仕事でもあるんだから最大限やるよ？　前のめりをモットーに！

「いくらでも協力します！　頑張って恋愛書きましょうー！！」

鉛筆握って宣言したら。

先生サマが、フ、と笑った。

……あれれ？　久しぶりに見る逝け面だな……？

「恋愛は、一人ではできないんです」

え？

「この指輪の意味、忘れてはいませんか？」

そろ、と首にかかるチェーンを撫で上げられて。

うひゃあ！　ゾワってなった、ぞわ！

鉛筆とスケッチブック落つことした。

「そろそろ、忍耐も限界です」

え？　か、顔近い！　ちょ、密着してない？

あれ？　なんかデジャヴ？

「協力してくれると言っなら、私と、恋愛、してください」

耳元でささやかれて。

……唇に、何かが。

共同作業？（後書き）

『萌え絵師への道』ENDです！！

ありがとうございました！！

18歳以上のお客様にお知らせです。

ムーンライトノベルズの片隅に、作者が暴走した小話を投下しております。

心の広さには自信がある。

雑食だ。

妄想ドンと来い。

エロも好物。

肉体的にも精神的にも18歳以上である。

という方は、宜しければ『<http://novel18.s-yosetu.com/n2589u/>』を覗いてみてください。

横道。(前書き)

活動報告に書いたさいしょのおしごと藤埜サン視点。

横道。

「大した量じゃありません。直ぐです」

呉羽先生の威圧的な物言いに、イラストレーターは臆した様子で原稿に手を伸ばした。

普段は穏やかな口調の先生が、初対面の相手にすら投げやりな態度だったことに驚いて、咄嗟になんのフォローもできなかった。

まだ若いイラストレーターは、言われたとおりに原稿を読み始めたものの、眉を顰めている。

悪い先入観で作品を読んで欲しくないと思ったが、もう手遅れだった。

難しい顔をしてゆっくり読み進む様子に多少の申し訳なさを感じつつ、せめて3人分のコーヒーをテーブルに供した。

作家としての『呉羽隆生』は、真摯にストイックに作品を生み出す秀才肌で、紡がれるストーリーは、時に深く、時に優しく、人間の心理を探る。

世に『呉羽隆生』の名を広めたのは三作目、とある文学賞を受賞

して一躍脚光を浴びたが、自分は最初から『呉羽隆生』を知っていた。

本として最初に出版されたよりも前の、雑誌に単発で載った小作原稿用紙にして百枚程度だろう短編が、『呉羽隆生』との最初の出会いだった。

犬の散歩をする老人の話。公園で繰り広げられる何気ない日常。それだけの話だ。

なのに、気付けば繰り返し繰り返し読んでいた。初読の印象は、正直覚えていない。それでも不意に流麗な文章が思い出され、読み返したくなる。読めば読むほど新たな発見がある。違うものの見方に気付かされる。そんな話だった。

その頃の自分は、念願の出版社に就職できたは良いが、希望の文芸編集とはまるで違う営業に配属され、腐っていた。

目の前のことを大切に着実にこなすことを、教えられた。

『呉羽隆生』はその後も、言うては何だが地味に作品を発表していた。出版された一作目、二作目は、静かに深く人間を描くもので、誰しもが経験する不条理と矛盾がテーマだった。禅問答にも似た問いかけの文章。読む者の心の内に答があるのだと、その解答は人それぞれだただ肯定する潔さが、胸に突き刺さった。

しばらくして念願がなつて文芸に配置換えになった。『呉羽隆生』は他社でしか作品を発表していなかったけれど、できるなら『呉羽隆生』の作品に携わりたいと強く願った。

漸う出た『呉羽隆生』の三作目は、今までとはガラリと変わったスケールの大きさに、しかし人間を冷徹に見詰める筆致はそのまま、極限の深層心理までも抉り出していた。

この作家に何があつたのかと衝撃を受けた。

その三作目が、その年、賞の候補に挙がり、そして選ばれた。

人間としての呉羽隆生を見たのは、その授賞式の時だ。

フラッシュを浴びて静かに微笑む青年が『呉羽隆生』と、俄かに信じがたい。それくらい作品でのイメージと本人の容姿がかけ離れていた。

著者紹介で、年齢はまだ若いと知っていた。だが思い描く文学青年のイメージとは、まるで180°ちがう。

洒落たスーツをスマートに着こなしたモデルのような端正な青年だった。受け答えにも立ち居振る舞いにも品があり、年齢以上に落ち着いた雰囲気だ。

勝手ながら、地味で大人しい人物像を思い描いていた自分は、一度興ざめたのだ。『呉羽隆生』に裏切られた気分だった。

それでも『呉羽隆生』の本が出たら必ず読んでいたし、雑誌も必ずチェックした。

生きた人間の心を表現することでは、当代随一の作家だと評価していた。

文芸での仕事にも多少慣れたころ、編集部内の飲み会で作家の話になったときに、酔っ払ったあげくに『呉羽隆生』について熱く語った、らしい。酒に飲まれていたので覚えていない。

が、その翌日、編集長がそんなに好きなら当たってみろ、と一つの連絡先をくれた。

そこからは、自分でも可笑しくなるくらい必死だった。女性を口説くときにもここまではという熱意で猛アタックした。

編集の立場で接してみれば、呉羽隆生は厳格で真摯で、作品通りの人物だった。外見に惑わされた自分を恥じた。

初めて担当した『呉羽隆生』の作品は、穏やかな日常を優しくつづった小作で、何度も何度も繰り返し読んだ犬の散歩をする老人の話を髣髴とさせた。

イラストレーターは、どうやら文字を読むのが遅いらしい。目線が何度も同じところを行ったり来たりして、その分文章を味わって読んでいるように見受けられた。

最初はしかめ面で読んでいたが、徐々に物語りに引き込まれていく様子が如実だった。

その手の内の原稿を窺わずとも、クルクル変わる喜怒哀楽の表情で、物語のどのシーンまで読み進んだのかわかる。

まだ3分の1程度、この調子なら読み終えるのに一時間以上かかるだろうと軽食を用意して戻ったとき、気付いた。

先生の空気が、柔らかくなっている。

先生は、主人公と同じ表情になって物語に没頭しているイラストレーターを、じっと見詰めていた。

唐突に理解した。

自分は、編集という立場で原稿を読んでいた。ただの一読者として物語に没頭できる立場ではなくなっていた。

評論だの批評だの評価だのそんなものではない、ただ、綴る想いが誰かの心に響くかどうか。

作家が物語を綴る、原点ではないだろうか。

今、目の前の一人にはこの物語が確かに届いた。そのことが今の先生にとってどれほど重要か。気付かなかった自分を内心罵倒して、百面相するイラストレーターにこっそり感謝した。

平素、充分すぎるほど礼節をわきまえている先生が、最初投げやりな態度だったのには理由がある。

先生は、受賞以降、爆発的に売れはしないものの、順調に良い作

品を世に送り出し、出版不況にあって売れっ子作家と呼ばれるまでになった。

それでも先生はストイックに、独自の世界を深めていた。

そんな折、先生の本に映画化の話が持ち上がったらしい。他社のことで詳細は分からなかったが、その大手出版社の過去の映像化作品などを見るに、いかにも商業ベース、派手な宣伝キャンペーン重視で、肝心の中身は原作ファンからすると噴飯物の出来も多い。もちろん良いものもあるのだから一概には言えないが、やはりその話を聞いたときには危惧が先に立った。

結果的に、悪い予感が当たってしまった。

事の顛末は、腹が立つので詳細には説明しない。だが、この一件で、先生が業界全体に不信感を持つてしまったことは致し方ない。

その後先生が、他社を含めて、新規の仕事は請けず継続中の連載だけに絞って、しかもそれが終わると新たな連載は断っていると聞いて、焦った。

もしかしたら、このまま筆を折ってしまうのではないか。

いや、書くだけなら、別に出版業界にこだわる必要はない。むしろビジネスの都合上制約が多い。

もし先生が業界に倦んでしまったのだとしたら。

作家『呉羽隆生』が、消えてしまつのではないか。

その可能性に恐怖して、ない知恵を絞って、どうにかして先生を引き止めたいと思った。

編集長や同僚にも相談して、苦し紛れに出した企画が、名前を伏せて別ジャンルのライトノベル。

全く乗り気でなかった先生に、拝み倒すようにして一年間の猶予をもぎ取った。

グズ、と鼻をすすって、ぺらりと原稿を捲る。イラストレーターは、妙齢の女性にはあるまじき顔で泣くのを堪えている様だ。終盤の別離のシーンだろうか。

コレだけ素直な表情を見せる成人女性も滅多にいないだろうと、感心してしまった。引き結んだ口の端が震えている。

こっそりティッシュの箱を前に置いたが、多分気付いていないだろう。

横目で先生を見やると、読者の反応を見逃すまいとするように、じっと見詰めていた。

その口元が僅かに笑んでいて、……先生は、大丈夫かもしれないと思った。

そうして、イラストレーターが最後の一枚を読み終えた。

開口一番何を言うのかと、つい身を乗り出してしまったが、彼女は間を置くように、ティッシュで鼻をかんだ。

……この年の女性が人前で堂々と鼻をかむのも、そういえば珍しいような。

ほう、と目を伏せて息をついて、彼女が口を開いた。

「はい。スカートは膝下10cm、了解しました。是非とも色は紺ではなく黒にしたいと思います。スカーフは緑です。リボン結びじやなくタイにして。髪の毛はストレートロングを後ろで一つに結わえて前髪はパツツン、眼鏡は黒縁」

物語の感想は、と身構えていたら、挿絵についての話だった。

「ついでに作中にはないですが、前歯に矯正器具つけていいですか」

許可を求めながらも、その口調から拒否されるなど思ってもいないのだと分かる。

先生が、黙って満足げに頷くのを見て、苦し紛れのこの企画が成功するのを確信した。

後日、上がったイラストを見て、正直舌を巻いた。

文章を受け取ることに慣れている自分が、無意識にビジュアルというものを軽視していたのだと知った。

同じようにイラストに魅入っていた先生が、急に原稿を手直する、と言い出した時には驚いた。

しかし、添え物に過ぎないと思っていたイラストがこれほどの説得力を持つなら。文章での説明が不要になる。余分な説明をそぎ落とせば、もっとテンポの良い展開になる。

ごみごみした編集部の際の空き机で、先生は、むしろ嬉々として完成原稿に線を引いていた。

……あの『呉羽隆生』に、完成原稿の手直しをさせた。

イラストレーターは同期の緒峯の紹介だったが、来歴を詳しく聞いておこう。

迷い道。壱

「……で？　その後どうよ？」

騒がしい居酒屋は緒峯の指定だ。地方の酒が揃っているというところで緒峯の馴染みの店らしい。正直、酒にはあまり強くないのでどうでも良い。

「その後、とは？」

その表情で何が言いたいのかは分かっているが、すんなり答えるのもどうかと思うので、聞き返す。

「やあねー、あの二枚目作家のことに決まってるじゃない！　ウチの娘に余計なことしてないでしょうね？」

同期の緒峯は、基本、酒に飲まれるような真似はしない。普段は上手に酒を飲む。が、例外がある。非常に機嫌が良いときと、逆に機嫌が悪いときだ。前者は笑い上戸で周囲に酒を勧めまくり、何人も潰す。後者は、絡む。

今日はどうやら機嫌が悪いらしい。さもありなん、緒峯がずっと面倒を見てきたらしい漫画家を、こちらの都合で急に引っ張ったのだから。

「大丈夫だろう？　先生はおかしな真似はしないよ」

揚げ出し豆腐を突付きながら、ソコだけはきっちり主張しておく。

「ふうん？ どうだか。未婚の女の子引つ張り込む時点で、充分おかしい真似だと思うけど？」

「お前だつて協力してたじゃないか！？」

不満げに言われて、思わずマジマジと見返す。

先生が彼女についてあれこれ質問するのに、丁寧に答えていたはずだ。仕事のために近くにおきたいという提案にも頷いて、それならこうすれば良いと、こう言つてはアレだが、いろいろ策を弄したのは緒峯本人だったはず。

「そりゃあねー。理性では、あのイケメン作家センサーとの仕事は、良い刺激になると思うわよ？ あわよくばコレで一息に成長してくれたら、と思う。……でもね！」

ドン、と拳を叩きつけられたカウンターが響く。

「……フッフ……あのイケメン、あの娘の意思を無視して仕事以上のちよっかい出したら、二度と日の目を拝めないようにしてやる……」

その地の底から響くような呟きに背筋を凍らせつつ、揚げ出し豆腐を頬張ることで、聞こえない振りを貫いた。枝豆入りの餡が旨い。ふむ。豆腐と枝豆の意外なコラボだ。マメマメしている。

脳裏に、原稿を読んで感情のまま百面相していた様子を思い描く。……確実に、彼女は隠し事が出来ない性質だ。

二度と日の目を拝めないってどんなだ。知りたくない。そのときは自分も一蓮托生だろう。

……先生。自分は先生を信じています。女性に不埒な真似は一切しないですよね。しないで下さい。絶対に！

温くなったビールで、嫌な予感を紛らわせた。

「……一応、彼女も同居には異論は無い様だぞ。仕事用につて、パソコンやら画材やら運び込んだからな。嫌ならそこまでしないだろ」

電話を貰って車で荷物を運んだのは、今日の話だ。先生のマンションで、特に遠慮した様子も無かった。

「だからねー、あの娘、ホンット素直なのよ。仕事のために必要ですーって言われたら、疑いもしないでしょ？ 電話とファックスで済む話だとか考えないのよ！ 頭は悪くないはずなのに！ そーゆーところが漫画にも現れて、イマイチ薄っぺらいのよね。捻りも無いし。素直なトコは長所なんだけどね」

なるほど。

一冊目のイラストが上がった後、彼女について緒峯に聞いた時に、デビュー作も読んだが。

24pの読みきり、所謂ラブコメで、典型的な女の子と典型的な男の子の典型的なストーリーだった。絵の上手さで読み進めるが、読後印象に残らない。

「まー、本人もどうかしよう頑張ってるんだけどね、やーっぱ、ネームは、こー、なかなか、ねー」

デビュー前から担当しているのだと聞いた。多分緒峯にとっても初めて任された新人じゃないだろうか。思い入れもあるだろう。

「なら、先生の側でその作品に触れるのは、良い機会じゃないか」

「そう思ったから色々協力はしたけどね！ でもね！！ ……んゝ！！ なんかこー釈然としないのよ、あのイケメン作家本気で仕事だけで同居とか言い出したんだと思う？ マジ絵だけ？ 普段からそーゆーことする人？」

いかん、目が据わってる。

「先生は、作品のためには骨身を惜しまない人だ。今回はあの絵を見て完成原稿を手直したくらいだし、絵を気に入ったのは間違いないだろ」

宥めると、いきなり胸倉を掴まれた。

「あのセンセ枯れちゃった歳でもないしあの娘だって独身だし！ アンタ、見張っててよね！ あんにやろめが助平な真似しないように監視してよね！！」

……酔っ払いだ。今日はまだそこまで飲んでいないはず、…と思ったら、そうでもなかった。日本酒を冷でどれだけ飲んだんだ。いつのまに。

「わかったわかった。……先生はそんな真似しないと思うがな」

アンタはあの娘の可愛さがわかってない、と叫ばれて、居酒屋中の視線を浴びたこととか、緒峯は明日には忘れてるんだろ。

同期入社で、未だ転職していないのは自分と緒峯だけ。二人だけの同期だから何かと交流もあるわけだが。

飲みにつき合うたびにいつも面倒なことになる。

酔っ払いを、しかも一応は女性を放り出すわけにもいかず、タクシーを拾って緒峯のアパートの住所を告げる。緒峯と飲むと、大抵こうなる。いつものことだ。送ってあげれば終電は逃すのもいつものこと。タクシー代だってバカにならない。

社から近い緒峯のアパートは、入社当時から、同期で飲んだときには皆で転がり込む定番だった。やがて同期が一人二人といなくなり、結局生き残っているのは二人だけ。でも飲み会の後になし崩しに泊まることは今でもしばしばだ。競争相手がいないから、リビングのソファに悠々と眠れる。

仕事で締め切りが押せば社の廊下でも寝ることを思えば、ソファなんて上等だ。

ふと、そう言えば自分も『枯れちゃった歳でもない』し、緒峯も『独身』だと思いつく。それで今まで間違いが起きた例は無い。

先生も大丈夫だ。

納得した。世の中の男がみんな狼であるかの様な認識は、間違いだ。

迷い道。 壱（後書き）

ドコまで主人公の名前を出さずに書けるのか。 藤埜サン視点での一番のネックに今更気付いた。

迷い道。式

いつもの癖で、電話だというのに深くお辞儀して、受話器を置く。先生からの電話は大抵用件が端的に纏められているので、非常にそつけない。

走り書きのメモを見て、思わずため息が出そうになる。いけないいけない。先生のサポートは万全でなければ。

『ユディト。サロメ初』

我ながら、自分でも時間が経ってから見直したら判別不能だろうメモだ。

今回、先生に頼まれて集めた資料は、戯曲『サロメ』に関する資料と、サロメのモチーフとされている聖書の登場人物『ヘロディアの娘』に関する資料。

そのなかで、『ヘロディアの娘』の絵画を纏めた画集がたまたま目に付いたから、何の気なしに他の資料と一緒に送付した。

そうしたら、その画集に『ユディト』の絵も混ざっていたようだ。自分は宗教に詳しくないが、先生が言うには、ヘロディアの娘と同じく聖書の登場人物ではあるが、別人だそうだ。

このユディトについての詳細資料が手に入るなら、と求められた。

そして、サロメだ。

初演の詳細。確か、最初は未完成で上演されたはず。そして脚本完成後初の公演ではセンセーショナルな内容に非難が集まったそう
だ。

先生は、基本、資料集めや取材は、ほとんど依頼してこない。全部自分でやる。今回は、こちらが無理に頼んだ企画でもあるので、可能な限り関わらせて欲しいと、自分から頼んだのだ。

だからこそ、生半可な仕事はできない。求められる以上の資料を揃えたい。

今回のモチーフだと聞いた、サロメ。

一体どんな話に仕上がるのか。

一作目は、ミリアム（旧約聖書に登場する女預言者）とカッサンドラ（ギリシア神話に登場するトロイアの王女。悲劇の予言者）についての資料を掻き集めた。

その資料がどう活かされたのか。先生独自の解釈で主人公の造形が出来上がったのだろう。

出来上がった原稿を読んでもみると、自分が調べた『ミリアム』や『カッサンドラ』から漠然と受ける印象とはまるで違う話だった。

だから今回も、きっとサロメの生々しい印象とは違う話になるんだろうと思う。

それに、イラストも。今回は最初から絵を念頭にストーリーを書いてみたいと先生が言っていた。これほど先生が期待する絵というものに、もちろん自分も興味がある。だが、その部分については、関わらせてもらえなかった。

作品については自分で説明するから、彼女に何か聞かれても答えないようにと先生から指示されている。

いきなりヌードはありかと電話で問われたときには面食らったが。

……先生は彼女に、どんな説明をしたんだろうか。

迷い道。参

いつもの居酒屋で、いつもの顔。

「それで？」

定例になってしまったのだろうか。先生の個人情報ぺらぺらしやべるわけにはいかないのだが、どうして自分は緒峯に尋問されているんだろう。

目の据わった緒峯に生ビールを押し付けられ、仕方無しに口をつける。酔ったからといって口が軽くなる性質ではないことは緒峯も知っているはず。だからこれは単に緒峯の機嫌が悪いのだろう。

「……それでもなにも。先生の要望どおりに、絵を描いていてくれるようだが」

先日、資料の件で電話したら、一日電話が繋がらなかった。何事があったのかと後で聞けば、ずっと絵を描くところを見ていたそうだ。

迷いいつも線を描き、そして斜線で破棄する。絵そのものよりも描いている姿に、先生は興味を持ったらしい。絵を描く主人公というのも面白そうだと電話口で呟いていた。

頼まれたユデイトの資料について、送付した旨と口頭での簡単な説明で、電話を終えた。

だから、緒峯が知りたがるようなことは、話題には上らない。

「……この前出た本、読んだんだけどね」

緒峯が、芋焼酎を煽りながら言う。

「なんつーかさ」

言いかけて、エビチリを一口。その思わせ振りの間に、ぎくり、とした。

「正直にものを言えず、言葉を矯正される主人公ってさ。そーゆーこと？」

ああ。やっぱり。

「……なんでそう思う」

「バカにしないでよ。あんだけハッキリテーマのある話、読めば分かるじゃない。それに、一応業界の噂話も小耳に挟んでるし。なーんか大手とトラブったらしい程度にはね」

そうだ。緒峯は、今は漫画編集だが、かなりの読書家でもある。主にミステリーやサスペンスを読むが、他ジャンルだって人並み以上には読んでいる。

その辺が、自分と話が合う部分だ。他はまるで180度違う。

普通に読解力のある読者が、裏の事情を知っていれば。当然、推

測もできるだろう。だからこそその別ペンネームだったのだが。

迷った末、他言無用と前置きして、事情を話した。

「……それで、他社含め仕事を整理していた先生に、拝み倒して、この企画だったわけだ」

緒峯は黙って聞いて、ふむ、と頷く。

「それで、あの子なのね。……あー、なんか分かつちゃったなー。くっそどうしよう同情ポイントが」

同情？　どういう意味だ？

トマトとモツツアレチーズのサラダを突付きながら先を促す。
バジルの風味がアクセントだ。

「んー。……まあ、捻くれ者は、『素直』に憧れるのかもね」

ある意味、同病相哀れんじゃう。

そう呟いて、また違うグラスを煽る。芋焼酎の次は濁り酒か。どうしてそう女らしくないものを選ぶのか。

「……うー。認めたくないけどなー。んでもなー。悔しいことに、作家としては確かになー、筆折ってほしくはないわなー」

ヤバイ。語尾が怪しくなってきた。確か漫画月刊誌の仕事のピークが過ぎたばかりのはずだ。いつもの酒量にはまだ早い、疲労が溜まって酔いが早く回っているのだろう。

耳までほんのり赤い。

「……あたしは、ちょっと静観するから……アンタは、きっちり見張っててよね」

それでもきつちり釘を刺すあたりはあっぱれだ。普段から比較して格段に迫力の無い脅しを最後に、緒峯はテーブルに懷いた。

こんなところで寝られたらかなわない。

急いで会計を済ませて引きずるように外に出る。幸いタクシーは直ぐにきたのだが、乗り込むと緒峯は早々にダウンした。

……仕方ない。また、アパートに放り込んでおくか。

運転手に行き先を告げ、勝手に緒峯のハンドバッグからアパートの鍵を探り出した。

ひょっとして。

自分は緒峯の酒の面倒を見なければならぬめぐり合わせなのだろうか。

自分が一緒だから緒峯が安心して潰れる、という可能性は、極力考えない方向で。

カッサンドラ。正しいことを言っても受け入れられない予言者。
一般的な認識は『悲劇の女予言者』だ。

一作目の主人公は、当初、抑圧され思うことも口に出せず、相手の顔色を窺って相手の望むように振舞っていた。

だが、先生の描く主人公は、最終的にゆるぎない『自分』を見つけた。

自分の心までは偽れない。

理解されなくても受け入れられなくても。

心からの言葉を、止めることなど、できない。

イラストレーターが、堪えきれずぐしゃぐしゃの顔で涙を流したシーン。

主人公が叫ぶ言葉は、あれは、先生の心からの言葉だ。

迷い道。肆

珍しく、打ち合わせで先生の家に来ている。普段は編集部や外の店に足を運んでくれる先生が、今回はここを指定したのは、イラストレーターのためだろうか。

淡々と進捗状況を確認して、挿絵の話に進んだ。どんなイラストになるのかと内心身構えていたら、意外に、平凡だった。

先生が良しとしているので異論はないが。少々、肩透かしを食らった気分ではある。

ただ、このままでは地味すぎるので、絵面を華やかに、と希望した。

「ちょ、平凡、且つ、華やか、って矛盾してませんか？」

慌てて異を唱える愕然とした表情。それを横目に、先生が薄く笑うのが分かった。

……ここは先生の思惑に乗るべきか。

「大丈夫です。頑張ってください」

口先だけ、と自分でも分かる励ましに、彼女はパクパクと口を動かすが、言葉は出てこない。

「あなたは、どうやら追い詰められた方が いい 仕事をするようです。もつと追い込まれてください」

横から追い討ちをかけた先生を、彼女がギロリと睨む。迫力はないが度胸はあるようだ。

「そうなんですか？ 緒峯さんは、プレッシャーに弱いタイプで中々成長できないと言っていました」

睨みつけるのに、一緒に頬も膨らませたら駄目だろう、と、吹き出しそうになるのを堪えて、微妙に話を逸らした。

「踏みつけ方が甘かったんでしょう。麦ではなく雑草です。結構図太いですよ。いきなり連れて来られた他人の家で、すっかり寛げるようですよ」

……先生も、なかなかどうして。仕方無しに、その路線に乗る。

「なるほど。確かに血色は前よりよさそうですが」

ああ。彼女の中で、自分も敵認定だ。

「これも作品のための投資です。珍獣一匹飼ったと思えばコレぐらい」

……先生。流石にそれは返答に困るんですが。

一瞬、どう返すべきか迷って、沈黙すると。

「ちよつとちよつとさつきから黙って聞いていれば好き勝手なことを！！ 誰が飼われてるんですか！ あたしがここにいるのはオシゴトのためでしょ！？ もーイイですさつさと描き上げます描いて終わらせます、そんでバイバイです！！」

彼女は憤然と立ち上がって、テーブルの上に広げられていたスケッチブックを掴むと、足音も高く部屋を出て行った。バシャン、とワザとらしく音をたててドアが閉められる。

その背を見送って、そして先生に目を戻すと、なんとも言えない柔らかな表情で彼女の去った方を眺める先生が、そこにいた。

「……先生？」

思わず声をかけてしまって、そして先生がいつもの穏やかな表情に戻ってから、もったいない、と思った。あんな表情はなかなか見られるものではない。もともと端正な顔だったが、どちらかといえば作り物めいた整い方で、内面を窺わせない。

「失礼。上手く合わせていただいて助かりました」

いつもの顔で、先生が言う。

「乗せるのがお上手で。……結構負けず嫌いなようですね」

この業界では、その方が良い。むしろ緒峯が過保護だったんじゃないのかと思う。

「そうですね。おかげで、一から書き直しです」

え？

打ち合わせでは、順調に書き進めているという話だったのでは。

驚いて先生を見ると、苦笑して数枚の絵を取り出した。スケッチブックから破り取ったらしい紙。

「これが、当初予定していたストーリーの、絵です」

ぐしゃぐしゃに斜線で潰されているが、下の絵は分かる。

一言で言うなら、痛い、絵だった。

「追い詰めて、こういう絵を描いてもらおうとしていたんですけれどね。実際、途中までは描いていたんですが。……何か違う、思った様です。『常軌を逸した露出』への解答は、これではないと」

先生が、痛みを堪えるような、それでいてどこかスッキリしたような顔で、絵を眺めている。

「……サロメやヘロディアの娘のイメージには、この絵のほうが近いかもしれません」

先生の眼差しの先にある絵の、塗りつぶす黒の隙間に残った虚ろに荒んだ瞳。身勝手に、罪の無い人間の死を願うような人物は、こんな目をしているのではないだろうか。

なら、どうして先生はこの絵で良しとしなかったのだろう。

先ほどの打ち合わせでは、もっと普通の、可もなく不可もない少女の絵で、話を進めていた。

「外見の否定、とは、他人の目に映る自分の否定です。常軌を逸した露出とはつまり他者からの評価の破壊で全ての否定であり、含まれる真実の自分すらをも否定する。と、そんなストーリーを用意していたのですが。……彼女の解答は、ただ素の自分であることだった」

……なるほど。

「それで、サロメではなく、ユデイトなんですね」

追加の資料で調べ上げた『ユデイト』は、領地を守るために、敵軍の司令官の下へ、二心を持って降る女領主だ。目的のために屈辱に耐え、そして敵将の首を掲げる。

逆境にあつて、ユデイトは自分を見失わない。

「ですから、書き直しです。最初から、今回の主人公は、絵が先、のつもりでしたから、これも想定内です」

いつそ面白そうに先生が言う。最初のプロットを捨てるというのに、晴れ晴れとした顔だ。

捻くれ者は、『素直』に憧れるのかもね。

緒峯の声が、思い出される。

「……………では、スケジュールは予定通りで大丈夫でしょうか。もとかなり余裕がありましたし」

「絵の進行に遅れないように、書き上げます」

断言する先生に、前回の地獄を思い出した。

近年稀に見るギリギリっぷりで、これは駄目かと諦めかけた。執筆もなかなか進まず、何とか中身が書き上がったかと思えばイラストで躓き、崖っぷちでやっと納得のいくイラストレーターを見つけたかと思えば完成原稿を更に手直しまでして。

あんな地獄は滅多に無い。今回は余裕がある。大丈夫だ。

上がった挿絵を見て、また先生が完成原稿に手を入れたとか。

前例の無い、カバー下にもイラスト印刷とか。

余裕があっても対処に四苦八苦する破目になるとは、思っていないかった。

バイパス。壱

「んっふっふー、読んだわよ」

呼び出された居酒屋で、緒峯は既に出来上がっていた。

どうやら機嫌は良いらしい。この場合、酒を押し付けられるのは確実だ。終電までの時間と明日の仕事を瞬時に計算し、最後まで付き合う覚悟を決めた。

「じゃあ、生一つと、……チーズ味噌？ってどんな？」

本日のお勧めメニューを眺めて、目を引いた酒肴をいくつか頼む。いつもながらこの店のメニューは取りとめも無い。が、旨いことは確かなので問題はない。

「じゃ、かんぱーい！」

早速運ばれたジョッキとワイングラスで乾杯した。

「……何に？」

何でこんな上機嫌なのか。呼び出しの電話もかなりハイテンションだったが。

「そりゃー、あの娘の仕事に決まってるでしょー？ 良い仕事したみたいじゃない」

「もう読んだのか。発売日は来週だが」

現物が刷り上ったのは、一昨日だ。昨日、先生に届けに行った。

「一冊目と、ちょっと変わったわよね？ あれ、あの娘のせいでしょう。全体的にちょっとだけ柔らかくなった。イラストに引き摺られちゃった？ アツハツハッ！」

……既にどんだけ飲んだんだ。

「そんなこともない。もともと、今回はイラスト先行で書く予定だったわけだし」

実際、先生は書き直しているわけだが、少し癪なのでそこは伏せておく。

ちょうど良いタイミングで、チーズ味噌とやらが運ばれてきた。どうやら、チーズの味噌漬けらしい。チーズと味噌のくどさを大葉がフォローして、酒肴としては、ビールよりも日本酒に合いそうだしきりつと冷えた辛口。如何せん自分は日本酒なら一合も飲めばへべレケになってしまう。微妙に残念だ。

「んで、その後の予定はどうなのよ。こっちもねー、名指しでアシの仕事とか、断るのもキツイんだけど。あの娘、絵は確かだし手は早いし仕上げは丁寧だし、おまけに修羅のギスギスした空気と和らげてくれるし、すごい貴重なんだけど」

横からチーズ味噌をつまみながら、緒峯が言う。

なるほど、確かに。絵の知識はないが、スケッチブックに落書きをしているところを見るに、フリーハンドでも人工物や風景を迷い無く描くのは、凄いことなんだろう。

「そうだな……。今は三作目に取り掛かっているから、なんとも言えないが」

ボディビルを取材すると先生が言ったから、いくつかのジムを調べて紹介した。ジムに取材の調整をかけたらたまたま全国大会が近くあると教えられ、その件も先生に伝えた。

……昨日献本を届けに言ったときの、彼女の様子を思い出してしまった。ボディビルに並々ならぬ思いがあるようだ。

深呼吸して、頭を切り替える。

「三作目も順調のようだし、スケジュール的には前倒しに進んでいる。これが終われば、四作目に取り掛かる前に、一区切り入れられるかも知れない」

「ふうん？　それで、あのイケメン先生、どうよ？」

……先生の、あの、なんとも言えない表情を思い出してしまった。

一瞬の沈黙に、緒峯はなにか嗅ぎ取った。しまった。

「ちょっと、どーなったの？　まさか……？」

「いや！ 何も無い！ 何も無いけど！」

「けど？ 何？」

「…………でも、その、……なにか、は、……ある、かも？」

自信なく濁した言葉に、即座に胸倉つかまれた。

「どーゆーことが、きっちり聞かせて欲しいわねえ？」

絡み酒か？ いや、これは酒がなくてもこうなっただろう。

しぶしぶ、打ち合わせのときの先生の様子を話した。

正直、自分では判断に困ってもいたので、緒峯の意見が聞ければありがたい。

「…………と言っわけで。先生は、なにか思うところがあるんじゃないかと」

個人情報を漏らすことを後ろめたく思いながらぼそと話す。

「……………」

「いや、だから何かあったわけじゃないんだ。彼女がどうこうという話じゃなく」

緒峯の沈黙が怖い。

そりゃそうだ。年頃の未婚のお嬢さんを、半ば騙すように連れて来ているのだから、万が一のことがあつてはいけない。その辺は先生を信用してはいるが。

「……ふっふっふ。これは面白い」

「は？」

「面白いじゃないの！ 王道だわ！ 振り回されるイケメン！！」
いきなり握りこぶしで何を力説している。

「ちょっと、今度ゼヒ先生と話させて頂戴！ あの娘のこといろいろ教えてあげるからって。コトと次第によつちや協力するからって！ あっはっは、天然に振り回されてヘタレに転落する美形！」

「……筋道はともかく、結論を教えてくれ」

緒峯の思考を理解しようとする努力は放棄している。

「あの先生があの子にラヴってことよ！ ザマーミロ！」

そのざまーみろが理解できない。が、先生が彼女を気に入っているらしいことは、最初から察していた。それが女性に対するものは不明だが。

「いいからいいから。兎に角あの先生サマに伝えてよ。あの娘のこといろいろ教えるからって。それで応じれば確定よ！」

まあもう決まったようなもんだけどね！

と、緒峯は上機嫌でグラスを干す。どうしてそこで上機嫌なのか。次はウイスキーをオーダーしているし。

「しかし、もしそうなら、彼女をあのままあそこに住まわせていいのか？」

先生がそう言う意味で彼女に好意を持っているなら、一つ屋根の下なんて。

「ああ、うん、そうね。じゃあこう伝えてよ。あの娘、男の人苦手なのよ。ガラガラハアハアしてるのなんか苦手どころか嫌悪してるわよ。下手に手を出すと確実に嫌われるから。真っ向から挑むと必ず逃げられるから慎重にねって」

……一体、緒峯は彼女をどうしたいんだ。

「あーゆー計算できるタイプは、確実に手に入れようと思ったたらトコトン慎重になるでしょ。迂闊に手え出すと一生手に入らないわよって脅しといて」

脅す。いや、だから、先生が本当に『そう』なのか、まだ決まったわけではない。

緒峯がウイスキーの氷を指で突付く。

「ま、応援するか邪魔するかは、話してみて決めるわ」

……………どっちも御免だと思っるのは自分だけだろうか。

結局、つぶれた緒峯を背負って、いつもの如く、緒峯のアパートに向かうこととなる。

バイパス。弐

なんだかおかしい方向になっている。

先生と緒峯が頻繁に連絡を取り合っているらしい。

……………嫌な予感がする。

先日の飲みの後、緒峯の連絡先と伝言を先生に渡した。半信半疑だったが、どうやら緒峯の言うとおりだったらしい。即、先生から電話があつたそうだ。

なんと言うか……………嫌な予感しかない。

本音を言ってしまうえば、先生の創作意欲を刺激してくれる彼女がこの先も先生と関わりを持ってくれるなら、大歓迎だ。

しかし、コトの経緯や現状を鑑みるに、だまし討ちのような罪悪感が否めない。

最初はどさくさに紛れて強引に仕事を引き受けさせ、更には本人にきっちり説明もなしに4冊分を契約させた。ライトノベルのイラストとしては破格の稿酬とはいえ、徹夜明けの正気でないときに契約の話をしたのは、詐欺の手口に近いような気もする。

しかも強引に同居させているし。

ただイラストの仕事という以上の無茶振りをしている気がしないこともないようなあるような……。

……まあ、彼女も子供じゃないんだし。嫌なら自分でキツパリ言うだろうし。大体あの先生に口説かれて落ちない女性がいるとは思えない。最終的に合意なら問題ないだろう。多分。恐らく。きっと。……そうだと良いな、と願っている。

『嫌な予感』は、当然予感だけで終わるはずが無かった。

予定外の先生からの連絡は、仕事についてではなく、それ以外の用件だった。

他社の担当に、余計な誤解を与えた、という。

問題は、その担当が例のゴシップ騒ぎの時の出版社だという、その一点だ。

ゴシップの悪夢再び、となるかどうかは微妙だが、まあ警戒は必要だろうという程度ではある。

先生と電話をつないだまま、即、緒峯も呼び出して巻き込んだ。

……が、緒峯を巻き込んだことを、直ぐに後悔した。

「じゃあ、利用しちゃえば？」

……けしかけてどうする。

愕然としている目の前で、電話の先生と緒峯が不穏な計画を練り上げていく。いや、計画というには雑なのだが、その目的が不穏だ。

「大丈夫よ、そうですって言い切っちゃえば、あの娘が疑わないことは確実だから。この際外堀は埋めとけば良いじゃない。実際、可能性は低くても記事にされちゃうかもしれないってトコは本当なんだし、そこはきっちり手を打っておかないと。まああっちだってこれ以上売れっ子作家の機嫌を損ねようとは思わないでしょうから、何もなければ外堀埋めただけ丸儲け」

……電話の向こうで、先生が何を言っているのが非常に気になる。

先生。希望なんです、緒峯の甘言に頷かないで下さい。お願いします。

「おっけー、じゃあ後は藤埜サンがもってもらしくあの娘の危機感煽るってことで」

ああ。こうして片棒担がされることになるのか。

いや、もうこの際、片棒でも共犯でもどうでも良い。

最終的に合意なら問題ない。ない、ということにしよう。

翌日、そ知らぬ顔で先生宅に呼び出され、さも深刻気に振舞った。

緒峯の言った通り、彼女は疑う素振りも見せずコロリと騙された。説明したことは、確かに殆どが事実だ。某出版社の不始末など脚色する必要もなく酷い話で、その後のゴタゴタも事実。

ただ、先生の思惑やら緒峯の暗躍は、黙っているだけのことで。

一通りの事情を話し終えたところで、タイミングよく先生が書斎から出てきた。

……はい。これから外堀埋めに行くわけですね。彼女に冷静に考える時間を与えずに。

啞然としつつも先生に促されるままに実家に電話している彼女が、……下手な詐欺師に騙される前に先生に守ってもらうほうが彼女のためかもしれない。

バイパス。参

女性に対して容姿を論うなど失礼な物言いであることは承知している。が、敢えて正直に言ってしまうと、あのイラストレーターは、なんと言つか、その、……適切な言葉が浮かばない。

分類するなら、可愛い系。

多分人並みに着飾って化粧もすれば綺麗になるだろう。が、今までを見るに、おしゃれという言葉をまるで実践しないタイプだ。

彼女のスタイルは基本清潔ではあるものの、ラフでカジュアル。絵を描くという仕事上、汚れやすいことを考慮しても、あまりに無頓着ではないかと思う。

異性の目を一切気にしない、もしくは、異性の目を忌避しているスタイルだ。

営業でそこそこ鍛えられたから、この印象は大きく外してはいないと思う。彼女は、恋愛に消極的だ。

そして、真意は不明なれど、目を光らせている緒峯がいる。

つまり先生は、非常に困難な茨の道を選んだわけだ。

と言うのに。

「…………泊りがけ？」

明日に簡単な打ち合わせを予定していたのだが、夜更けにキャンセルの連絡が来た。その理由が。

『はい。ちょっとドライブに出て、そのまま帰れなくなりましたので、こちらに一泊します。明日の午後には帰る予定ですから、打ち合わせの時間を午後以降にずらして欲しいのですが、可能ですか』

いやいやいやいや、ちょっと待て、チョットマテヨ！？

『急ぎの用件があるようなら、朝一で帰りますが』

「いえっ急ぎませんっ大丈夫ですっ」

『そうですか。では、帰ったら連絡します。遅くとも昼過ぎには帰る予定ですので』

「はいっお待ちしていますっ！！！！」

いつもの癖で、お辞儀をして電話を切る。

イヤ待てよ自分、電話切ってよかったのか、先生にもう少し詳細を突っ込むべきだったんじゃないのか、せめて朝一で帰ってきてもらうべき、違うそれじゃ手遅れだろ！？

…………フッフ…………あのイケメン、あの娘の意思を無視して仕事以上

のちよっかい出したら、二度と日の目を拝めないようになしてやる……

悪寒と共に、空耳が聞こえた気がした。

バイパス。肆

打ち合わせは、出版社近くのカフェを指定された。

どんな顔で打ち合わせに行けば良いのか。……と思っていたら、来たのは先生一人だった。何でも彼女は具合があまり良くないらしく、家で寝ているそうだ。

……………先生。ナニヲシタ。

先生も微妙にお疲れ気味のようで、いつもなら緑茶を頼むのに珍しく玄米茶と和菓子のセット。疲れているときは甘い物デスヨネ。

とりあえず、緒峯にバレるまでは、自分は何も知らない。知らないっいたら知らない。男女二人で温泉宿に泊まるうが、無いときは何も無い。……いや、流石にそれは自己暗示にも無理があるな。

「原稿は、予定よりもはかどっていますよ。昨日でおよそ最後までは見えました。後は全体を見直せば良いくらいです」

「凄い、ですねそれは」

先生の言葉に、思わず言葉が出た。

「随分と順調に進んでいますね。……やっぱり、イラストがあるとイメージが固まりやすいのでしょうか」

彼女が関わってからの進捗状況が、優等生にもほどがある。実際先生は、大抵は締切を守るが、書けない時は全く筆が進まなくなる性質だ。一度止まるとにつきもさつきも行かなくなつて、結局話そのものを零から書き直すこともあるくらいだ。それが。

「そうですね。非常に助かっていますよ。先日も、他社の原稿ですが、助けてもらいましたし」

他社の。……例の、アレか。そこは助けなくても良いところだが。

「じゃあ、ますます手放せませんね」

少しトホホな気分で、もうココは腹を括るべきかと開き直った。

先生に良い作品を書いてもらうために、彼女はこのまま先生の側にいてもらおう。

緒峯が何か言つて来たら、合意で押し通そう。先生のために盾になりますよ。気分はデモ隊に立ちふさがる機動隊員だ。ポリカーボネイト製の盾つて通販で売ってるかな。

「……………そうですね。もう彼女無しでは考えられません」

先生は、小さく呟いて、控えめに口元を緩めた。その表情はやバイです。オトコでも切なくなる。

「つつつ先生つ、協力します！ 全面的に協力しますから！」

だから緒峯に負けずに彼女をゲットしてください！ いや、もう

ゲット済みみたいけど！

「ありがとうございます」

晴れやかな先生の顔を見て、改めて担当として作家のバックアップに全力を尽くすと誓った。

そして、月曜日。

先生はもう原稿を上げていて、早速挿絵の打ち合わせをした。彼女はなんだか一つ壁を越えた様で、意欲的にラフを何枚も描き上げてくれた。

なまじ絵が上手いものだから、マッチョの破壊力が素晴らしかった。この話、主役は別なのに、マッチョの印象が強すぎる。挿絵にはなるべくマッチョのシーンは避けたい。どうやらその点は彼女も同意みたいだ。

脇役たちも丁寧にデザインしてくれて、仕事に対する熱意が少し増したようだ。チラッと先生を窺うと、満足そうにその様子を眺めている。

……ヤッパリソーユーことデス力。お互い何か変化があったみたいデスネ。合意ですね。コレは合意の上なんですネ。じゃなきゃ彼女が普通に仕事してるはず無いですもんね。

じゃあ、緒峯のコトはどうにか引き受けますから。お二人の邪魔はさせません。

……せめて骨は拾って欲しいですが、お願いしても宜しいでしょうか。

バイパス。伍

いつもの居酒屋にて。

刷り上ったばかりの見本を緒峯に渡す。……という口実で、緒峯を呼び出した。

「サンキュ〜！ フライングで読めるってのはこの仕事の特権よね！」

先生の本を嬉しそうに受け取ってくれる様子は、担当としても非常に嬉しい。しかし今日の目的を考えると心臓が痛い。

「ああ。……まあ、後で読んでくれ」

パラパラと捲って先ず挿絵を確認するあたり、やはり優先順位は先生より彼女の方が上ってコトだろう。

「それでだな。……あーっと、先ず連絡事項なんだが。予定がかなり余裕だから、一度彼女には自宅に戻ってもらった。仕事再開の時には知らせるから、それまではそっちの仕事をしてもらっていい。多分2、3ヶ月は暇だろうから」

スケジュールを告げると、緒峯は喜んだ。

「助かるわ！　これで年末アシ―人確保！」

「年末？」

年末って、なにかあったか？

「暮れはねー、アシスタントがつかまらないのよ。みんな自分の方優先するから。盆と暮れが神無月。某所だけが神在月ってね。同人やってないアシなんてあの娘くらいよ全くドイツもコイツも趣味に走って仕事をなんと心得る24時間戦うサラリーマン見習えって……」

途中からブツブツと聞き取れなくなった。何か地雷を踏んだらしい。触らぬ緒峯に祟りなし。

「あゝ、それで、だな。彼女の、ことなんだが、……その」

何と言って良いのか。

間を持たせるのに、適当に頼んだ料理をつまむ。馬刺しの和風力ルパッチョ。山葵が鼻にツンと来た。

「……なによ」

緒峯の声が半音下がった。

……これも先生のため。先生のためだ。

「……その、だな。応援するか邪魔するかは、決めたのか？」

隣が見られない。ので、カルパッチョをじっと睨む。ふむ。白髪ネギは繊維に対し斜めに切っているのか。小技だな。

「なんでアンタがそんなこと言い出す訳？」

更に低くなった声に、少しびびる。コレもソレも先生の良い作品のためだ。頑張れ自分！

「先生との仕事は、彼女にとってもプラスに働いていると思うんだ。もちろん、先生にとっても。だから、お、応援、するほうが」

自分を奮い立たせて、勢い込んで言った。

「……………へえ？　つまり、アンタは応援したいわけね」

半眼になってるし。くそう、もう少し酔ってから言つべきだったか？

「そうだ。先生に、協力したいと思っている」

「は！　先生に！　結局それよね、せんせー様サマ！　あの娘のためじゃないじゃない」

吐き棄てるように言われて、ムッとなる。

「だから、彼女にとってもプラスだと思ってる」

「……いーい？　あの娘はねー、ホント晩熟なのよ。お子チャマなの。」

そーれーが、あの如何にもなイケメンに言い寄られてどーなると思う？ ドン引きよ、どんびき！」

ぐい、と胸倉掴まれた。

「んだから、アンタに監視しろって言ったのはねー、あのイケメンのストッパーになって欲しいからよ」

「へ？」

「邪魔なんかしないわよ。むしろイケメン先生には直に発破かけてるもの。けどねー、ガンガンいくと確実に逃げられるからねー」

「え？ あれ？」

「だから、重石役よアンタは」

……………そう言うことは先に言ってくれ。

「じゃあ、ナニか？ お前は、先生にはアレコレ情報流して煽って、俺には……………」

緒峯がニヤリと笑むのに、絶句した。

「お前、嫌われ役をオレに押し付けたな……………？」

「でもさー。結局、全然ストッパーになってないみたいじゃない？ 作家至上主義も大概よねー」

サラリと言われて、ハツとした。多少なりとも思うところがあっ

たのに、先生のやることに異を唱えたりはしなかった。……それを言っているのか。

「ま、これからもストッパーにはなつて欲しいわけよ。先生だけじゃなくあの娘のためにも」

ここだけは真剣に言われて、正直耳が痛い。最早手遅れだとの面下げて言えようか。

「……わ、かった。努力する」

気圧されながら、頷いた。

んっふっふー、と笑ってビールジョッキを煽る緒峯が、何歩も先んじている様に思えて。

つい。

「他人の恋愛に首突っ込んで、そーゆー自分はどうなんだ」

ポロリと。

……最大級の地雷だと、知っていたのに。

その日、頭からビールを被るという初体験をした。

緒峯と二人で飲んで、緒峯を送っていかないのも初めてだった。

戻り道（前書き）

今回は、かなり不愉快なシーンがあります。ご注意ください。

戻り道

就職難就職難と世間では叫ばれていても、名の通った大学のおかげか、周囲もそこそこ内定を貰っていた。ニュースで言う就職率は、実感は薄い。それなりに受験戦争を勝ち抜いた過去の自分の頑張りのおかげか、教育熱心だった両親のおかげか。

それでも、希望通りの出版社に入社できたことは、やはり嬉しかった。やりたい仕事ができるのは幸運なのだった。

中途採用ではない同期は十数人いて、それなりな大学出身が揃っていたから、俺自身も鼻高々だった。勝ち組だと思っていた。

その同期の中で異彩を放っていたのが、緒峯だった。同期とはいえ歳は二つ上。院卒という訳でもなく、大学を出て一度他所に就職してからこちらに入りなおしたという話は後から知った。

同期の最初の飲み会で、皆が自己紹介で出身大学を付け加える中、緒峯はサラリと名前と歳を言っただけ。言うほどの大学ではないのだと、二浪でもしたのかと勘ぐる連中もいた。

緒峯は、そんな世間知らず連中の無意識の嘲りなど齒牙にもかけず、男顔負けの酒豪っぷりを見せて最初の飲み会に圧勝した。

新人研修が終わると、配属が決まる。最初から希望通りに行くと

は期待していなかったが、それでもまるで考えていなかった営業に回されたのはショックだった。

営業に配属された同期は結構いて、つまり営業の仕事は研修の延長でもあったらしい。社会人として使えるかどうかを試されていたのだと、文芸に異動してから理解した。

営業の仕事は、ひたすら頭を下げるに尽きる。指導してくれた営業の先輩には、丁寧語と敬語は違うと繰り返し直された。挨拶、敬語、そして時間厳守。先ずそれができていないと、そもそも仕事の話が出来ない。

敬語を自然に使えて、臆せず相手と話せるようになるまでに半年はかかった。それでも同期の中ではマシな方だ。

同期の中には学歴だけのプライドで、頭を下げるのも不承不承といった態度を隠さない奴もいた。そんな奴らは、やがて消えていった。

入社して一年が過ぎる頃、緒峯が担当した漫画がヒットを飛ばした。緒峯は最初から漫画編集の方へ配属されていて、順調に頭角を現していた。姉御肌の気性もあって、歳若い学生デビューの漫画家などを多く受け持っていると聞いた。

少女漫画なんて、と吐き棄てる同期も、少なからずいた。

『呉羽隆生』の作品に出会ったのはその時期だ。正直嫌々だった営業の仕事にも真剣に取り組むようになったのだが、早く緒峯と肩を並べたいという思いも、多分、あったのだろうと思う。

緒峯は、他所で二年。だから、嫌々やっていたこれまでの一年は切り捨て、これからの二年で勝負。勝手に目標にして張り切った。残業もすすんでやったし、新しい仕事には必ず手を上げた。段々、任される仕事が増えてきた。

そろそろ残る同期は半分ほどだったが、時間さえあれば声を掛け合って飲みに行く関係が出来上がっていた。緒峯も都合が合えば必ず顔を出したし、飲めば一番近い緒峯のアパートに雪崩れ込むのもしょっちゅうだった。深酒でどんよりする翌朝、緒峯は一人平然として全員にしじみの味噌汁を振舞ってくれた。

目標にした二年が終わる頃、また緒峯が立て続けにヒット作を手がけた。一つはメディア化もする勢いだ。

営業は基本外回り。緒峯と社内で偶然会うなんてことは無い。だからメールでおめでとうと伝えた。

また差が開いた気がして、わざわざ会う約束を取り付けてまで祝福する気にはなれなかった。

その直後の飲み会のことだ。

駅近の居酒屋チェーン店に呼び出されて行って見れば、集まっていたのは男だけ。とはいえ、同期の女性は緒峯ともう一人だけだったから、二人の都合が付かないなら仕方ない。しかしこのタイミングでの誘いは、緒峯のヒット祝いなのだろうと思っただけに肩透かしだった。

が。この会の趣旨は、逆だった。

同期の一人が、自慢げに見せびらかす携帯の画面に映るもの。

ベッドに横たわる、……………これは。

「疲れてここにちょーっと優しくしてやればこんなモンよ。2週間で落ちたね」

「いくらなんでも一ヶ月はかかると思ってたぜ」

「お前彼女はどうすんだよ」

そつだ。こいつは最近、緒峯じゃないもう一人の女性同期と付き合いだしたはずだ。

「彼女はすつげえ大事ー。緒峯は、アレ女じゃねえよ。うわばみだしよ」

「お前男をベッドに連れ込んだのか！」

「あークソ、一ヶ月はかかると思ったのに！！」

「んで、ソツチの具合はどうだったんだよ」

ゲラゲラと笑いこける奴らが、何を言っているのか分からなかった。

それでも携帯の画面が不愉快で、思わず携帯を奪い取って消去した。

「お前、ちょ、何すんだよ！」

勢いあまって他のデータ全部消したらしいが、構うもんか。

「あー、藤埜、お前ひよつとして緒峯に惚れてんの？　ざあーんね」

バキ、と拳に衝撃があつて、つまり考える前に殴っていた。

居酒屋店内での喧嘩騒ぎに、警察も呼ばれ、大騒ぎになった。頭を冷やせと連れて行かれた駅前の派出所で説教された後、今後は気をつけると注意だけですんだ。酔っ払いの顔見知り同志の喧嘩、しょっ引かれたのも初めてならこの程度なのだそうだ。

携帯のデータが残っていたなら名誉毀損で動けるんだけどね、まあ今回は居酒屋のほかの客の証言も沢山取れたから、と、歳のいった方の警官に穏やかな口調で脅され、奴はガクガク首を振っていた。

『個人的感想は、よくやった！』と若い方の警官にサムズアップされて、笑おうとしたら腫れた頬が引き攣れた。

事の次第は社にも知れ渡った。事情が事情だけに、先に手を出した俺は嚴重注意、奴には訓告。その後直ぐに同期はみんな辞めていった。他の女子社員や良識ある男性社員の視線に耐えかねたのだから。もう一人の女性同期は、完全なとばっちりだろうに。

結局は、嫉妬と八つ当たりだったのだろう。緒峯だけが上手くやって、希望でもない営業でくすぶっている自分たちという構図だったのかもしれない。ひよつとしたら八つ当たりされたのは俺もか、

と、上司に叱責された後で気付いた。忙しくしていた俺は、緒峯を最低な賭けの対象にしていたことすら知らされていなかった。

そんな顔で営業ができるか腫れが引くまで休め、と一週間の有給休暇消化を言い渡され、自主的に自宅に籠って謹慎していたところに、無機質な電子音。

渦中ながらも事情を知らなかった緒峯は、誰かから聞いたのか、メールを寄越した。

『件名：R e . おめでとう

本文：あんだバカ？』

上司の苦笑交じりの叱責よりも、堪えた。

戻り道（後書き）

これ、いろいろとアウトじゃないかな、と戦々恐々と致しております。

一本道

ぺしゃ、と顔に白い物が被せられて、我に返った。

何かの布だと気付いて、それから、コレでビールを拭けつてことかと思に至った。

「……大将、これ、台布巾じゃないですか」

注文を取るときですら頷く程度の、後は黙々と料理をならべるばかりのこの店の大将が、一応は氣遣ってくれたらしい。

「雑巾じゃないだけ上等だ」

ひょっとして初めて会話したかもしれない。記念すべき初会話がこれか。渋い声で言われるにはあんまりな内容だ。

「そ、ですね。……雑巾でも文句言えないですね……」

台布巾を握ってシミジミと肩を落とした。

咄嗟にビールをぶちまけて、でもその一瞬、緒峯は自分こそがびっくりしたような顔をした。そして、硬く引き結んだ口元。

あんな顔をさせたのは自分だ。

違うんだ。言いたいのは、もっと別のことはずなのに。

「分かってんならさっさと行け」

……っ！

立ち上がって、慌てて財布を探っていると。シッシと犬を追い払うかのように手を振られた。

「ツケとく」

大将、どうしたんだ。一生分話したんじゃないか。

「ありがとうございます！ 次は必ず！！」

言い終わるのと店を飛び出すのとどっちが早いかな。兎に角、走った。

一度大通りに出たが、タクシーは見当たらない。

緒峯は、もう車を拾ったか。

どうせワンメーターの距離だ、と、最短の道のりを、走った。

ネクタイと上着が窮屈で、赤信号で足止めされたうちに、ネクタイを外して上着を脱いで丸めた。

ビールで張り付く髪が邪魔で、気付けば握り締めたままだった台

布巾で雑に拭いた。

必死に、走った。

途中からは、赤信号でも車がいなければ突っ切った。

これほど必死に走るなんて、久しぶりだ。

もう少し。

あと角二つ曲がれば。

もう直ぐ。

緒峯のアパートが見えた。二階の角部屋。部屋の電気は点いていない。

階段を駆け上がって、インターホンを押した。

「緒峯！ いるか！？」

返事はない。

まだ帰っていないのか。

立ち止まった途端に、汗が噴出した。

冷や汗も半分だ。

もしかして、家に帰らずどこか別の場所に行った？ それともまさか無視されてる？

「緒峯！ 緒峯いないのか！？！」

近所迷惑も考えず、ドアを叩いた。

「いるわよ」

ぼそり、と、後ろから声が聞こえて、見ると緒峯が外階段を上がってるところだった。走り去る車の音。なんだ、いつの間にか追い越していたのか。

「こんな時間にするさくしないでよ。苦情がきたらどうすんの」

「すまん、間違えたんだ！ 違うんだ！ お前の話じゃなくて！」

無然と迷惑そうに言われて、騒いだことを謝るべきと分かっていたけれど、滑り出た謝罪は、その事に関してではなく。

「お前だけの話じゃなくて！ お前と俺が！ 俺たちが！ どうなんだ、ってことを、言いたくて！」

必死に言いきった。

「俺とお前の話をしたいんだ！」

言って、緒峯の顔を見ると。

さっきの思わずといった様子でビールをかけた時と同じく。

口を真一文字に引き結んで、言いたいことを飲み込んでいるような顔だった。

坂道（上り）

何度も入ったことのある緒峯の部屋だが、流石に今は敷居が高い。

「……何してんのよ。早く入ってドア閉めて」

いつもどおりにただの同期を家に上げる緒峯に、胸の奥が苛立った。

「さっき、オレはお前に告白したつもりなんだが」

そんな男を無防備に家に入れていいのか、と問うと。

「アパートの廊下でそんな話、できるわけないでしょ。いいからさっさと上がんなさいよ」

一応、告白を無視されているわけではないらしい。

「……オジャマします……」

いつに無く行儀良く、緒峯のテリトリーに立ち入った。

酔っ払った緒峯を寢室に放り込んで、自分は居間のソファを借り

て寝る。ソファは座面の下が収納になっていて、毛布がそこに入っている。勝手知ったる他人の家だ。朝には、ピンシャンとした緒峯が先に起きていて、朝飯を作ってくれている間に、緒峯が使った気配の残るバスルームでシャワーを浴びて、シジミの味噌汁の朝飯。

普段なら、何の疑問も感じなかったことが、今更ながらありえないことに思えた。

「とりあえず、お茶ね」

二人掛けのダイニングテーブルに落ち着いて、ペットボトルのお茶をグラスで出され、手持ち無沙汰に口をつける。

勢いが殺がれて、少し頭が冷えて、そしてどうして良いのか分からなくなった。

緒峯も黙ってテーブルの向こうでお茶を飲んでいる。

走ったせいかな、やたらと喉が渴いて、一気にグラスを干した。

「……………」

緒峯は黙って二杯目のお茶を注いでくれた。

押しかけたのは自分で、話があるのも自分だ。ココで沈黙我慢大会は、いくらなんでもないだろう。

腹を括った。

「好きだ。俺と真剣に付き合って欲しい」

「がちゃん、と、緒峯がグラスを取り落とした。ワタワタと慌てふためく緒峯に、一先ずキッチンから台布巾を取ってきた。」

「服は濡れてないか？ 床にはこぼれてない？」

「見れば、被害はテーブルの上だけに止まったようだ。」

「アンタ、何いきなり冷静になってんのよ」

「うん。頭が冷えた。さっきは、なんかテンパッたけど。久しぶりに全力疾走したな。スッキリした」

「呆れた、と緒峯が息を吐く。」

「だから、冷静に、もう一度言うけど。俺はお前が好きだ。お前は？」

「ガチャン、と、緒峯が片付けかけていたグラスが床に落ちた。」

「あー、何やってんだよ。割れたぞ」

「バスルーム横の収納に、箒とちり取りがあっただけ。大きい破片を手で拾ってから、箒を取ってきた。」

「新聞紙、広げて出してくれ。割れ物は、ゴミ出し区分どうなってる？」

「……不燃物。土曜日に」

「じゃ、包んで置いとくから」

手早く新聞紙に包んで、電話横の引き出しからマジックを出して大きく『ガラス危険』と書いた。

キッチン奥のカン・ビンゴミの横に纏めておく。

出した筈とちり取りを片付けて戻ると、緒峯はぐったりとダイニングテーブルに突っ伏していた。

「緒峯？　今日はそんな飲んでないだろ？　疲れた？」

「アンタねえ！？　なんでそんな平然としてるわけ？　ウチの筈の在り処まで知ってて、今更真剣にお付き合ひ？」

がば、と顔を上げた緒峯が、また、あの泣くのを堪えているような目をするから。

「先生たちに当てられた。確かに今更かもしれないけど、言わないで現状維持するより、……もっと先に進みたい」

触ってもいいだろうか、と伸ばした手は、避けられることなく頬に届いた。

「好きです。だから、そう言う意味で、オレのこと好きになってくれたらうれしい」

見る見る盛り上がった涙が、それでも往生際悪く零れ落ちずに眦にとどまっている。

「……………あんだ、バカ？」

頬に触れていた指が、涙に濡れた。

「うん。素直に言うてくれないだろうとは思ってたけど。『バカ』に愛を感じるな」

「な、ア、アンタ、バ」

三度目のバカは、途中で途切れた。

坂道（下り）

昨日はスイマセン、と頭を下げると、大將は無言で頷いて、カウンターに空いている席を顎で示した。

この時間、いつもなら空席も目立つはずなのに、なぜか今日は殆ど満席で、カウンターの真ん中二席だけがちょうど空いていた。

いつも以上の無表情が、怒っているのか不機嫌なのかと冷や汗をかく。

「あれはね、笑うのを堪えてるのよ」

緒峯が解説してくれたが、本当だろうか。

何か頼むよりもさきにビールが（昨日頭から被った銘柄だった）、目の前に並べられた。

「はい、カンパニー」

上機嫌でジョッキを掲げる緒峯にあわせて、申し訳程度にジョッキを持ち上げる。

「はい、そこら辺で聞き耳立ててる人たちにー、報告がありまーす」

ぶう g y x y t k ? ! ?

「正式に、結婚を前提に、お付き合いすることになりました!」

ひゅう、とか、やったな、とか、とうとうか、とか、おせーよ、とか。

「げほ、ちょ、なに!？」

「いやー時間かかったな。お前らぐずぐずと、じれったいったらねえよ」

「緒峯ちゃんもすっかり諦めてたからなー、男がガツンと行かないでどうする」

「まったくやきもきさせてくれるぜ」

周りから口々に野次られた。なんなんだ一体。

「ほら、俺ら常連はさ。緒峯ちゃんの事情とか、ナントナク知ってたからよ。お前と連れ立って来るようになって喜んでたんだよ。これで緒峯ちゃんも一安心ってな」

後ろのテーブルのサラリーマンが言う。

「なのにお前、なんだかグズグズと、ハッキリしねえだろ」

横の上品なスーツが砕けた口調で言葉を被せる。

「けどなー、緒峯ちゃんが、余計なこと言うなって釘刺すもんだか

らよ」

カウンターの端からも、なにやら。

「皆、黙って見守ってた」

大将！？ その口の端がほんの僅かに上がったソレが大将の笑顔ですか？

「あーもーみんなして面白がってたくせに。異性間で友情は成り立つかという命題、なんて言ってたのは誰よ」

上品スーツがニヤリと拳手した。

「結論は持ち越したな」

アウェイだ。俺一人が完璧なアウェイだ。そりゃこの店は前から緒峯の行きつけだったけど。

ちよつと吹いたけど半分以上は残っているビールを、一気に飲み干した。

「「おおー」「」

何故か拍手が沸いた。ドン、とジョッキをカウンターに叩きつけ、立ち上がる。

「なんかご心配かけていたようですが！ 今後は！ 緒峯は絶対幸せにしますからー！！」

自棄になつて、店内をぐるりと見回して、宣言した。せめて酒の勢いを借りるくらいは大目に見て欲しい。

隣で緒峯が啞然としていたので、ぐいと引き寄せて口付けた。

店内、やんやヤンヤの大騒ぎになった。

大將がオゴリだと出してくれた皿は、いつもの居酒屋メニューにはない洒落たフレンチ風で、旬の大振りの牡蠣が素晴らしく旨かった。添えられたアスパラとパプリカのグリルはカラフルで、目にも鮮やかだった。

寡黙な大將が、無表情なりに祝福してくれているのを実感した。

「……アンタって、ホント、吹っ切れた後が予測不能よね」

酔い覚ましに、緒峯のアパートまで歩いて帰る。

普段緒峯と飲むときに、送っていくから、と理由をこじつけて、深酒しないよう自戒していた。

酔って、理性をなくすわけにかなかったから。

だから、ここまで飲んだのは、実は久しぶりだ。

「んー。そうかもなー。みんなの前でキスしたのは、ちょっとやりすぎだったか？」

火照った顔に、夜風が気持ちいい。

「アンタ、あの時はまだ酔ってなかったでしょ。どう言い訳するの」
緒峯も結構飲まれたのか、夜目にも頬が真っ赤だ。

「あれはー。ほら、誓いのキス？」

幸せにするって宣言したし。アレくらいやってもいいだろ。

「……………やっぱアンタ、かなり酔ってるでしょ」

そうやって睨まれても、何故か嬉しくて仕方ない。

「ん。酔ってる。だって、もう我慢しなくていいんだろ」

ふわふわと浮かれた気分のまま、傍らの温もりを抱き寄せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5572s/>

萌え絵師への道

2011年11月24日13時54分発行